

---

# 氷室研究所

優楽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷室研究所

### 【Nコード】

N5619E

### 【作者名】

優楽

### 【あらすじ】

主人公の田丸由宇が編入した大学で、叔父の氷室教授の研究チームがちょっとした事故を起こす。それに私が巻き込まれたお話。その研究テーマがずばり『性転換』であった。そして由宇は からへ…。由宇はこの先どうなっていくのか…？

## 001 メンバー

とある大学の研究室……。今年の4月から大学生になる。といっても、短大から系列の大学に試験的に編入する制度を始める事になり、その一人目選ばれたのが私田丸由宇（ユウ）だ。ただ単位の関係で2年生からの編入となった。

その中の一人に選ばれたのも、遠縁の氷室教授がいたからだ。遠縁と言っても、私の記憶の中では一度も登場したことがない。

そして御礼というわけではないが、春休み返上で研究室に手伝いに来ているのだ。そこで私は大変な事に巻き込まれてしまう……。

「失礼します。」

「どうぞ。」

こっちを見る視線は3つ。男性2女性1の視線。

「どうぞ中入って、田丸さんですよ。」

「はっ、はい。」

「先生から聞いてますよ。とりあえずここ座って。」

「すみません。」

「私は葵ひかり。学年は1つ上だけど年は同じだからよろしくね。」

「田丸由宇です。みなさんよろしく願います。」

「葵って呼び捨てで構わないから、気軽に呼んでね。」

「はあ…、じゃ慣れるまで『葵さん』で…、」

「『さん。』とかいらないって!」

「はあ…。」

ちょっとボーイッシュな感じの気さくな子だ。同じ年齢の女の子がいるのは心強いし、有り難かった。でも初対面で呼び捨ては…。

「よろしくね。インスタントしかないけどコーヒー飲むでしょ?」

「うん。ありがとう。」

「で、あっちで色々準備してるのが、このリーダー引き継いだ真木翼君。私はマッキーって呼ばせてもらってる。で、こっちの男の子が、」

「三崎司です。4月から同じ学年なんでよろしくお願いします。それに俺も今日からなんで。」

「どうも。」

「真木君は私と同じ学年なんだけど2浪してるから、私達より2つ上よ。」

「はあ…。」

「おい！何も今バラす事ないだろ？」

「いずれはバレるんだからいいじゃん！」

『チツ。』と舌打ちしてる。

「はい、コーヒー。」

「ありがとう。」

「で、来てもらってあれなんだけど、先生1週間位休むってさ。」

「えっ？」

「なんでも沖縄に魚取りにいくとかで、さっき連絡がきてね。」

「さっ、魚？そうですか…。」

「だからここには4月からきてくれれば構わないから。」

「えっと…、じゃ、今日は？」

「あ…、もし用事とかあれば帰ってもいいよ。」

「…。」

「暇だったら、これからマウスに薬を投与するから見ていけば？」

「先生いないんですね？」

「ファックスで指示きてて、それやったら帰れるから真木君が巻きでやってるとこよ。」

『真木が巻き…。』葵は渾身の親父ギャグのつもりか…？しかも笑顔でこっちを見てる。ハニカミ笑いしか出来なかった…。

「葵ダジャレかよ？それつまんねえよ。田丸さんも困ってるじゃんか！」

「私なりに和むかと思って気を使ったつもりだったんだけど…。」

「困らせてどうすんだよ？」

「だね…。」

「いや…、困ってないです…。二人のやり取りも面白いですし…。」

「フォローしてくれるなんて田丸さんって優しいね。で、どうする？見てく？」

「はい。是非。」

この選択が私にとって凶と出たのだ。

## 002 人工？

薬の投与は大きなプラスチックの水槽みたいなケースで行われるようだ。手を入れて作業するところは、長い手袋状のものが中に伸びていて、中と外を完全に遮断してる。

既にマウスの籠はケースの中に入っている。そこに三崎君が、冷蔵庫みたいな保管庫から試薬を運び出しているとこだった。

「なんか鍵とかもかかって嚴重ですね？劇薬なんかですか？」

「先生の指示だからね。今回は薬作る段階から慎重だったみたい。先生が作った試薬だし、それに私達が鍵扱えるくらいだから、全然劇薬とかじゃないと思うよ。ねえマッキー？」

「えー？」

と真木さんが振り向いた時に後ろに立っていた三崎君とぶつかって、薬の入った瓶を落としてしまった。

「あっ！？」

パリンという音とともに液体が飛び散り、異臭が漂ってきた。

『臭っ！』と思ったのもつかの間、意識が遠くなつて…、次に気付いた時は葵に揺り起こされたところだった。

「田丸さん！」

「うっ…、」

「良かった気付いた。」

目を開けると葵の心配そうな顔が飛び込んできた。

「葵…さん…。」

「大丈夫？」

「私…。」

「ちょっと窓開けてくるね。」

葵はそう言うのと窓を開け始めた。部屋の換気をするためだろう。私は体を起こすと、そこには横たわっている男2人がいた。

「二人は…？」

「起こしてみてくれる？ガラスの破片あるから気をつけてね。」

「はっ、はい…。」

確かに瓶の破片が飛び散っていた。蒸発したのか液体は見当たらない。

「三崎君。三崎…。」

『ん…？』私はボーツとしながらも、三崎君の体を揺り動かそうと、肩や胸の辺りを触っていた。が、左手で触った彼の胸に違和感を感じたのだ。

えっ？おっぱい…？女の子？何？太ってる男の子じゃないよね…、



っていうかむしろ痩せ型だし…。

「田丸さんどうした？起きない？」

「いや…、あの…、」

「ん？」

窓を開け終わった葵が近寄ってきた。

「三崎君の胸…、」

「胸？熱でもある？」

葵が三崎君の胸を触って私の顔を見た。『えっ？』と言って再確認している。『えっ？えっ？えーっ！？』しまいには少し揉み始めた。

「女の子っぱい胸だね…。て言うかむしろ女…。」

「はい…。」

「ニューハーフって奴かな？最近の整形の技術ってすごいって言うし…、小さいけど本物っぱい…。」

「はい…。」

「下も工事済みかな…？」

「触るんですか？」

その時真木さんが気付いたらしく『ウッ…。』と声を漏らした。

「マッキー！」

「ああ…。俺どうしたんだ…。」

「三崎君が薬落として、それ吸い込んでみんな気を失ってたみたい。」

「あ…。そうか…。なんか少し気持ち悪い…。」

「大丈夫？医務室行こうか？」

「ん…。ちょっと様子みよう…。お前ら大丈夫なんか？」

「私は二人より遠かったから、そうでもないみたい。田丸さんはどう？」

「多分…。平気です。」

「そうか。三崎は？」

「あつ…。そうだ。三崎君がね…。」

「三崎がどうした？」

「いや…。なんていうか…。」

「何だよ？はつきり言えよ。」

「いや…、今回の事と関係ないけど…、ニューハーフっぱいのよ。」

「はあ？ニューハーフ？何言ってるの？」

「胸があるの。それも人工の胸っぽくないのよ」

「…マジ？顔とか全然男顔じゃんよ？」

「マジだって！嘘だと思っなら触ってみれば？」

「さっ、触れるかよ！」

「照れなくてもいいじゃん？」

「チツ…。お前らこの事は黙ってるよ。人には秘密にしておきたい事があるんだから。」

「何よ急に…？」

「だっ、だから…、お前らさ…、とにかく三崎起こそう。」

「うつ、うん…。」

秘密か…、カミングアウトしたならともかく、自分が女になりた  
いって思ってる事が他人にバレたらイヤだろうな…。

ここはやっぱり見なかった事に…。とにかく三崎君を起こす事  
になった。

### 003 男性化

三崎君が起きたあとは、変な空気になった。3人共胸の事を聞けずにいる。

「先生には俺が報告しておくよ。」

「頼んだね。」

「三崎君は気にしないでいいからね。」

「はい…。すみませんでした。」

「実質今日からメンバーになった人に、試薬持ってくるように頼んだ俺の責任だから…。」

確かに…、ん…？実質？て、事は以前に三崎君はきた事があったのか？

「すみませんでした。」

「大丈夫だつて。ここはマッキーに任せておけば大丈夫だから。」

「はい…。」

「あと田丸さんもゴメンね。気分悪くなったりはしないと思うけど、ヤバイと思ったら病院行つてね。」

「はい。」

「じゃ、瓶の破片片付けて帰ろうか？」

「あつ、俺やります。」

三崎君は掃除道具を持ってきて、ささっと掃いてガラス用らしきバケツに破片を入れていた。

「二人が次来るのは、4月から大丈夫だからね。」

「分かりました。」

ラッキー！アパート探してバイトも探せる。そして一応私は、葵と携帯電話の連絡先を交換させてもらって、飯住まいのウィクリーマンションへと帰る事になった。

賃貸住宅雑誌とアルバイト雑誌を買い込み、コンビニの弁当を食べて布団に潜り込む。その日は3月だというのに寝苦しい不思議な夜だった…。

その理由は、三崎君に起こっていた体の変化が私にも起こったからである。

その変化とは…、その変化は体の性転換である。寝てる間に私の体は完全に男性化していたのだ…。

朝起きて伸びをしようと胸を張った瞬間、ブチブチブチーとパジャマのボタンが取れる音と、ビリビリと破ける音がしたのだ。

『何？』と思ってパジャマを見ようと下を見ると、はだけた胸が目に入ってきた。あれ？胸が…、胸が無い…？

『えーっ！』何？何だ…？胸を触ってみたが明らかに男のような胸だった…。小さかったが丸みのあった私の胸が…。

その場に立つてみると、今度はパジャマの下のお尻の辺りからビリツと嫌な音がした…。そして破けたパジャマを脱いでいく段階で、完全に男の体だという事が分かった。朝の男の生理現象が女性物の下着の下で誇張しているのだ。

確かに先週地元から出てきて以来、彼氏と会ってなくて多少欲求不満なのは感じていたが、こんな変な夢を見るとは…。と思ってボーツと座っていたが、全然夢が進まない。まさかりアル…？

頬を摘んだり引っ張ったり…。痛くない…。ヤバイ、意味分かんない…。

辺りをグルグル見渡していると携帯電話が鳴った。葵だ。昨日登録した葵の名前が携帯電話の画面に表示されている。受話状態にして耳を当ててみると、

「もしもし？」

葵の声じゃない…。明らかに別人で男の声だ…。私は声が出せなかった。

「もしもし？田丸さん？」

私を知っている。それに葵の携帯電話からだし…。

「…。」

「葵だけど、聞こえてる？」

「はっ…、はい。」

自分の声まで男の声音だった…。

「良かった…、大丈夫？その声の感じだと田丸さんも男になってる？」

田丸さんも…、も？

「はい…。」

この時頭の中を嫌なイメージがよぎった。葵も男に…？

「やっぱり…、今、マツキーから電話あってね、マツキーもそうみたい…。」

『マツキーもそうみたい…。』って？真木さんも…？えーつと女になったって事か？

「あつ、あの…。葵さんも体が男になって、真木さんが女になってるんですか？」

「あの薬のせいね。」

「薬って…？昨日、割った瓶の？」

「そう…。」

「これから私どうしたら…？」

「それはこれから会って話そう？今マツキーがウチに向かっているとだから。そのあと着替え持ってあなたのところ行くから住所教えて？」

今の私には選択肢はないようだ。素直に住所を教えて二人の来るのを待つ事にした。

待つ間にお風呂に行つて鏡を覗いた。そこには私の顔の原型を留めた、ジャニ系のイケメンが映っている。

「ヤバッ！惚れそう…。」

そんな独り言を言つてる場合じゃない。二人が来るまで着る服がない。サイズが一回りか二回り大きいのだ。今の格好は、女性物の下着を履いてる変態男といったところだ。

布団に包まって二人を待つ私は、色んな事を考えていた。あの薬があれば元に戻れる？もしくは解毒剤みたいなものがある？まあ教授がいるからなんとかなるだろ！と軽く考えていた。



## 004 理想の異性

ソフトマッチョまではいかないが、結構しなやかな筋肉をしている。骨太までではないが、女の時よりゴツゴツしてる様にも感じる…。

恐る恐る下着の中の突起物も確認してみた…。『キモッ!』と思いつつ、『エッチの時はこんなのが私の中に入りにしてたんだ…。』と、興味から触ってみる…、と言っても摘むようにもつだけ…。カッチカチだ…。袋の方は…、こんな感じか…。

私の男性歴は1人だけ…。初体験も18才と今時の子にしては遅い部類だろう…。その彼とは2年近い付き合いなのだ。

ピンポーン。部屋の呼び鈴が鳴る。覗き穴から見るとモデルっぽい女性と体格のいい男性の2人が立っていた。

「どちら様ですか?」

「葵です。」

男の方が答える。あれっ? 確か葵は小柄な感じの背格好だったが…。バスタオルを腰に巻き付け、体をチエックしてドアを開けた。

「ほーっ、ジャニーズ系だ? 格好いいね。」

私は二人を見て目を疑った。

「本当に真木さんと葵さん?」

「ああ…。中入っていい?」

「あつ、どうぞ。」

二人を中へと入れると、開口一番、

「狭っ！」

「ウイクリーマンションって狭いね。ビジネスホテルの方がいいんじゃない？」

「いや、マンスリーで契約させてもらってるから、こっちの方が経済的で…。」

「賃貸住宅雑誌あるじゃん。新しく住むところ探してるんだ？」

「はい…。でも中々いいのが無くて…。電話しても昨日決まりましたとかばっかで…。」

「この時期はね…。学生が部屋見ないで決めちゃうからね…。」

「あつ、はい、服。」

「ありがとうございます。」

「サイズは…、多分前の俺くらいだから大丈夫だね。」

「そう言えば真木さんって、少し小さくなりました？」

「少しね。葵なんかデカくなりすぎだし。」

「確かに…。」

真木さんの服だと少しキツそうだ。

「下着は一応新品持ってきたから。」

「どうも…。じゃ早速着替えてきます。」

そう言つてユニットバスへと向かった。後ろからは『本当になんにもないね。』という会話が聞こえてくる。実際着替えくらいしか持つてきてない。あとあるのは、こっちで買った布団くらいなものだ。

バスタオルを取り、今履いてる女性物の下着に別れを告げる。そしてトランクスを取り出し履いてみた。今まであつた締め付け感がなく楽チンだ。

Tシャツにパーカーにジーパンを履いて、部屋へと戻った。

「本当にジャニーズ系だね。肩まである髪がまたいいじゃん！」

「うん。格好いい！」

「そんな褒めないで下さいよ。照れるじゃないですか？」

「いや、本当だつて！田丸さんはジャニーズ系が好きなんだね。」

「えっ？どうゆう意味ですか？」

「理想の異性つてやつ？」

「はあ…。」

「俺の好みはモデル体型のスラッとした感じで、」

「私の理想の異性はガッチリしたスポーツマン。」

「で、田丸さんの今の感じを見ると、いかにもジャーニーズ系って感じだよ。」

「はあ…。」

確かに真木さんは綺麗な感じでまとまってるし、葵は爽やかなスポーツマンに見える。要は理想の異性に近付くって事みたいだ。

「じゃ、行こうか？」

「えっ！どこに？」

「研究室。三崎君も気にかかるんだけど、連絡先交換してなくて、どうしてるやら…。」

「そうだ！私達元に戻るんですよ？」

「どうだろ？」

「えっ？」

「さっき、葵と話ながらきたんだけど、同じ薬が学校にないような気がするんだよ。」

「えーっ？」

「先生の事だから配合データの取り忘れないと思うけどね。」

「じゃ、そのデータがあれば同じ物が作れると…?」

「多分ね。ただ同じ効果が得られるかどうかは分からないけどね。」

「そんな…。」

「まあ、先生が帰ってくるまでの辛抱だよ。」

「あつ！そういえばいつ帰ってくる予定でしたっけ？」

「来週？あと5日後かな…?」

「それまでこのまま?」

「あと、薬の材料がすぐ手に入るかとか、調合してどのくらい時間おけば完成するかとかにもよるけどね。」

「じゃ最短でも…、」

「1週間から10日かな。」

「長かったら?」

「データが無くて、偶然出来たものだったら一生の可能性だって…。」

「嫌です!」

「可能性だつて！」

「そうよ田丸さん。ここはポジティブに考えようよ。」

「ポジティブって…、」

「だってこんな体験してるのって私達くらいじゃない？」

「まあ…。」

「だったら戻るまで、楽しくやろうよ。」

葵はポジティブ過ぎる。寝る前まで女だったのに…。どうなっちゃうの…？

## 005 グラドル

学校までは真木さんの友人の車で移動になった。って言うか借りたって事はその友人に会ったわけで、真木さんを見て理解してあげたのであるうか？普通に考えたら…、理解しがたい事柄だけど…。考えてみたら真木さんの服は誰の？身長は男性の時とそんなに変わらない160センチ台後半位なのに、明らかに女性物の衣類だった。葵の元の身長は150センチ位だったはず…。体形が違い過ぎる…。

学校は春休みだけあって寂しい感じた。主のいない校舎は静か過ぎて、逆に薄気味悪い感じだし…。

私達は車を停め研究室まで話しながら歩いた。話題は真木さんの胸のサイズだった。悔しい話だが女性だった私より大きい事は確かだ。計ったわけではないから正確には分からないが、自分で持ち上げた感じだとDカップ位はあるらしい。羨ましすぎる。って言うか悔しい…。

研究室の前に着くと1人の女性が立っていた。服装から年齢を察するにオバサン？

「あの…、どちら様ですか？先生に…、教授に用事なら来週まで帰ってきますけど。」

「あつ、すみません。それではここに出入りしてる学生さんと連絡取りたいのですが…。あなたたちはこの？」

「あの、失礼ですが、どういった御用件でしょうか？」

「失礼しました。私、ここに昨日出入りしていた学生で、三崎という者の母です。」

「三崎君の…。」

「マツキー中入ってもらったら？」

「あつ、すみません。どうぞ。」

「それじゃ…、あなたたちがこの研究室に出入りしてる学生さん？」

「まあ…、複雑な事情はあるんですが、そうですね…。」

「複雑？」

「まあ、どうぞ。」

中に入って話を聞くと、どうやら三崎君は昨日の夜のウチに完全に女性化してしまったらしい。三崎君は実家住まいだ。

お母さんは、一緒に夕飯を食べている時に、変化していく息子を目の当たりにしたらしく、びっくりしたそうだ。当然だろう。今も理解は出来ないが、親としては男に戻って欲しくて、ここに来たらしい。

「なるほど…。でも薬は三崎君が割った瓶でおそらく最後なんです。」

「えっ！すみません。あの子が悪いのですね。」

「そうゆう意味で言ったわけではありません。私達にも責任はありま



す。」

「三崎君には液体が少し体にかかったから、変化が早かったのかも  
しれませんね。」

「えっ？それは…？」

「私達も同じ症状が出てるんです。同じ被害者なんですよ。」

「あなたたちも…？それじゃ…、」

「はい。でもお母さんこの事は他言無用でお願いします。」

「はあ…。」

「この事が外部に漏れれば、三崎君を含め研究材料にされかねないので。」

「研究材料？」

「要はモルモットです。」

えっ！？考えてもみなかった…。でも確かにこのままだと有り  
得る…。

「お母さんの他に知ってる人は？旦那さんとか？」

「内の人は単身赴任中で家にはいません。知ってるのは私だけです。」

「そうですか。それではくれぐれもお願いしますね。」

「はい…。それで元に戻るんですよね？」

「それは俺達にも分かりません…。」

「そんな…。」

「すみません。それが現状で…。俺達もどうしていいか…。」

「じゃ、まずは先生に連絡してみては？」

「先生つていまだに携帯電話持ってない人なんで、まったく連絡付かないで私達も困ってます。」

「真木さん昨日のファックスの番号は？」

「昨日、電話したらコンビニだった。」

「そっか…。」

「お母さん三崎君はどんな感じですか？」

「ん…、発育し過ぎのグラビアアイドルみたいな感じですかね…？」

「発育し過ぎ？昨日触った感じではAカップ位だったに…、真木さんのDカップを越えたか？二人して羨まし過ぎる…。」

「いや、外見じゃなく内面と言うか、ヘコんでませんか？俺達も朝

起きてからの事で、と言ったらいいか分かりませんが…。」

「司なら昨日の夜から、部屋で引きこもって出て来ないの。今もど  
うしてるか…、心配で…。」

「ですよ…。今度ウチらが遊びに行きますよ。同じ境遇の俺らが  
いけば、少しは気が紛れるでしょう?。」

「お願いします。では早速…。」

「いや、ちょっと研究室内を少し調べてみようと思うので、お伺い  
するのは明日以降にでも…。」

「そうですか…。」

調べる?何か手掛かりでも探すのか…?何か気になる事でもある  
のだろうか?

## 006 カミングアウト

三崎君のお母さんは、住所と携帯電話の番号とアドレスを交換して帰っていった。

「マッキー今日はこれから何するつもり？」

「何って…。」

一瞬私の方をチラッと見た気がした。

「パソコンの本体を持って帰ろうと思って。」

「そんなのどうするの？」

「先生の事だから、ここ以外にもデータのバックアップはあるだろうし、持ち帰って調べてみようと思ってさ。」

「そのパスワード知ってるの？」

「まあ…。」

「じゃ、ここで良くない？」

「ゆっくり落ち着いて見たいから家でやるよ。」

「そうなの？」

「……。本当は保険の意味合いが強いけどね。」

「保険？」

「色々考えられるだろ？先生の親戚の田丸さんの前で言うのもなんだけど、俺らが先生に裏切られる事だつて考えられるし…」

裏切る？

「もし先生がバックアップデータ持ってなかったら、その時はウチの方が有利なるし。」

「まさか…」

さつきチラツと見たのはこのせいかな…。

「私なら気にしないで下さい。親戚といっても遠縁で、私には教授の記憶はなくて、顔すら分らないですから。」

「そうなの？」

「はい。」

「そう…。マッキー他は？なんか持って帰るものある？」

「今んところは無いかな…。」

「そう…。ねえ、マッキー。」

「何？」

「言っておきたい事あるんだけど…。」

「どうした改まって？」

「実は私ね…、このままの体でいいかなって…。」

「男のままって事？」

「そう…。」

「はあ？何だ？葵は何を言い出したんだ？」

「実は私…、」

「性同一性障害？」

「…。」

「凶星？」

「気付いてたの？」

「まあな。人を見る目が他の子と違うよ。男を見る目も女を見る目も…。それに2年間一緒にいて、スカート姿を見た事がない。」

「だからさ…。」

「構わねんじゃね？お前がそのままでもいいなら…。」

「マッキー…。」

「ウチの先生の研究に興味ある奴は、多かれ少なかれそんなもんさ。冷やかしも含めてな。」

「あの…、質問してもいいですか？」

「何？」

「教授は何を研究なさってたんですか？」

「えっ？田丸さんは何も知らないで来たの？」

「はあ…。」

「あー、じゃあ、田丸さんはカクレクマノミって知ってる？」

「はあ…。あのちょっと前にアニメ映画になったやつですよね？」

「そう。じゃ…、あの魚って自ら性転換するの知ってる？」

「へーっ、そうなんですか？」

ん？

「群れの1番大きいメスだけが、子供を産む事が出来るんだ。群れの中で次に大きい奴だけがオスで、あとは全部メスなんだ。」

「はあ…。」

「そのボスメスが死んだ時、群れの2番目に大きな体の奴がボスに

なれるんだが、次に大きいのは？」

「オス…？」

「そう。そいつがメスに性転換してメスになり、次にでかい奴がオスになる。」

「へっつ。えっ？つ、つまり先生は…？」

「性転換の研究さ。あと自然界では、植物や魚類、海老の一部でもその現象は見られるらしいよ。」

「つまり…、」

「研究は一応成功してたって事かな。今のところ後遺症っていうか、弊害もないし人間に投与しても平気そうだし。」

「でも許可なく人体実験したら…、」

「今回は事故だよ。それにこんなの今の日本で許可が下りるわけがない。」

確かに…。

「でもこんな薬が世間に出回ったら、人権的に…、いや、人道的にダメじゃないですか？」

「葵みたい子にはありがたい薬さ。」

「それは…。」



「体にメスを入れなくてすむし、生殖機能だつてもしかしたら、変化後の体通りに機能するかもしれない。」

「…。」

「ホルモン剤を投与することによる体の負担もなくなる。いい事の方が多くない？」

「そつか…、でも悪用される可能性だつて…。」

「確かに…。でも氷室教授が見つけなくても、いづれ誰かが発見する。いつか誰かが発表して良かれ悪しかれ世の中に出るなら、少しでも早く出た方がいいでしょ！苦しんでる人の為になつた方が良くない？」

見方を変えれば、どっちも正解なのかもしれない…。でも私達レベルで議論されるべき問題ではない気がする…。

## 007 リーダー

葵のカミングアウトを真木さんは、サラッと受け止めていたが、私にとってはセンセーショナルだった。

「そうゆうマッキーは？性同一性障害？」

「俺は…、高校の友人がこれだった…。奴は真剣に悩んだ揚句に自殺したよ。最後の最後に俺には相談してくれたけど、力になれなかった。俺は話を聞くくらいしか出来なかったからな…。」

「じゃ…。」

「でもそれはマッキーのせいじゃないじゃん！」

「どうだろ？俺の顔や態度に嫌悪感が出てたかもしれない…。当時の俺は、これについてよく理解してなかった…。」

「…。」

「それから少しは関心を持つようにはなったけど、俺自身はノーマルさ。奴には男友達としてしか接してやれなかった。」

「そっか…、」

「一旦俺ん家行こうか？」

「ゴメン。これ運んだら別行動でいいかな？」

「どうした？」

「会いに行きたい子がいて…。」

「分かった。田丸さんはどうする？」

「一人は不安なんで、付いていきます。それにあのウィークリーマンション帰ってもやる事ないですし。」

「OK。じゃ、行こう。」

そして葵を駅で降ろして、車は真木さんのマンションへと移動した。22歳の若者がなんてとこ住んでるんだ…？お嬢様だったのか？いや、以前は男だから、御曹司と言った方が正解か。

「どうぞ。」

「立派なマンションですね。」

「貢ぎものだけだな。」

「えっ？貢ぎ物？」

「まあ…。」

「真木さんって…？もしかしてホストかなんかですか？」

「昨日までな。」

「昨日まで…。」

「この体と声でやるなら、ホストじゃなくてホステスかキャバ嬢だろ?」

「まあ…、じゃ、このマンション出てかなきゃなんですか?」

「だ…な…。貯金ならそこそこあるから引越したいけど…、問題が一つある…。」

「何です?問題って?」

「不動産契約する時に身分証明書だすだろ?」

「はあ…。」

「全部性別が男になってるから、今のこの体じゃ契約してくれなさそうじゃね?」

「確かに…、じゃ、私が真木さんの振りして契約しましょうか?写真なしの身分証明書でなんとか契約出来ませんか?」

「そつか…。じゃ…、逆にこっちが田丸さんの代わりに契約すればいいって事だ。」

「ですね。」

「なんとかかなりそうだな。」

「はい。」

「そうだ！田丸さんとサイズ変わらなそうだから、服とか靴とか持っていくなよ。」

「ありがとう。助かる。」

「ベッドルームのクローゼットに沢山あるから適当に選んで。」

「うん。」

クローゼットの中の普段着の方は学生らしい感じだが、ぶら下がってるスーツ系はいかにもホストそのものだ。

洋服を選んでいると、居間でパソコンのセッティングをしていたはずの真木さんが、いつのまにか後ろにいた。

「田丸さんバイトは？」

「うわっ！びっくりした。驚かさないで下さいよ。」

「わりいわりい…、で、バイトなんだけどさ。」

「ん？」

「いや、部屋にアルバイト雑誌あったからさ。仕送りだけで生活していけるのかな？と思ってさ。」

「仕送りなんか無いですよ。バイトは早急に探さないとダメですね。」

「だったらホストクラブ紹介するよ。履歴書いらないし！」

「ホストは…。」

「その体で履歴書の性別欄の女に丸するわけ？どうみても男に丸しなきゃだろ？」

「そうか…、確かにこのままだと不動産も契約出来ないが、バイトも出来ない…。ここはバイトのつもりでやってみるか…？ていうか、その選択肢しか無いのか…？」

「今なら俺のお客さんも紹介出来るし。」

「少し考えさせて下さい。」

「ん、分かった。やりたくなったらいつでも言うて！」

「はい。それより、バッグか旅行ケース貸してもらえませんか？」

「そつか、気付かなくて悪いな…。そうだ、いつその事、田丸さんがココに住めば？」

「えっ？でも出てかないといけないんでしょ？」

「俺の親戚って事にすれば、いけない事もないよ。従兄弟だな…。うん、そうしろ！」

「真木さんは？」

「暫くは一緒に住んで、次決まったら荷物を移動させる。って言うても持っていける荷物は…、ないか。」

「暫くつて…?」

「1・2週間だよ。」

「はあ…。」

「ホストクラブには俺の親戚って事で頼んでみるよ。」

「いや、まだ…。」

「そうと決まったら、ウィークリーマンションに荷物取りに行こうか?」

「はあ…。」

真木さんは結構強引な人だった。なんだかいつの間にかこの人のペースにはまってる…。

## 008 良き理解者？（前書き）

多少エツチな表現があります。嫌いな方は読まないでください。



## 008 良き理解者？

「朝来た時も思ったけど、本当に荷物少ないよな？」

「向こうにあつたものは家電から何から、ほとんど処分してきましたから！」

「もつたいない。」

「それなんで、持ってきたのは本当に服だけで、必要な物は、実家に送っちゃいましたから。」

と笑いながら言つてやった。なんだか真木さんとは碎けて話せるようになってきた気がする。そのうち私も『マッキー。』って呼んでたりして…。

「そうか…。じゃ…、持つてく物はこんだけ？」

「何度も確認しないで下さいよ。」

「ははは…。じゃ、行こっか。」

「はい。」

帰日も真木さんの運転だった。これで検問なんてあつたら、免許証偽造で捕まっちゃうのか？

「ところで真木さん。」

「何？」

「その服って、葵さんのじゃないですよ？」

「…うん。」

「誰のですか？」

「これは、友達の…、」

「友達の？」

「ニューハーフの友達がいてな、そいつに事情話したら車も貸してくれてさ。」

「はあ…、この車の持ち主か…、納得。」

「何が？」

「いや、だって、朝の短い時間で事情を理解してくれる友達って、すごいなあ…と思ってたから。ニューハーフさんなら納得です。」

「そつか…。そいつには、研究内容を話した事があったから、意外とすんなり受け入れられたっていうか…。」

「ふん。でもなんか都会ってすごいですね。」

「何が？」

「私の田舎でニューハーフなんていませんでしたよ。それに性同一

性障害の方に接する機会があるなんて…。」

「そう…。」

「はい。そうだ！女になった真木さんと会った時のリアクションどうでした？」

「そりゃー驚いてたよ。胸揉まれて、股に手が伸びてきて。そんでもってすんげー喜んでたよ。」

「喜んだ…？そうですよ…。でも実用化されるとして、どれくらいの年月かかるんですかね…？」

「どうだろな…？でも奴らは闇ルート期待してんじゃないのか？」

「闇…。なんか危険な臭いしますね。」

「なんか楽しんでない？」

「だって、もう思いつ切り関わっちゃってますもん。」

「だな…。」

「実験台になつてでもいいからって人も、現れそうじゃないですか？」

「これで子供が産めればその業界の人達も喜ぶんだろうけどな。」

「出産ですか？」

「うん…。完全女性化が彼女達の最終目標だろうから…。性転換手術を受けたところで、子供を産めない現実はどうしょうもないからな。誰もがブチ当たる壁らしいし…。」

「そっか…。」

「なあ、家帰ったら頼みたい事あるんだけど。」

「何ですか？」

「オナニーしてみてくれない？」

「えっ!？」

「いや、精子が出るかだけでも知りたいんだ。」

「…。」

「こっちは生理はくるかもしれないけど、女性の排卵なんて分からないだろ？」

「まあ…。」

「本当は、出た時に無精子症かどうかにも調べたいけど専門外だから…。だから出るかどうかだけでも知りたいんだ。」

「なんで私が…。」

「頼む。」

「なんかさっき言ってたモルモットの気分になってきました…。」

この発言のあとしばらく沈黙した…。

「そうだな…。わりい…。忘れてくれ、会って二日目の人に頼む事じゃないよな。」

「…。やります。」

言ってしまった…。

「えっ？」

「やりますよ。誰かがやらなきゃですよね?。」

「マジで? 助かる。」

「そのかわり…。」

「うん。そのかわり何?。」

「やり方分からないから教えて下さい。」

「あつ…、そうか…、そうだな…。分かった。」

それから真木さんのマンションにつくまで、またしばらく沈黙が続いた…。なんて恥ずかしいんだ…。

エレベーターで真木さんの部屋のフロアに行くと、真木さんのドアの前に女性が一人立っていた。

「あの人って、貢いでくれた人じゃないですか？」

「いや、あれは違うよ。」

「彼女？」

「違うって！さっき話してた子だよ。」

「さっき？」

近付くところちに気付いたようだ。

「よう！店出なくていいのか？」

「まだ少し時間あるから平気！それより何処行ってたの？そんな  
い男連れて？」

ん……？なんか違う？

「さっき話してた浜崎愛だよ。旧姓浜崎茂。」

「どうも。茂です。」

「えっ？茂？こっ、この人がニューハーフ？」

「そうです。ねえ、早く紹介してよ。」

「田丸由宇ちゃん。今朝くらいまで女の子でした。」

「あら、勿体ない。」

何が？

「でもヨダレがでそうなくらいカッコイイわね。この子なら元女でも許すわ。」

一瞬悪寒が走った。

「立ち話もなんだから二人共上がってよ。」

浜崎さんも部屋に上がるんですか？　なんか先行き不安だ…。

## 009 お誘い

二人の関係って…？真木さんと浜崎さん…。二人共一応は元…男  
だよ…。

「愛ちゃんさ、」

「何？」

「田丸さんがニューハーフ見るの初めてなんだってさ。体拝まして  
あげてよ。」

「あゝら、だから珍獣見るみたいな顔してたんだ。タマちゃん見る  
？」

「結構です。そつ、それよりタマちゃんは止めて下さい。」

「あら、そしたらなんて呼んだらいい？」

「じゃ、じゃ…、由宇で！地元の友達には名前で呼ばれてるので。」

「じゃ、愛とはもう友達って事ね。」

「そつ、それは…、まあ…。」

友達…？会ってから何分経った？

「私は愛って呼んでね。」



「はあ…。」

「ところで由宇ちゃん、私の体見とく？」

「えっ？」

「田丸さん見とけよ。社会勉強になるぜ！」

「マジですか？」

「安くしとくよ。」

「今日は止めときます。今日は、刺激が多くてついていけません…。」

「分かった。見たくなったら言ってね。ところで真木ちゃん服どこに置けばいい？」

「あゝ、ありがと。ソファーの上にも置いといて。」

「分かった。ねえ真木ちゃん。」

「ん？」

「『ナイト』辞めて行かないんでしょ？」

『ナイト』…？

「この体じゃな。ホストじゃねえだろ？」

真木さんがホストしてた店か…。

「なんならウチの店で働かない？」

「遠慮しとく。」

「なんでよ？」

「なんでって…、当分困らないし、男にお酌しながら触られたりするの…。」

「ウチの子達なんかお触り大歓迎なのに…、贅沢な！」

「言つとくけど俺はあくまでも…。」

「ノーマルね。分かってるわよ！そうだ、由宇ちゃん聞いてよ。」

「あつ、はい。」

「真木ちゃんたら、私が工事済んだら抱いてくれるって言ってたのに、約束守ってくれないのよ！失礼だと思わない？」

「工事…？あー工事！工事終わってるんですか…？」

「だったら体は完全女なんだから、見ても仕方ないじゃん！20年間自分の体見てるっの！」

「あれ？興味出てきた？身も心も女よ！やっぱり見せようか？」

「興味だなんて、違います。って愛ちゃん本当は見せたいんじゃない

「いですか？」

「えっ？あーそうなのかな？」

「男と別れて、今見てくれる奴いないからな。」

「ん、確かに。」

男？まあ…、確かに愛ちゃんみたいな綺麗系のニューハーフなら、彼氏がいてもおかしくないか…。

「そついえば理由聞いてなかったけど、なんで振られたの？」

「『なんで』って…、」

「言いたくなかったら別にいいけど。」

「しいてあげれば変態だったのかな…？」

へっ、変態！？

「私の竿有り玉無しの下半身で、胸があるのが良かったみたい。」

「あゝあ、そうゆー事ね。」

竿有り玉無しの下半身？そうゆー事？どうゆー事？変態って理解出来ない…。

「『そうゆー事ね。』じゃないわよ！約束守らないで…。それに、あつとゆう間に女の体になっちゃって！羨まし過ぎる。私なんかい

くらお金かけたか…。」

いくらかけたんですか…？体は興味ないけど、そっちは興味あります。

「そつだ愛ちゃん、田丸さんをお願いしろよ！」

ん？私？

「あつ、そうね、この際由宇ちゃんをお願いしようかな？」

えっ？何？って、やっぱりアレか？

「ねえ、由宇ちゃん。私とどう？」

「はっ、はははーっ…、嫌です！遠慮します。」

「愛ちゃん振られてやんの！」

「んー、諦めない！由宇ちゃん考えと言ってね？」

考えれないっの！

「そつだ！車しばらく借りといって大丈夫？」

「ポンコツだけど大事に乗ってね。」

「サンキュー。分かってるって！」

愛ちゃんがいたのは短い時間だけど、精神的に凄い疲れた…。出

来ればしばらく会わなくてもいいかな…。

それから真木さんはパソコンに向かっていたが、『クソッ!』という声が聞こえてきたので居間にいつてみた。

「どうしたんですか?」

「パスワードが変わってる...。」

「えっ?」

「確かに何ヶ月かに一度は変えていたのは知ってたけど、このタイミングで変わってるとは...。」

「思いつくのは...?」

「試したけどダメだ。」

「そうですか...。でも、まだ教授に裏切られるって決まったわけでもないですし...。」

「まあ、そうなんだけど...。」

沈痛といった感じか?少しへこみ気味だ。

「そうだ!飯でも食いに行くか?」

「はい。あっ、でも...。」

「でも？」

「無駄使いしたくないので、私でよければ何か作りましょうか？」

「手料理か…、でも作るって言っても材料なんか一切ないしな…。」

「冷蔵庫の残りもので…。」

とキッチンの冷蔵庫を開けると、本当に材料になるものは入ってなく、水にビールに一応調味料の類いが入っていた。

「ないだろ？それに飯くらい俺が奢るよ！」

「本当ですか？」

「ああ…。なんでも言ってくれ！イタリアンか？焼肉か？」

イタリアン…、なんていい響きだ…。私の田舎には駅前に喫茶店があるだけで、ファミリーストランやファーストフードがない町だった。5年前にやっと出来たコンビニは2年持たずに潰れたし…。でも今の私の体は肉を欲していた！

「じゃ、焼肉で！」

「おし、じゃ行くか！」

「はい。」

こんなに食べていいものか？それにこんなにビールが美味しいなんて…。逆に真木さんはそんなに食べてなく、焼きに回っている。

「じゃんじゃん食べて！」

「真木さんも食べて下さいよ。」

「食べてるだろレバ刺しとか…、」

「レバ刺し好きなんですね？」

「アレ…、おかしい…、」

「えっ？」

「いや、俺こんなにレバーなんて食わなかったのに…。」

「そうなんですか？さっきから美味しいそうに食べてるじゃないですか。それにさっき追加もしてたし。」

「ああ…。」

変な人だ。あー、それにしてもカルビの脂がこんなにしつこく感じないのは、この肉が上等なカルビだからかな…？

「美味しいか？」

「はい。」

「ダイエットとか気にしてないのか？」



「美味しいものを食べてる時は、『明日からやる』って決めてるんです！」

「随分都合いいんだな？」

「はい。それに今は体が男性なのでカロリー消費率も高そうですし！」

「そっか。」

「女の場合は筋肉が少ないから、消費カロリーが少なかったみたいで、女性は男性に比べると太りやすいみたいです。」

「なるほど…。って事は今はこっちが太りやすい体質って事か…。ん、待てよ？って事は、レバーを食べてる今の俺は鉄分を欲してるわけか？」

「かもしれませんが？意外と生理も早く体験出来たりして！」

「面倒臭いのは避けたいな…。」

「人には射精要求しておいて、自分はそれじゃおかしくないですか？」

「声でかいよ。隣に聞こえだろ！」

私はビールを飲んでるからか、少し機嫌がよくなってるらしい。

「あつ、すみません。でも生理がくれば子供産めるって事じゃない

ですか？」

「そうか…。理論上そうだよな…。」

「はい。でも妊婦があゝの薬の影響受けたらどうなるんですかね？」

「妊婦が…？妊婦は昔から薬の服用はダメって相場が決まってるんだからダメだよ！」

「『もしも』の話です！今回みたいな事故だって有り得るじゃないですか？」

「…。そうだよな…。どうなるんだろうな…？」

「追加のレバ刺しにカルビお待たせしました。」

店員さんが追加の肉を持ってきた。どうでもいいけど食べ過ぎか…？

## 011 更なる変化

真木さんは飲み方が大人だ。やっぱり元ホストだから？私といえ  
ば普段飲み慣れてないから、中ジョッキ2杯でいい気分…。

「マッ、マッキー！」

「ん？」

酔った勢いで『マッキー』と呼んでみた。

「…。」

「何？」

「今日はごちそうさまでした。」

「どう致しまして。また食べに行こうな？」

「はい。でも今度は割り勘で！」

「あんまり無理すんなよ。金ねーんだろ？」

「…。」

その通りだが、そんなにストレートに言わなくてもいいじゃん…。

「キチッと働くっのー！」

「働いて給料出た時に男だったら、今度はそっちが奢ってくれよ。」

「へっ…、それは…、割り勘をお願いします。」

「なんで？」

「その時もし体が男でも、心は乙女なんで…。」

「なるほどね。」

「はい…。」

「なあ？」

「…。」

「俺の事『マッキー』でいいから、そっち呼ぶの『由宇』でいいか？」

「あっ…、ですね…。これからよろしくねマッキー！」

「よろしく由宇。さっ着いたぞ。エレベーター乗って部屋上がる。」

エレベーターみたいな狭い空間…。マッキーってよく見るといい女だな…。襲いたくなっちゃうかも…。

って何考えてんだ？俺は男じゃねえ！ あ…、俺じゃなくて私！私だっつーの！変な感覚だった…。酔ってるからだ。酔ってるからに違いない…。

「シャワー先使っていいよ。さっぱりしてきな。」

「ああ、サンキュー。」

「タオルは棚にあるやつ適当に使っていいから！使ったら洗濯機に突っ込んでおいてよ。」

「分かった。」

脱衣所に入って一枚ずつ脱いでいく。パンツ一枚になって鏡で自分を確認すると、朝より筋肉が付いていてソフトマッチョな感じになっている。

「理想的だ…。」

何言ってるんだ！？なんか俺頭おかしくなってきたかな…？あつ…、また俺って頭の中で…。

パンツを脱いでアソコを見ると、興奮して固いわけでもないのに、朝見たより大きくなってるか…？

サツとシャワーを浴び腰にバスタオルを巻いて出て行くと、

「キャツ！」

「何！なんだよ？」

「いや、なんでもない。なんだろ…？」

「こっちの台詞だよ。お風呂空いたよ。」

「分かった…。」

何が『キャツ!』だよ。若い乙女が初めて男の裸見たわけでもあるまいし…。

ん…? そうゆう事か? 感覚までが変わってきてるって事か? でも女だった俺が風呂上がりにも胸も隠さずこんな格好で歩いてるなんて昨日の俺からは想像出来ないな…。 あっ…、また、俺って言うてるし…。 もう俺でいいや…。

葵じゃないけど、このまま男も悪くないかな…。 そんな事を考えながら横を見ると、昼間愛ちゃんが持ってきたバックが目についた。何が入ってるんだ?

え…とまずは…? 新品のブラにショーツか…。 で? それと…、まあ…、着替え一式ってどこか…? ん…、化粧品か…、おいおい生理用品まであるとは準備いいね…。

今度はテーブルの上の雑誌に目がいく…。 表紙は最近人気のアイドルだ。可愛いね…。 一枚めくると、見開き一杯にその子が水着になって笑顔を振り撒いてる。女だった頃の俺より胸でかいな…。 自分が生唾を飲んだのが分かった。

もう一冊別のエッチそうな雑誌も興味が沸いてきた。表紙は布の少ない水着をきたグラマーな女性。めくっていくと、一枚目から素っ裸の女性…。 男性誌ってバカだな…。

でもしつかり俺の下腹部はムクムクと反応し始めていた…。

012 一人称

「おー、そのバックこっち投げて！」

風呂場の方からマッキーが声かけてきた。

「自分で取りきなよ。つか、別にタオル巻いて出てくればいいじゃない。」

「ん…、まあ…、でも、なんか恥ずかしいな…。」

恥ずかしい？なんだろう？急に女っぽくなった？

「女の裸なんか昔の自分ので見慣れてるよ。今はこんな体だけど…。」

「

「あー、そうだな。なんか急に恥ずかしくなっちゃってさ…。」

そう言つと何を思ったのか首にバスタオルかけて素っ裸で出てきた。

「おーい！極端なんだよ！まったく…。」

逆にこっちが目のやり場に困るって…。それにしてもウエスト細いな…。

「ははは…。見慣れてる割りには照れてるじゃん。」

「女同士でも、片っ方が素っ裸のシチュエーションなんてないし…。」

「

「そつちだつてほとんど裸だろ！バスタオル巻いてるだけだし…、  
ん…！？」

「ん？」

マツキーの視線がこつちの下の方に来てる…？ん…？

「何で下半身デカくしてんだよ？」

肩幅に足を開き腕を組んで見下ろしながら言われた。Sっぽい感じ？

つて、それよりなんて答えればいいんだ？まあ男の生理現象だよな…？でもなんて言ったら…。

「フツ…。この雑誌見てたの？」

「うつ、うつ…。」

「そうか…？エッチな雑誌見たらちゃんと反応するんだな…？」

「えっ？」

「いや、この手の雑誌みたら興奮して反応するんだな…。」

「なっ、なんか…、マツキーって、どうしても研究者目線なんだね…？」

「あっ、わりい…。」



「いいけど…」

「そうだ！ついでだから頼んでいい？」

何か期待した目で見てる…。って事はやっぱりアレかな？

「ダメ？」

「…分かった。」

一度はOKしたんだし、拒否してもいずれ要求してくるだろうし…。

「よし、ちょっと待っててな。」

そう言って、テレビの前に行くとか何やらDVDをセッティングした。もしかしてエッチなDVD見るとか…？再生ボタンをマッキーが押すと案の定そっち系のDVDだ。

彼氏もAVが好きで、よく一緒に見させられた。だから俺は多少見慣れてるところがある。

マッキーはボックスごとティッシュを持ってきて横に腰掛けた。目が合う。

「横にいたら気が散る？」

「いや…。」

「あつ、そうか！やり方か？まあ、もうしばらく観てなよ。」

「うん…。」

なるべくなら、とっとと済ませたて終わりにしたいのが今の心境だ。

エッチなシーンはどんどん進んでいく…、アソコが更に固くなっていくのを感じ恥ずかしくなってきた。

「そろそろバスタオル取りなよ。」

「…。」

「大丈夫だよ。こっちだって見慣れてるし！」

「うん…。」

考えてみればそうだよな…、向こうだって裸なわけだし…。ん…？なんか不思議だ…、昨日初めて会った人の前でお互い裸なんて…。恋人でもないのに…。

「何こっちガン見してるんだよ？ってゆうかヤラせねーぞ！」

「ちっ、違うよ！」

俺が女とヤル？想像してもみなかった。

「動揺した！」

「してないっの！」

「まっ、触るくらいならいいけどな。ほらっ！」

そう言って俺の右手を取り、自分の左胸に持っていった。柔らけ  
ー……。こんな感じが……。って、お風呂の時に、自分の胸マッサージ  
してたじゃん！

「バスタオル取るよ。」

うわっ！バスタオルが取られてく……、

「デカツ！私の……。ん……。わた……。あれっ？」

と言葉を噛みつつ、手はアソコに伸びてきた。触られてるよ……。  
しかも上下に動かし始めたし……。なんか、気持ちいいかも……。

「どっ、どうしたの？」

「いや……。自分の一人称がおかしくて……。頭の中で考えてるのと違  
うっていうか……。『私』ってのはスツと出てくるんだけど……。」

話しながらも手の動きは止まらない。気付けば俺もマッキーの乳  
頭を刺激してたりするし……。

「ストップ！」

「何？どうした？」

「自分でやります。なんか頭変になりそうです。」

「なんだよ。気持ちよかったら出してよかったのに。」

「じゃなくて、なんか変じゃありません？」

「何が？」

「マツキーはノーマルなんですよね？」

「そうだよ。」

「このシチュエーションに違和感ないんですか？」

「まあ…、そうか？まあ、言われてみれば…、そうかな…？」

「でしょ？」

「そういえば他人の男性器触るなんて初めてだ…。男だった時に他人の触るなんて考えもなかった…。」

「さつき全然躊躇しなかったでしょ？」

「そんな事は…。うわっ、気持ち悪っ！」

そう言つと、マツキーはやっと手を離れた。

「どうします？明日には思考やら趣味趣向まで完全に変わってたら？」

「そんな…。」

なんか一気に不安になってきた…。そしてその時携帯電話が鳴つて二人して、ビクツとしたのだ…。

013 電話

鳴ってる電話はマツキーの携帯電話で、葵からの着信だった。  
マツキーが受話器越しに葵と話してる。

「んー。それで？ほーっ！普通になったってことか？そりゃ良かったじゃん！良かったかどうかはあれか？まだ分からねえか？」

「マツキー！」

「あー葵ちよつと待ってな。何？」

「葵さんなんだって？」

「あー、なんでも、好きだった子に会いに行ったら、なんか女の子の事が好きだった感情がなくなっで、男の方に興味が出てきたらしいよ。ノーマルになったみたいだっでさ。」

「えっ？ノーマル？」

「うん…、何？」

「でもそれっておかしくないですか？」

「何が？」

「今の葵さんは男なわけで、その葵さんが男を好きなんですよ？」

「ん…、あつ、そうか…、それもそうだな…。葵さー。」

またマツキーは葵さんと話し始めた。

葵は体が変わっても性同一性障害なのだろうか…？それだと可哀相な気がする…。という事はこの実験は失敗って事か…？薬の量を調整すればなんとかなるのか…？

それを考え出したら三崎君が妙に気になりだした。はたして三崎君はノーマルな人？それともアブノーマルな人？それに量って意味だと、少量とはいえ直接皮膚にかかっているわけだし…。

「んー分かった。じゃ、とりあえず明日な。こっち？まあ、こっちはあれだ、なんとかやってるよ。うん。そうだな…、9時くらいまでに連絡するよ。お、じゃ、また。」

電話を切ってしまったようだ。特に話も無いが代わってくれてもいいのに…。まあ明日には会えるみたいだから別にいいけど…。

「何だって？」

「『やばいかな？』だつてさ。」

「わけ分かんないですね？」

「だな…。とにかく…、ありや、すっかり萎えちゃったな。」

「えっ？」

本当だ。私に付いている男性のシンボルはすっかり萎えてしまっている。いまさらか…。

「よし、仕切り直してやるか？」

「やるの?」

「おー…、ってエッチじゃないぞ!」

「て…、っていつか、さっきからそっちがエッチとか言ってる、意識してるのそっちじゃん!」

「そっ、そんな事ないよ…。」

「どうだか?」

本当はマッキー、エッチしたかったりして…。またここで電話が鳴った。チツ…。どちらともなく二人共舌打ちしていた。

今度の着信は私の方だった。ディスプレイには地元に残した彼氏が表示されている。

「ゲッ!」

「出ないの?」

「この声じゃ、出れないでしょ?」

「変わりに出ようか?」

「友達の携帯電話に出ちゃうのって変じゃない?」

「そうか?」

「うん…。」

「ところで相手は誰？親？」

「彼氏…。」

「かれっ…。」

着信音は30秒位で鳴り止んだ。

「どうすんだよ彼氏？」

「どうするって言ったって…。」

今度はメールの受信音になった。メールの内容を確認すると…、

「何だって？」

「『連絡くれ。』って。」

「そんだけ？」

「そんだけ…。」

多分話題はゴールデンウィークの話。多分こっちに遊びに来るって話だと思う…。そんな話だけであって、具体的な事を何も詰めてなかったから、その確認の電話だったのだろう…。

「付き合い長いの？」

「2年…。」



「春休み中帰る予定だったとか？」

「彼は4月から新社会人で、今は研修中だから会えないし…。それに、そのまま4月に入って仕事だって言ってた…」

「そっか…」

「ゴールデンウィークまで元の体に戻れるかな？」

「どうだろ？」

「…。」

「明日三崎君の家行ったら沖縄行ってみる？」

「教授のところ？」

「それ以外あるかよ？」

「でも居場所知らないんじゃない？」

「ファックス送ってきたコンビニ辺り行って、写真持って聞き込みするしかないだろ？」

「見つかるかな…？」

「何もしないよりよくない？」

「まあ…。」

果たして無事教授に会える事が出来るのだろうか？それより彼氏に何てメール返そう……？って、三崎君の家に行くのはいつ決まったんだ？

結局昨日はあれつきり寝る事になった。俺的にはモヤモヤして嫌な思いで寢床についた…。なんだか眠りの浅いスツキリしない夜だった…。

更に最悪な事に、ピンポンと朝から何やら来客らしい…。なんだよこんな朝早く…。目覚めが悪いとはこの事だ。

『えっ？どうした？なんで来たの？』などと、女の声になったマツキーの声が聞こえてきた。

「何あんた馴れ馴れしい！翼！翼どこ？いるんでしょ？」

なんだ？誰だろ…？そんな事思ってたら、部屋のドアが急に開いて掛け布団が剥ぎ取られた。

「つば…？あんたが翼の従兄弟？」

眠い目を無理矢理こじ開けると、スーツ姿のキャリアウーマン風の女性が立っていた。

「…はい？」

朝から全く話が読めない…。なんだこの展開は？ドアの方を見ると、両手を合わせて謝ってる感じでマツキーが立っている。

「だから…、あんたが翼の従兄弟かって聞いているの？」

こんなお姉さんに朝から怒られるなんて、初めてかな…？いや、

別に怒られてるわけじゃないか…。でも詰め寄られてる？

「翼どこ行つたの？」

「…。」

「あんたなんとか言いなさいよ！口が無いの？それとも耳が無いの？」

「あつ、あります。」

「やっと喋つた！で？あの人何処行つたの？」

「あの…。」

「何？」

「おはようございます。俺、田丸由宇つて言います。」

「えっ？」

「始めまして。」

「あつ、どうも…。ってそうじゃない！」

「やっぱり怒るか？」

「えっと…。マッキーから…。翼君から連絡あつたんですか？」

「うっ…。朝メールがきて、その後携帯電話の電源落としたみたい

で一切連絡つかないのよ!」

「そうなんだ…。」

マツキーは、なんて余計な事をしてくれたんだ。気付くまでほっとけばいいじゃんか…。それをわざわざ知らせなくても…。

「それでメールはなんて?」

「『しばらく旅してきます。その間従兄弟に部屋貸します。』って、そんな一方的な事ひどくない?」

「でも捨てられたわけじゃないんでしょ?」

「えっ?」

「だから、別れたわけじゃないんでしょ?」

「そつ、それもそうね…。ってゆーか付き合ってもないけど…。」

「付き合ってない…?」

マツキーの方をチラッと見たら目を逸らされた。ニヤロ!女の敵め!

「うん…。それで翼の行き先知りたいたんだけど…。何か聞かされてない?」

『うん…。』と俺が答えた時、この人の顔が淋しそうだった。

「昨日の晩まで一緒にここに居たんですけど…」

急にマツキーが会話に入ってきてやった。

「この子は…？」

「えっと…」

「もしかして、あなたも従姉妹？っていうかむしろあなたの方が翼に似てるわね…」

「そっ、そうですか？」

そりゃそうだ。元はマツキーで原型留めてるんだから、面影があるに決まってる。

「もしかして妹さん？」

「違います…」

そう言ったとほぼ同時にマツキーが『そうです…。』と言ってしまった。マツキーと目が合う。

「えっ？どっち？」

「えっと…、妹みたいなもんで、こいつが従姉妹で、俺は二人の近所に住んでる幼なじみです。」

「そっ…、あなたが従姉妹なんだ…」

「はい。」

「で、あんたは幼なじみの？」

「です…。」

なんとか彼女に対して、こっちの設定が決まったみたいだ。

「で？翼どこ行っただの？」

その設定は決まってい…。俺はチラッとマッキーの方を見てしまった。その視線を彼女は見逃さなかったようで、マッキーの方に振り返った。

「えっと…、何処に行くとは聞いてません…。しばらく留守にするから、よろしくって…。」

「本当？」

「本当です。」

「そう…。」

そんなでござめせんのか？俺ならもつと聞くな…。

「一人？一人なわけないか…。きつと女と一緒によね…。」

何だ、それが聞きたかったのか…？要は嫉妬か？

「それは無いと思いますよ。」

「思います？あんに翼の何が解るの？」

「いや…、美穂さんに連絡して行くくらいだから、それはないとは…、」

「ちょっと待って！」

「はい？」

「あんだ、さつきから馴れ馴れしいけどなんなの？私の下の名前も知ってるし…。」

「えっ？あ…、それは…。」

「翼と寝た事あるの？」

実に妙なやり取りだ。この美穂さんが、全てを理解してくれる人ならば、多分マッキーは喋ってるはず…。愛ちゃんみたいに…。でも喋ってないって事は、理解してくれる可能性は低いって事だろう。

「そんなわけないでしょ。」

「…。」

「あなたは従兄弟が恋愛対象になるタイプ？」

「それは…、」



「ないでしょ？」

「まあ…。」

「私もそうです。従兄弟と寝たりしないです！」

「そつ、そうだね。ゴメンね、変な事言ったりして…。」

「気にしないで下さい。」

「それより私の名前は、翼から聞いたの？」

「はい…、それで翼が帰ってくるまで私達居てもいいですかね？」

「どつ、どうぞ…。それよりいつ戻ってくるかな…？それも聞いてない？」

「はい…。」

「そつ…。」

「あつ！あとお願いしたい事あるって言ってました！」

「何？なんだつて？」

「由宇を…、田丸君を一人前のホストにしてくれって…。」

「はあ？何言い出し始めたんだ…？」

「この子？私は？私の事はなんか言って無かった？」

「特には…。」

「そう…。」

そしてこつちをチラッと見た。

「確かによく見るとイケメンね…。ホストやってるの?」

「翼の勤めてた『ナイト』に紹介してもらった予定です。」

「マッキー!行くかどうかは、まだ決めてないだろ…。」

「履歴書要らないとこなんて他にないぞ。」

確かにそうだけど…、なんでそうなるんだよ。

「よし!私がそこそこのとこまで引き上げてあげる。どうせ店行っても翼いないだろうし。」

あなたまで悪ノリしないで下さいよ。美穂さんだっけ?なんだってそうなるんだよ?

でもやっぱり俺はホストするしかないのかな…?

## 015 レクチャー

美穂さんと三人で朝食をとることになり、準備は全てマッキーがやってくれた。朝食といってもコーヒーを入れてトーストにベーコンエッグと簡単なものだけ…。手慣れたもんだが、美穂さんに疑われないようにしてほしい…。

会話は…、何を話していいのやら…。美穂さんの事はあとでマッキーに聞けばいいし…。マッキーの事でも聞いてみるか…。

「二人は？付き合ってるの？」

「へっ？」

逆に質問された。

「そんなわけないじゃないですか！」

「そんなわけない？でも昨日の夜はここに二人だったんでしょ？」

「まあ…。」

なんて言い訳すればいいんだ…？嘘に嘘の上塗りだから、段々辛くなってくる…。

「彼氏をすすんでホストにさせるような彼女なんていないですよ。」

確かに…。彼氏がホストになるって言ったら反対するよな…。

「そう…よね…。だったら二人は相当な仲良し？」

「は、はい…。年も近かったので…。」

「まあ…、いいわ…。田丸君だっけ？」

「はい。」

「携帯電話の番号とアドレス教えてよ。ナイトに勤め始めたら連絡頂戴。」

「分かりました。」

そして連絡先を交換すると、美穂さんはやっと仕事へ向かった。

「マッキーさ…、」

「悪かった！まさか来るとは思わなくてさ…。」

「それにしても…。」

「まあまあ…。でもこれでお互いこの家に住めるみたいだし。」

「そうだけど…。」

えっ？一緒に？同棲…？昨日初めて会ったばかりの人と一緒に住むの！？

「必要な物あったら実家から送ってもらえよ！」

「ちょっと…。美穂さんOKしてないでしょ？」

「否定もしてなかっただろ？」

「そうだけど…。」

「美穂はDMだから、強く上目線で言われたらほとんどOKしちゃうよ。強く出られると『嫌！』って言えない人なんだよ。」

「マツキーって人は…。」

「店に来たら優しいとこと、キツ目に言つとこのバランス気をつけるよ。」

「え〜？」

ツンデレってやつか？ちょっと違うか…。甘えたり突き放したり…。オラオラぱいのってあんまり好きじゃないなあ…。

「難しくないよ。役者のつもりで演じればいいのさ。」

「そんな事言つても俺は役者じゃないし…。」

「まあ不本意かもしれないけど、昨日から男なわけだし、この際だから男を楽しんじゃえばいいじゃん！」

「葵じゃあるまいし！」

「そうだけど、今日元の体に戻るわけでもないし、ポジティブに

考えていくしかないだろ？」

「…。」

「まあ、いいや。着替えたら三崎君の家行くぞ！」

「分かったよ…。」

なんだかんだマツキーのペースになっちゃう…。まったく強引だなあ…。

「葵は？」

「さっきメールの返信があつて、OKだつて。」

「何が？」

「『アパートに迎え行くから10時に出れる準備しとけ。』ってメールしておいたから、その返事がOKって事だよ。」

「説明下手だな。」

「うるさいよ！」

「ところで美穂さんって何やってる人？このマンションのお金だつて彼女から出てるんでしょ？」

「まあ…、あんまり話したがないんだけど…、社長な事は間違いない。親も相当な資産家みたいだしな。」

「ふ〜ん。そうなんだ。社長か〜？その割には随分若そうだったけど何歳？」

「36歳。」

「えっ！嘘？どう見たって20代じゃん！」

「だな。最近のエステとか美容の力ってすごいよな。あと化粧か？」

「ほえ〜っ。36か〜。」

「自称だから本当の年は知らないけどな。ちなみにバツ1子無しな金持ってる事は間違いないよ。」

自称ね。バツ1は別にどうでもいいけど…。金持ちってどんだけ金持ちか気になるな〜…。

「興味出てくるだろ？」

「体の関係は当然あったよね？」

「そっちに興味だすなよ！そのくらい想像したら分かるだろ？」

「だよね…。」

やっぱりか…。

「ちょっと待って！もしかして、それ私もやるの？」

「枕ね…。」

「枕？」

「枕営業つてやつね。色恋営業だから一段上に上がりたかったらみんなやってるよ。一度寝てやったら、お客として長く引つ張れるしね。っていうか、普通の健康的な男だったらそのくらいなんでもないよ。」

「…そんなもん？」

「逆に寝た事ない奴は、いつまでも昇ってこれねえ奴だよ。センスないか、話し下手か、要は根本的にホストとしてダメな奴だな。」

「なるほどね。」

「まあ中には客と寝なくても、ナンバー1になる奴もいるんだろうけど、今のところそんな奴聞いた事ないな…。いても稀だよ。ヘルプの奴らは、無駄に枕してる奴がいるみたいだけ。」

「無駄にね…。これってレクチャーしてるつもり？」

「そんなつもりはないけど…。まあ、太い客が見定める目が大事だつて事さ。」

「太い？」

結局まだレクチャーは続くらしい。

「沢山お金を落としてくれる客だよ。上客さ。太客以外と枕しても無駄になる事もあるし。」



「美穂さんは太い客なんだ？」

「エースじゃないけどな。」

「エース？」

「太客の中でも1番の上客の事さ。美穂は3番目くらいかな。」

「ふん。そのエースには買いで貰ってないの？」

「まあ、色々貰ってるよ。だけど中には貰いづらいものとかもあるし。」

「例えば？」

「車とか…、」

「車？」

「ツシーターな。今回は由宇と葵乗せるから乗らなかつたけど。」

「っていつか貰ってるじゃん！」

「あとはクルーザーとか、土地の権利書とか…、」

「とかつて…、すでに俺の想像を超えた…。」

## 016 向き合う

葵の住んでところは普通のアパートで安心した。葵もお水系でバイトでもしてるかと考えていたからだ。

マツキーが葵に電話している。電話を切ると一人の男がすぐアパートから出てきた。葵か？それにしては…。

「不精髭かよ？」

「意外と伸びるのが早くてさ…。シェーバーあったら貸してくれない？」

「T字剃刀買えよ。髭濃そうだからその方がいいって！」

「そうなの…？」

葵はちょっとしたアスリート並の体付きになっていた。逆三角形の体形…。

元々葵は、レズってというか性同一性障害だったわけで、理想の異性っていてもいないはず…。けど昨日の葵は『ガツチリしたスポーツマン』とか言ってた…。もしかしてバイセクシャルってやつか…？両方いける人なのかなあ…？それともただ単に男性ならって意味かな…？

「マツキー口紅してる？」

「よく気付いたな。由宇はまったく気付かなかったけど、葵はよく見てるな。」

マジ？いつの間に…。

「『由宇』って呼んでるんだ？」

「昨日からな。」

「私も『由宇』って呼んでいい？」

「うん。俺も葵って呼ばさせてもらっね。」

あれっ？葵は自分の事『私』って言ったな…。やっぱり性別変わっても性同一性障害なのか？

「どうぞどうぞ。」

「そっだ！服買いに行くか？そんなピチピチな服じゃ嫌だろ？」

「いいかな？」

「もち。あと三崎の家行くのに土産も買いたいし。この辺りで美味しいケーキ屋知らねえ？」

「それならいい店ある。服屋行ったあとでいい？」

「OK！じゃ行こう！」

「その前をお願いあるんだけど…。」

「金だろ？」

「うん…。貸してくれる?」

「貸さないでもないけど、それよりバイトしない?」

「バイト?」

バイト? またホストの話か?

「デートしてもらいたい奴がいるんだ。」

デート? どんな話だ?

「誰と? その前にそいつの性別は?」

「世間ではニューハーフって呼ばれてる奴だ。」

「外見は女、戸籍は男って奴か…?」

愛ちゃんの事か?

「工事終わってるし、お互いが望むならエッチしてもいいぞ。」

「っていつかさ…。」

「頭ん中プチパニックなんだろう?」

「ん? まあ…。」

「男が好きなんだか女が好きなんだか、ごちゃごちゃしてる。そんなトコだろうな?」

「まあ…。」

なんか、どノーマルな俺には葵の気持ちはよく分からない…。こんなんで愛ちゃんなんかにつけて、更に分からなくならないのか？待てよ…、俺こそ…、今の俺こそどっちが好きなんだ？

「男とか女じゃなく、まずは人と向き合ってみろよ。付き合うとか好きとか嫌いじゃなく、向き合うところから始めてみな。愛ちゃんに色々聞いてみるといいよ。」

やっぱり愛ちゃんか。人と向き合うか…。分かるような、分からないような…。

「ありがとう。今度友達として紹介してよ。」

「OK。じゃエッチ付きのデートは止めとく？」

「まあ、今回は…。」

あれ？いつの間にかエッチ付きのデートになってる…。

「そうか…。」

マッキーがこっちをチラッと見た。俺は無理！

「分かったよ由宇。お前には頼まないって！」

「マッキーは人の気持ちがよく分かる事で！」

「まあいいや、店行くぞ。」

洋服はマッキーが見立てくれた中から葵が選び、ケーキ屋では葵が適当に美味しそうなを選んでいた。

ケーキ屋の外ではマッキーが誰かと電話している。恐らく三崎君のお母さんだろう。一応事前連絡つてやつだな。ケーキ屋の会計を俺と葵で割り勘して、外へ出て行くと…、

「大変だ…。」

何が？マッキーは相変わらず説明が下手だ…。

## 017 警察

「大変だ！」

「どうした？」

「沖縄の…。」

「沖縄？先生から？」

「なんだって？」

「沖縄の警察から…。」

「警察？」

説明下手なマッキーの話を黙ってきいてると、なんでも教授が泊まっていたペンションの部屋に、一人のおばちゃんが入り込んで保護されたとの事だ。何か盗んだとかはないようだ…。

それで、なんでマッキーに連絡がきたかというと、教授が連絡ないまま2日間帰ってこないの、荷物を調べるとマッキーの携帯電話の番号が出てきたので連絡したとの事だ。それになぜかおばちゃんもマッキーを指名してるらしい。

「で？」

「そのおばちゃんが、石垣の本署に移されるから会ってやつてくれってさ。」

「先生は行方不明なの？」

「うん…。」

「なんでマツキーがそのおばちゃんに会わないといけないの？」

「そのおばちゃんも私を指定してきてるからだろ。」

「マツキーって沖縄に知り合いいるの？」

「いや…、いない。なあ、これってどう思っつ？」

「どうって…。」

「マツキーは？どう思ってるの？」

「うん…。私の見解だと…、教授はいなくなっってなんかないんじゃないか…、って…。」

「は？2日間帰ってきてないんでしょう？」

「最後まで聞けよ。」

下手な説明にも段々慣れてきた。

「そのおばちゃんが教授なんだよ。」

「はあ？」

教授がおばちゃん？何言ってるんだ？教授は男って聞いてるけど



…。それにペンションの人だっ…。

「教授も薬を持ってたか、作ってる工程で、なんらかのかたちで薬に触れてしまった。そして、私達みたいに女性に性転換してしまった…、とか…？」

「…。」

「それでそれを警察に素直に言えずに捕まった。」

「…。」

「素直に言えないのは自分の保身の為…。」

「可能性あるわね…。」

それにしても葵のお姉言葉が気になってきた。男の身なりでお姉な喋り方は止めてくれないかな…。俺の田舎にはニューハーフもいなければ、お姉マンもないから違和感がある。だったら愛ちゃんの方が気にならない。

俺はどうなのだろう？たまには俺も言ってるのかな…。

「で、どうするの？」

「行くしかないだろ？」

「そっか…。」

「一応、沖縄本島までの夕方の便を押さえてくれたみたい。」

「やったー！初沖縄！」

「あーゴメン。とりあえず席一つしか押さえてないみたい。一応あと2席頼んでみたけど。」

「でもこの時期なら席空いてるでしょ？」

「どうだろ？春休みだし、卒業旅行とかで混んでもるかもよ。」

「えー！？」

「どっち？ANA？JAL？」

「聞いてないよ。東京の警察と羽田で待ち合わせになってる。」

「由宇私達も予約しよ！」

「折り返し電話くるって！」

「でもどうせならトップシーズンに女として行きたいよ。可愛いビキニとか選んでさ……。」

「何言ってるの？先生に会いたくないの？」

「まだ、そのおばちゃんが先生って決まったわけじゃないでしょ？」

「そうだけど……。でもそのおばちゃんが先生じゃなかったら、先生は2日間も何処行っただの？」

「知らないよ！クマノミ採りに行って海流に流されたとか？」

「そしたらダイバーショップで大騒ぎでしょ！もしそうだったら海保とか含めて搜索活動してて、それを警察が知らないなんて考えられない。」

「そつか…。」

「研究の成果が誰かに漏れて、誰かに拉致られたとか？」

「誰が拉致するんだよ。」

「タイの病院関係とか？」

「タイの病院？」

「なんでタイ？しかも病院って？」

「それは、あれだよ…、タイの性転換手術の技術って、世界的に見てスゴイ優秀なんだよ。」

ふん。

「で、一種のドル箱産業に成りつつあるみたいだよ。」

「性転換手術が？」

「そう。愛ちゃんなんか予約してから1年待ったらしいし。だからこんな薬出来たら、飯の種が取られるようなもんだろ？」

「1年…。って、話が飛躍し過ぎだよ！まずはそのおばちゃんに会

「ってからだって！」

確かにこんな薬が世間に普及したら、そっち系の病院から恨まれるな…。

でも、そのおばちゃんが本当に教授のなのだろうか？教授じゃないとしたら、おばちゃんとマツキーの関係は？教授の行方は？

おばちゃん「教授って考えた方がいいのか？マツキーの考えもあながち間違えてもないのかな…？」

## 018 バツの悪い

三崎君の家に5分前に着いて、さっきから呼び鈴を鳴らしているが誰も出てくる気配がない。

「本当にここ三崎君の家？間違ってるない？」

「間違えないよ。表札だって『三崎』になってるだろ？」

「だね…。」

「連絡は？してあるんだよね？」

「えっ？」

「してないの？」

「…。」

「ちょっと…、電話してみてよ。」

「おっ、おう…。」

事前に約束のない訪問ほど効率の悪いものはない。いなかった場合、相当時間のロスだ。

「あーもしもし。三崎？今どこ？えっ？あーそう…。そっか…。いや…。」

マツキーが俺と葵をチラツと見た。

「今？三崎ん家の前。分かった。じゃ…、近くのアミレスか喫茶店で待ってるよ。うん。分かった。いや、いいよ。昼飯もまだだったし。うん、じゃ、1時間後ね。」

それで電話を切った。どうやら外出中らしい。部屋に引きこもりだった話はどうしたんだ？励ましにきたはずでは…？マツキーがバツが悪そうにこっちを見てる。

「昼飯奢るから…。」

「とーぜん！」

「1時間位で帰ってくるって？」

「みたいだな。なんか買い物らしいよ。」

「買い物？落ち込んでたんじゃないの？」

どういった心境の変化だ？部屋から出て買い物するなんて…。三崎君が元々どんな子か知らないけど、元気になったなら何よりだ。

ファミレスでオーダーを済ませると、葵がトイレへ立った。

「沖縄の捕まったおばちゃんが、教授だと本気で思ってる？」

「つじつまは合うとは思う。」

「そつか…。」

「沖縄に知り合いなんていないし、ペンションに2日間いなかったなら可能性は十分でしょ！」

「間の1日は何処に居たんだろうね？」

俺もそのおばちゃんが教授に思えてきた。

「野宿とか？」

「おばちゃんの格好で？もしそうなら少し笑えるかも。」

その時、キャー！と叫び声がして、声の方を向くとトイレの方からだ。そこから若い女性が出てきた。店員さんが近付いて何やら話している。

「なんだろうね？」

「ゴキブリでも出たのかもよ。」

「不衛生な。」

他人事のように話していたが、他人事で済まされなかった。

店員さんがトイレの方に入っていくと『何してらっしゃるんですか？』と聞こえてきた。誰かが叫んだ女性に何かしたのか？ストーリーか？『いや…、その…、』と何やら言い訳してるようだ…。

「ねえ、由宇…。」

「ん…？」

「怒られてるのって葵じゃないよな…？」

「葵？」

葵…。あつ！？もしかして間違えて女性用のトイレに入ってたとか？いや本人は間違えたつもりもないかもしれない…。

マッキーと目が合い二人して席を立って騒ぎの方へ向かうと、怒られてるのはやはり葵だ。

「すみません。間違えちゃって…。」

「お客さん困りますよ。こちらのお客さんに謝って下さい。」

それから葵はペコペコと頭を下げっぱなしだった。連れの俺達まで…。なんとも情けない…。店員のとりなしもあってなんとか大事には至らなかった。

ここで警察沙汰になったら大変だ。葵は身分を証明しなければならなくなる。学生証の顔と今の本人は若干違う。性別に関しては、性同一性障害と言い張れなくもない。ここはオオゴトにしなければ若い女性に感謝だ。

食事はサッと済ませ早めに店を出た。バツが悪くて居づらかったからだ。急いで食べたからか、食べた気がしなかった。流し込んだといった方が正しいかもしれない。

でも明日は我が身じゃないけど、俺も気をつけよう。電車の女性車輦にも間違つて乗らないようにしなければ…。



## 019 ご指名（前書き）

久々の更新です。 m（――） m誰も書いてくれなそうだから自分で  
書いています。 更新キターー！ーw（。o。） w！ー！ーツ！！

今、私の目の前に座ってる女の子は、確かにグラビアなんかの表紙になつててもおかしくない感じに仕上がっている…。

「なんか私の顔に付いてます？」

「えっ？ いや…、何も…。」

三崎君のあまりもの変化についつい見入ってしまった。

「三崎君さ…。」

「先輩！ その『三崎君』ってのは辞めて下さい。呼び捨てでかまいませんよ。『三崎』って呼んで下さい。」

喋り方も女の子っぽい感じが…？ いや仕事も…、

「じゃ…、三崎。ちょっと聞くけど…。」

「はい。」

「引きこもってたのが、どうして急に買い物に出来るまでになったわけ？」

「それは…、部屋でネット見てたら女性の服とかに興味が出てきて…。あとテレビの女性タレントの服とか見て、あの服可愛いとか、あの服セクシーとか…。それに…。」

「はあ…、」

「それになんだか急に肩凝って、母親に相談したら『胸が大きいからよ。ブラだけでも買ってこようか？』って言われて、それで『せっかくならちゃんとしたサイズ計った方がいいから、一緒に買い物行かない？』って誘われて…、なんか買い物って聞いたらウキウキしてる自分に気付いて。」

確かに服の上からでも、その豊満な胸が存在を主張している。肩凝りになるサイズなんて羨まし過ぎる…。

「三崎は何カップ？」

「Fです。」

エ…フ…、Fかよ…。

「先輩は？」

「Dカップ。」

「ふん。あつ、そうだ！先輩ちょっと耳貸して下さい…、」

そう言ったかと思うと三崎君がマッキーに耳打ちを始めた。なんだ？女になった同士で内緒話か？マッキーが『いいよ。別にカブってもいいし。』と言って軽く頷いている。『カブっても…？』

「三崎！マッキーだけに言って私達には内緒？」

黙って聞いていた葵がツツコミを入れた。

「別にたいした事じゃねえよ。なあ三崎？」

「だったら言いなさいよ。気になるじゃんね由宇？」

「えっ？あつ、うん…、そう…だね…。」

「なんだ？まだ由宇は三崎にくぎつけになってるの？」

俺は、まだなんとなく三崎君を見てボーッとしていたのだ。

「えっ、いや…、そんなじゃないよ。なんか可愛いなあって…、可愛い感じに変わったなって思ってたさ…。」

「かつ、可愛いなんて…、」

一瞬三崎君が照れる仕草をして、それがまた可愛いかった。

「だから、それがくぎつけになってる原因だろ？」

「えっ？あつ、そうか？」

なんか男子が可愛い子や綺麗な女性を目で追っちゃう心理が分かる気がした。マッキーも十分綺麗なのだが、昨日は俺も自分の変化に戸惑ってて、それどころではなかったのだ。

「まったく…。」

「あの…、田丸さん。」

「はい。あっゴメン。もう見ないから。」

「いや…、そうじゃなくて田丸さんもカッコイイですよ。」

「えっ？あっそう？ありがとう。」

「で、今度私とデートして下さい。」

「○ …デート？」

デートって？俺にはれっきとした彼氏が…、でも今の俺は男なんだよな…。

「ダメ…、ですか？」

「いや、別に…、」

「じゃあ、決まり！今度買い物付き合って！」

「はあ…。」

「三崎は元男なのに、男嫌じゃないのか？」

「…。うーん、どうなのかな…？でもほら田丸さんと居ればナンパとかもされなくてすみそうだし！」

「ボディガードなら俺より葵の方がいいんじゃない？」

「確かに…。」

「葵さんは大きくなりすぎててちょっと恐いかな…。それに出来ないのニューハーフみたいだし…。」

「何だとー!」

「だって言葉遣いと体のギャップが…。それに私的には田丸さんくらの体格の方が…。」

ん…? 体格? なんか変な言い方だな…。でも葵のギャップに違和感を感じるのが、俺だけじゃない事が分かってなんか安心した…。

「由宇ご指名だって! よかったな。ホストやりだしたらこの調子で指名取りなよ。」

「田丸さんホストするの?」

「なんかそんな感じで話が進んで…。」

「ホストか…。でも似合いそう。田丸さんならすぐにナンバーワンになれるよ。」

「それ、あんまり嬉しくないかも…。」

しばらく三崎君の家で雑談しているとマツキーの携帯電話が鳴った。相手は沖縄の警察で、内容は飛行機の座席があと1つだけ確保出来たとの事だった。

「葵と由宇どっちかしか行けないな。どっちが行く?」

「私が行く!」

即葵が立候補した。

「由宇は？」

「俺は…、俺も行きたいです。」

「何？何の話？」

三崎君には簡単に内容を説明したが、あまり興味を示さなかった。

「一応親戚だし、行くのは由宇の方がいいんじゃないかな。」

「そんな…、一度も会った事無い人なんだから私でも変わらないでしょう？」

「公平にジャンケンで決めたら？」

三崎君がジャンケンを提案してきた。せつかくマッキーが後押ししてくれてるのに…。

「よし、ジャンケンで決めなよ。」

マッキーまで…。でも結局勝って沖縄行きをものにしたのは俺だった。ところで途中うまく話を変えられた内緒話はなんだっただろっ…？

羽田那覇間は、マッキーと席が離れてたのもあって暇だった。ただキャビンアテンダントのお姉様方が妙に優しくて気持ち悪かった。マッキーに言わせれば『由宇がカッコイイからだよ。』だそうだ。

その中の若い子から名刺をもらった。真下晴子という名前と携帯電話の番号・アドレスが書いてある名刺。明らかに会社から支給された名刺じゃなく、プライベート用に自分で作った名刺だ。

俺は人生初のナンパをされたのだ。しかも女性から…。逆ナンか…。嬉しいような悲しいような…。ナンパされたのはマッキーには黙っておいた。また『ご指名か?』なんて言われなくても限らない。

「なんかあのCA私の事睨んでなかった?」

「気のせいだよ。ほら、荷物取りに行こう。」

搭乗口で挨拶してる彼女の視線を確かに感じたが、そんなのは無視だ。荷物を受け取り出口に向かうと、迎えの警察官で比嘉さんという方がいて、今日の宿泊施設まで送ってくれる事になった。と言っても明日は小型飛行機で移動なので空港に近いホテルだ。

そこで私に『あなたが真木翼君ですか?』と聞いてきた。よく考えてみれば、マッキーは男のはずだった。昨日の電話に出た時は平気だったのか…?

「いえ、私が真木です。」

「マッキー!」

この発言に一瞬ビックリした。この場は俺の方が都合がいいので



は？だけどマツキーの判断は違うようだ。

「あつ、そうですか？あなたが真木翼君…、さんでしたか…？」

比嘉さんも聞いていた情報と違うのか首を捻っていた。

ホテルに着くとフロントで比嘉さんとホテルの人が何やら揉めている。そして渋い表情で私達に近付いてきた、

「真木さんすみません。ちょっとした手違いでダブルベッドが予約されてたみたいで…。」

ダブル…！？

「失礼ですが、お二人の関係は恋人とかじゃないですかね…？」

「由宇別にいいよね？」

「えっ？あー、うん…。」

だったら昨日も一緒に良かったのでは？

「よかった。じゃ、手続きしてきます。」

その後手続きはスムーズに進んでるようだ。

「マツキー…、」

「襲わないでね！」

「襲わないっのー！」

冗談で言ったのに気付くのが少し遅かった。マツキーが苦笑いしてる。

「比嘉さんこの辺りで美味しい店ありませんか？」

「あー、出来れば今日はホテルから出ないで頂きたいんです。このホテルのレストランも結構美味しいですよ。」

「そうですか…、分かりました。」

「よろしくお願いします。天候が悪くならない限り、予定通り8時には迎えに来ますから。」

それからマツキーと一旦部屋に入る前に食事する事にした。レストランは結構空いていた。夕食には遅過ぎていたからだろう。そんな時間だったが、あとから女性が3人入ってきた。よくよく見るとあのCAが、その中にいる。ココは航空会社の関連のホテルか…？制服を着てると綺麗ないい女に見えたが、私服になると2割くらい見映えが落ちて感じるのはなんでだろう…。制服フェチにでもなったかな…？

食事中は生ビールを頼んで飲んだが、初めてビールを美味いと感じた。それに昨日は2杯でいい感じに酔っ払ってたのに、別人のように飲めそうな感じた。

マツキーはというと昨日と変わらないペースで飲み始めたが、私とは逆に2杯目で気分が悪くなったようだ。

「なんだろ…、今日は色々動き回って疲れたか…、調子悪いのかな…？由宇悪いけど先に部屋戻るよ…。」

「大丈夫かよ…？」

俺の方に飲む勢いが出てきたのに、途中で終わっちゃうなんて…。まあ気分が悪くなったなら仕方ないけど…。

「まだ食べてていいから、これで支払いしておいて…。」

そう言って財布を置いて先に部屋に戻ってしまった。仕方なく一人、テーブルの上に残ってる料理とビールを詰め込んでいると、

「連れがいたなら、言ってくればよかったのに…。」

振り向くとそこには名刺をくれたCAのお姉さんが立っていた。お姉さんの連れは会計をしているとこだ。

「綺麗な人だったね？モデルかなんか？」

「違いますよ。」

「ふーん、そうなの。」

「はい。」

「ねえ、何処住んでるの？」

「なんですか？」

「東京戻ったら遊ぼうよ。都内？」

「まっ、まあ…。」

「電話番号教えてよ。」

「いや…、俺付き合ってる子いるんで…。」

「別に『付き合ってたようだい。』なんて言ってるわけじゃないわよ。」

参ったな…、俺には彼氏が…、あーそうだ…、ゴールデンウィークに会う話どうしよう…。いや、それより今は一日も早く体を元に戻す事を考えよう…。

「だよね。」

そう言って結局、電話番号とアドレス、そして名前を教えてしまった。

「由宇君いつ帰ってくる予定？」

「あー、えーと、4日後くらいかな…？未定の旅行なんだ。」

「分かった。私の休みの日確認してメールするね。」

「…。いつもこんな感じなの？」

「こなって？」

「名刺配ってナンパしてるのって意味。」

「そんな事無いよ、好みのタイプの人だけ。中々いないけどね。」

「ふん。」

「引くかもしれないけど、私ってジャニ系が好きなんだ…。」

ゲッ！女の時の俺と一緒に…、納得。でも俺の場合は、ジャニ系を目の前にすると緊張して何も話せなくなる感じだった。でもこの人は違うようだ。

「引いた？」

「いや…、そんな事ないよ。」

「じゃあ、帰ったら会ってくれる？」

「い、いいけど、学生だから金ないよ。」

「デート代は私が全部出すから気にしないで！」

貢いじゃうタイプか…。余り期待させないようにしないと…。そこでレジの所にいる先輩達に『先行ってるよ。』と声をかけられ『すぐいきますから先に戻って下さい。』と対応した。

「連絡するね。」

「ああ…。」

正直、電話番号とアドレスを教えた事を後悔していた。面倒臭くならなきゃいいのだが…。そう思いながら俺も部屋へと戻った。

021 初体験（前書き）

多少エツチな表現があります。嫌いな方は読まないでください。

部屋に戻ると下着姿のマッキーが俯せでベッドを占拠していた。そして、どうやらブラも外そうとしてたのか片方の手が背中に戻ったままなのだ。付けたり外したりする習慣がないから取り損なって、そのまま寝てしまったのだろう。

仕方ないな…、と思いつつ外してやろうとホックに手をかけた瞬間ドキツとした。指先が彼女の白くて滑らかな肌へと触れたからだ。綺麗な肌だな…。そう思いつつホックを外し、彼女の体を仰向けにしてブラを取ってあげた。そして、仰向けになってもツンと上を向いて張りのある胸が、俺の目に飛び込んできた。

ヤバイ…！元女だというに興味が湧いてきた…。興味と言うより触りたい衝動に駆られている…。自分ので見慣れてたはずなのに…。昨日雑誌で見たヌードが、目の前に生身の姿で実在するのだ…。

ゴクツ…。無意識に生唾を飲み込んでいた。

ちょっとぐらいなら…。そう思ったのが間違だった。胸を触りだしたら止まらなくなっていた。無我夢中で、どうやって服を脱いで、どう彼女のショーツを脱がしたのなんて覚えてなかった。

何かが弾けた瞬間だったのかもしれない。何か…、何かとは…、理性？モラルみたいなもの…？とにかく最後までやってしまったのだ…、マッキーと…。マッキーも時折悩ましの声を漏らしていた。そしてマッキーの知りたかったモノを彼女のお腹の上に解き放ったのだ。

その彼女のお腹の上に撒き散らしたモノを、綺麗にティッシュで拭き取りながら自己嫌悪気味になってしまった。酔っ払ってたといえ…、などと自分に言い訳なんかしたりして…。

彼の見様見真似でやったとはいえ、気持ち良かった。男ってこんな感じなんだな…。

夢の中で女性が騒いでる…、夢…？その夢の中の女性はマッキーだった…、違う…、夢じゃない！そこで目が醒めた。

「ちよつと起きてよ！」

俺はゆっさゆっさと体をマッキーに揺すられていた。中々目が開かない。

「由宇起きろ！」

「ん…、何時？もう起きる時間？」

「まだ4時前だけど…。そんな事じゃなくて！」

「なに…、なんだよ…。」

目の前には裸のマッキーが、ベタ座りで座っていた。内股でお尻までベッドにつけてる。女の子の柔軟な体じゃないと座れない格好だった。

「何？」

「説明してよ。」

「ん…、だから何を？」

「はだか…、私達裸なんだけど…、もしかしてした？」

ギクツッ！！そんな音が聞こえてきそうな感じだった。



「もしかして私襲われたとか？」

そう言いつつ手をアソコにもって行って確認してる。

「かな…。俺もしかして襲っちゃったかも…。」

「はあ？意味分かんない！」

「ゴメン…。あつ、そうだ。アレは出たよ。タツプリ出たから。」

「えっ？何？アレって、もしかして…。」

「そう…。ちゃんと外に出せたし…。ゴミ箱の中にティッシュの残骸あるから見てみなよ。」

「本当かよ…。？ん…。ちょっと待てよ。『外に出せたし』って言った…？」

「えっ？う、うん。」

「それって確信犯じゃない？」

本日2度目のギクツといった音が聞こえてきそうな感じだった。

「くっ、苦しそうだったからブラ外してあげたらつい…。ゴメンなさい。」

「ったく…。」

と言いつつゴミ箱に鼻を突っ込んでティッシュ臭いを嗅いでいる。意外にもそんなに怒ってない感じだった。

「自分だけ気持ちよくなりやがって…。」

「だから、ゴメンって…。」

「じゃ…。」

そう言つてマッキーは、お仕置きとばかりに俺に跨がりくすぐりだした。応戦するかのように手をつかんでそれを防ごうと必死に絡みあった…。でも体力では今の俺の方が上で、いつしか形勢は逆転し、俺がマッキーに覆いかぶさる体制になっていた。笑いが無くなり見つめ合う格好だ…。

「しよつか…?」

「えっ?」

すると俺の手を解き頭の後ろに手を回してきて、俺の顔を引き寄せキスをしたのだ。男になってファーストキス…、始めから濃厚なディープなキスだった…。

マッキーには色々と指示されながらのエッチだった…。女だった頃された事のない行為まで仕込まれた、女性が喜ぶセックスを…。人生で2人目だ…。さらに、一瞬躊躇したもの、口でも奉仕してくれた…。元男なのに…嫌じゃないのか…?

付き合ってる彼氏はアダルトビデオは好きなくせに、実際のエッチは単調で淡泊なものだった。同じ相手と2年もすればそんなものかもしれない。それに最近はエッチの回数も減ってきてたし…。

とにかくマッキーは快樂に達して満足していたようだった。

「どうだった？」

「女ってすごいヤバイね…、すごく気持ち良かったよ…。でもこれでホストになっても困らないはずだよ…。1度寝た客は結構引く張れるし…、2回寝たら離れられなくなるよ…。」

あつ！もしかしてこれもレクチャーのつもりか…？自分から誘ったのに、そんな言い訳まで用意してるなんて…。

「さっ、シャワーでも浴びて朝食食べいこうか？」

「だね…。」

やっぱりマッキーのペースになってしまう。男だったなら引く張ってくれる頼りがいのある人だが、これが女だと印象が変わるのはなんだろう…？

022 返信（前書き）

ついに前回、由宇は男としてエッチを経験してしまいました。しかもその相手はマッキー…。でもそれは愛の無い快樂のエッチ…。今後二人の中にちゃんと愛は育っていくのでしょうか…？

## 022 返信

昨日と同じレストランで朝食を取っていると、30分も早く比嘉さんが顔を出した。

「あつ、おはようございます。お二人共お早いですね?」

「比嘉さんこそ。」

「いや、早く着いてしまったので私もコーヒーでも飲んで待つてようと思ってまして。」

「そうでしたか…。」

「もう食べ終わりましたか?」

「そうですね。すぐ行きますか?」

「行けるなら…、」

「じゃ、由宇、部屋から荷物取ってきて、チェックアウトしておくから。」

「分かった。」

部屋に上がり荷物を持とうとした時メールの受信音が鳴った。誰だろ?彼からか?と思いつつ確認すると昨日のCAの晴子さんで『一足お先に東京に帰りまゝす。』と書いてあり、ハートマークが三つも付いて、更に制服姿の満面な笑顔の写メ付きだった。

比嘉さんとは那覇空港まで、石垣では別の担当の刑事さんが待っていた。

「どうも照間と申します。早速なんですが、氷室さんから連絡はありませんでしたか？」

「はい。電話でも言ったのですが、先生の出張中、やりかけの研究がある時は、定期的に指示等の連絡が入るのですが、今回はパツタリですね…。」

「そうですか…。」

「あの…、それでそのおばちゃんってのは…？」

「あつ、それが今回は被害も無かったので、嚴重注意という事で釈放する事になったのです。なんですが、名前も住所も言わないので、調書を書けない状況でして…。」

「はあ…。」

「身分を証明するモノでも持っていればいいのですがね。で、喋ったと思ったら『真木翼を呼んでくれ！』の一言だけなんで、ウチらも困ってますて。」

なんとも頑固な人だ。でも教授的には、外部に研究内容を絶対に漏らしたくないのだらう。俺達もそのつもりでいかなくてはならない。

「誰だか心当たりありますかね？」

「さあ？沖縄に知り合いはいないので…。」

「そうですか…。もし知り合いでしたら身元引き受けをお願いしたいのですが、大丈夫ですかね？」

「はい、もちろん。」

そんな会話をしていると、いつしか車は警察署へと滑り込んだ。そして俺達は会議室のようなところで待たされた。少し待っているとドアが開き、さっきの照間さんが入ってきた。

「真木さんこちらへ。」

二人で立ち上がると、

「あつ、お連れの方はここでお待ち下さい。」

ゲツ、ここまできて叔父さんと対面出来ないなんて…。

「じゃ行ってくる。」

「うん。」

マツキーも『この人も一緒に会わせて下さい。』くらい言ってくれてもいいのに…。

どのくらい待たされたのだろう…。やる事がないので携帯をいじり始めた。そうだ晴子さんにメールを返そう。始めから返信をしないのでは、可哀相と思い返信の文を考えた。

でもあの内容の薄いメールに対して返す内容はどうしたらいいの

だろう…？って言うかその前に、何一つ彼女の事を知らない…。まあ何歳かも気になるしプロフィールでも聞いておくか…。そう思い適当に打ってメールしてみたが、即返信はなかった。おそらく仕事  
中なのだろう…。

それと返信してないメールがもう一つ…、彼氏だ。

こっちは中一日空いてしまった…。なんて返したらいいものか…？で結局、『研修頑張ってる？電話出れなくてゴメンね。生活費の為に夜のバイト始めたから、夜に電話出れないかも。なんか急用だった？』と精一杯の嘘のメールを送ったのだった。もちろんこっちも返信はなかった。こっちも研修中だろう…。

小一時間後マッキーが照間さんと帰ってきた。私に目で合図を送ってる。でも何を伝えてきてるのか分からない。果たして上手い  
ったのか？

「すいません。え〜と、田丸さんでしたっけ？」

「はい。」

「氷室さんの遠縁でらっしゃるとか…。」

「はい…？」

なんだこの読めない展開は？マッキーの方をチラッと見たが反応  
なしだった。

「氷室さんの荷物の受け取りお願い出来ますか？」

「はあ…？」



おばちゃんは教授じゃなかったのか？

「じゃ担当の者が書類持ってきますので、記入して下さい。」

「はあ…。」

「じゃ、失礼します。終わりましたら空港まで送りますので。」

そう言っただけで部屋から出ていった。どうなったの？そんな感じでマツキーの方を振り向いた。相変わらず説明の下手なマツキーの話を聞いているところだ。

取り調べ室に入って相手の顔を見て一瞬で“この女性は教授だ！”と思ったそうだ。教授の面影のある顔立ちだったらしい。そしてマツキーの考えておいた嘘の設定で話し始めたそうだ。

『お母さん！』

そう言っただけで、照間さんもその女性も目を点にしてマツキーの方を向いたそうだ。

『お母さんは何も言わないで…。刑事さん私が話します。実は私…、ニューハーフなんです。』

照間さんは目を疑っていた。この綺麗な人がニューハーフ？と言わんばかりの目だったそうだ。教授も始めはキョトンとしていたらしい。目の前で喋っている人がマツキーだと気付くまで時間がかかったみたいだ。まさかマツキーまで、薬の影響を受けて性転換しているとは思ってもみなかったからだろう。

『母と先生が会うようになったのは、私が手術を受けるちょっと前からです。始めは手術を思い留まるよう諭して頂けないかと相談していたのでしょう。でもいつしか二人は男女の仲に…、そう、刑事さん二人は不倫していたのです。』

『そつ、そうですか…。』

『息子がニューハーフ。自分らは不倫…。だから名前を言えなかったんだと思います。もし不倫が父にバレたら…。』

『じゃ、教授はどうしたんですか？お母さん？』

そこで打ち合わせしてたらしく葵からの電話だ。『10分後に電話くれ。』と送信ボタンを押すだけにしておいたボタンを、取り調べ室に入って教授だと確信した時に押したそうだ。

そしてその場で電話に出て、教授の振りをした葵と電話で話したそうだ。教授は既に東京に戻っている設定らしい。照間刑事とも電話で話して、葵の偽教授もこっぴどく怒られてたそうだ。

「で、一件落着つてとかな。」

「成る程…。」

そんな嘘で、よく騙せたな…。

「それで夕方の便で3人で那覇に戻って、羽田行きはチケット取れ次第帰る感じだな。」

「ふん。席あるかな？」

「そこが問題だな。」

「だね。」

羽田　那覇間のチケットはまだ確保出来てないそうだ。そして遠縁の叔父さんこと氷室教授と初対面となるのだ。今の見た目は叔母さんとなっているみたいだけど…。

### 023 対面（前書き）

由宇の叔父さんこと氷室教授との初対面です。っていうか、やっと登場です。

## 023 対面

歳は50半ばと聞いていたが少し若く見える。というより30代と言われても納得しそうだ。

女性になったからかそう見えるだけか…？それとも元々実年齢より若く見える人だったのか…？でもどつかで見たことあるような顔立ちだ…。でもそれは思い出せなかった。

「真木君悪かったね、沖縄まで来てもらって。」

「いえいえ、大丈夫です。」

「ところでそちらの方は？」

おっと、どうやら俺の事らしい。自己紹介でもするか。

「由宇です。田丸由宇です。」

「おー、由宇か。大きくなったな…。それにしても由宇はずいぶんとボーイッシュな感じなんだな…。声も低いし、始め見た時は男の子かと思ったよ。」

「はい。実は俺もマッキーと一緒に…、」

「えっ俺？一緒って？えー？なんで由宇まで…？そもそも真木君だつて…。」

「それは…。」

マツキーが那覇に向かう飛行機の中で、今までの経緯を細かく説明した。叔父さんも…、今は叔母さんと言った方がしっくりくるか…。その叔母さんが、かみ砕きながらマツキーの下手な説明を聞いている。

「そうか…、真木君が巻き込んで悪かったな。」

『マキクンがマキコンで…、』って…、正真正銘の親父ギャグだ…。以前にも似たような事があったような…。まあいいや、この親父ギャグは愛想笑いでもして受け流して…。

「ハハハ…。そつ、それで元に戻れるんですね…？」

「うん。」

唸りながら俺とマツキーを見てる。もしかしたらダメなのか？

「君達に折り入って頼みがあるんだ…。」

俺とマツキーが目を合わせる。なんだろ…？

「おそろく戻れると思うが、その前にデータを取らせてもらえないだろうか？」

「おそろく…？」

「おそろくってなんだよ？戻れないのか？それにデータって！モルモットじゃないんだから！」

「シーツ！由宇は何興奮して大声出してんだよ？他のお客に迷惑だ

る。とりあえず座れって！」

「だってさ…。」

「私はいいですよ。協力します。」

「マツキー！？」

なんだかマツキーに裏切られた気がした。そりゃ、マツキーは叔父さんの研究の手伝いを、今までずっとしてきたからいいだろうけど、こっちは…、

「おっ、俺は…、俺には付き合っている人がいるから、一日も早く戻してほしいです。」

「恋人か…。」

「はい。それに大学に転入して友達作れたとして、途中で性別が変わるなんてのが分かったら、どんな目で見られるか…？やっぱ一日でも早く元に戻してもらいたいです。」

「そうか…、そうだな…。だったら、せめて春休み中はそのままってのはどうだ？私もそのつもりだし。」

「由宇もそうしなよ！」

自己チューな…。自分本位過ぎる…。しかも『そうしなよ！』って、ノリが軽すぎる…。こんな声じゃ誰とも電話すら出来ない…。それに春休み終わるまで、2週間以上あるじゃん！精神的にもつかない…。

「それだったら、帰ったら血液検査だけでもやって欲しいんだ。」

「血液検査…？採血だけだったら一日で済みますよね？」

「まつ、まあ…。結果が出るのもう少しかかるが…。」

「俺に結果なんて関係ありません。」

「うつ…。」

「先生さっきも話した通り、葵は『男のままでいいかな。』なんて言っていました、他のデータは葵にお願いしましょうよ。」

「そうだな…。」

研究する人の悪い癖だ。より多くのデータが欲しいのだろう。

「よし！決まり！そうだ先生。」

「ん？」

「私にも配合データ見せて下さいよ。パソコンのパスワード変わってて、見れなかったんです。」

「おつ、そつ、そうか。そうだな、帰ってからな。」

「お願いします。」

「そのかわりトップシークレットだからな！他で悪用されないよう



にしなければならいからな。」

「はい。」

「本当だ。こんな薬が世間に出回ったら大変極まりない。絶対外部秘だ！」

羽田行きは夕方の便が3人分取れて、文字通りトンボ帰りとなった。初沖縄を満喫する暇は一切なかった。食事だって、ホテルと空港でしか味わえなかったし…。こんなだったら留守番しとけばよかった…。

## 024 決意

なんだかこの2日間は座ってばかりだったな……。あとはマツキ  
ーと絡みあつたくらいか……。いや……。あれを『くらいか……。』と表  
現出来るモノではない。

そんな事を思い出してたら自然と、頬が緩んでしまった。男とし  
て女の子とエッチをした……。男としての初めての快楽……。それにし  
ても、あの時の自分の行動が未だに信じられない……。

女の時は、特にエッチが好きでもなかったが、彼が望むなら……。  
彼が私で気持ち良くなってくれればと、体調が悪くない限り、彼が  
したい時はそれに応えていた。でも本当は他で浮気されたくないか  
ら……。彼が『したい』と言えば、『私も……。』なんて強がりたりし  
て……。そんなつもりはないけど体で彼の気持ちを繋いでいたのかも  
しれない。

それにしても、アソコから分身が出る瞬間、もの凄く気持ちが良  
かった……。彼が……。男がエッチ好きなのがなんとなく理解出来た気  
がする。

「バスタブにお湯張れたから先どうぞ。」

「あー、ありがと。俺が先でいいの?」

「私が先入っていいなら先入るけど?」

「いいよ。先どうぞ。」

「あー、そう。じゃ、遠慮なく。」

あれっ?入っちゃうんだ?ま、いつか。冷蔵庫を覗くと、水かビ

ールしかない。迷わずビールを取り出し喉を潤す。ツマミになりそうなのは、美穂さんが来た時に食べたベーコンの残りくらいしか見当たらなかった。

ソファーに腰掛けテレビの電源をオンにする。ふと、テレビ台の中のDVDのソフトが気になりだして見てみる事にした。ポピュラーな洋画が目に入る。この間観たアダルトビデオは見当たらない…。チツと思わず舌打ちしてしまった。何処に隠してるかまでは分からない。でも探してまで観ようとは思わなかった。

やる事もなかったので、返信があつたかなあ〜と思い携帯電話を見てみると、飛行機に乗る時に電源を落としたままの状態だった。電源を入れると、予想通りの人達からのメールが1通ずつ届いている。

先に晴子さんからのメールを見ると『簡単なプロフィールですか？それは私に少しは興味出てきたって事かな？（笑）え〜と、真下晴子24歳スリーサイズは秘密です。胸は見た通り控え目（涙）な感じで、身長は164.9センチで体重はダイエット中で頑張ってます。由宇のプロフィールも知りたいな。早く会いたいから早く帰ってきてね！』と絵文字も途中途中にちりばめられている。最後はお決まりのハートマークだった。

趣味などは一切書いてなく、ツツコミ甲斐のあるメールだった。でも朝の内容の薄いメールに比べれば上出来だ。返信はあとにして彼のメールを読む事にした。

『おいおい、夜のバイトってキャバ嬢とかじゃないよな？もしそうだったら怒るぞ！ゴールデンウィークの予定立っていたから、バイト休みの夜にでも一度電話くれ！たまには由宇の声も聞きたいし！なんちゃって。（笑）』前半はこっちの事を心配して、更にヤキモチを妬いてくれているようで、何となく嬉しかった。だが、問題は後半の方だ…。声は現状どうにもならない…。

はあ……。深いため息をついてしまう。こうなったら明日すぐにでも採血してもらって、すぐにでも薬を貰えるよう教授に直談判

しよう。マツキは教授に協力的な姿勢だったから、俺自ら頼まないとダメだろう。

今となっては、春休みが終わるまで待つてられないのだ！

025 本能

「お風呂空いたよ。」

「まったく、随分長風呂だったな…、先に入ればよかったよ…。」

「何言ってるのよ。入ってくるかと思って中で待ってたのに…。」

「へっ？マジ？」

「嘘に決まってるじゃん。」

ウツ…、またマッキーにやられた…。どうも俺は人を信じる傾向があるらしい。マッキーのこの手の冗談の見極めを早めにマスターせねば…。

「風呂入ってくる。」

「じゅっくり。」

あゝ情けない…。『入ってくるかと思って中で待ってたのに…。』なんて言われて、ドキツとしてしまった。心はまだ女だと思っていた…、だけど気持ちとは裏腹に下半身とか本能といった部分は、下心でいっぱいらしい。

脱衣所でどんどん脱いでいく…、胸が無くなってアソコには付いてなかったモノが存在している。洗面台の鏡には、女だった頃の理想の男性が写ってて、程よく筋肉が付いてて、ジャーニーズ系の顔立ちなのだ。ナンパしたら結構な確率で成功するに違いない。

一通り頭・体と洗って湯舟に浸かった…。女だった頃は“髪を洗

う”と表現するのが普通だったが、今は“頭を洗う”と言った方がしっくりくる。その方が違和感が無いのだ。

あゝなんでだろ…、昨日寝る前に一回、起きてから二回エッチしたのに、またしたいのはなんでだろ？風呂から上がったらマツキー誘ってみようかな…？

ん…、待てよ…、もしかして、明日教授が薬くれたら、今日が男最後の日だよな…。なんかそう考えると、すぐ戻るの勿体ないかな…。

いや…、違う違う！そうじゃない！彼に電話するため一日でも早く戻してもらわないと！今日マツキーとしない方がいいな…。セックス中毒になつて戻りたくなかったら大変だもんな…。『あー、もう！』つつい独り言を言つて、頭を掻きむしりながら湯舟から立ち上がってしまった。なんかよく分かんない…。

「由宇？」

「うわっ！？」

いつの間にかマツキーが風呂のドアを開けて覗いていたのだ。

「さっきから、何独り言言ってるの？」

「何って…、」

「あれっ？またアソコ大きくして、」

ん？そう言われて視線を下に移すと、言われた通りの状態になっていた。

「うわっ！」

俺は慌てて湯舟へと身体を沈めた。エッチな事考えてたからか…？もしかして男に染まってきたる？

「仕方ないなあ…。」

マツキーはそう言っただアを閉めると、部屋着を脱ぎ、頭に巻いたバスタオルを取って風呂に入ってきた。

「えーっ！？何？何？」

「ちょっともう一回体温めさせて。」

「えっ？」

「ほらっ！詰めて詰めて！」

俺は言われるまま片方の端に詰めた。するとその空いたスペースにマツキーが入ってくる。

「なんでまた入るの？」

「いや…、せつかくだから一人で処理する方法教えてあげようと思っただけ。この間中途半端に終わっちゃったし。だからその前に体温めてさ…。」

「そんなのいいよ。おっ、俺は明日薬もらっように頼むから！そしてたら明後日の朝には女の子に戻ってるわけだし。」

「そりゃ無理だよ。」

「なんで？」

「なんでって…、今回の沖縄での材料調達が不備に終わったから…かな？手ぶらだったろ？」

「あっ！」

「なっ？」

『なっ？』じゃないよ。じゃ、なんで取ってこなかったんだよ？

「だっ、だったら、次の調達予定は？」

「しばらくゆつくり休むと思うよ？あの年で留置所にいたからな…、でも少し若く見えな…。」

若く…？あれ？若返りの効果もあつたりして？でもそんな事あつたら、その発見も凄いかも。古代からの人間の願望、不老不死。

「それだったら、ウチらで行こうよ！」

「ウチらって…、由宇はダイバー免許持ってるの？」

「えっ…？ダイバー…無い…。マッキーは？」

「私はまだ初心者だから水深の浅いとしか無理。しかもその免許も性別欄男になってるし。」



免許は警察の時みたいに性同一性障害でごまかせるだろ！

「それに今、鑑賞用で乱獲されてて、許可なく輸送出来ないみたいだよ。ちなみに先生は、無許可で持ち出そうとしてたみたいだね。」

「えーっ！？だったらその鑑賞用買ってくる。」

「今人気だからきつと高いぞ。それに都内はすでに品薄だろうし。入荷待ちってやつだな。」

「ゲッ！」

「だからわざわざ沖縄まで行っただろうけどね。」

「そんな〜。。。」

「一応他のでも試したんだけど、マウスで成功しのアレだけなんだよ。。。」

「えっ？私達以前に実験で成功してたんですか？」

「そりゃ、1回の実験だけでは偶然って事も有り得るからね。あの日が3回目だったのさ。2回目が成功したあと、材料が欲しくなった先生はすぐ沖縄に行く事にしたんだ。」

材料探しに行くって事は、割った瓶の薬の残りは少なかったって事か…。

「次はチンパンジーでの実験だなんて張り切ってたし…。で、今は

由宇も知つての通り自分も女性つてわけさ。今思えば貴重な薬だったんだよな……」

「だったらなんで、そんな大事のモノ三崎なんかに使わせたんだよ？」

「だな……。俺も後悔してる。」

後悔しても、戻ってこないっの！まったく……。

「だけど先生、春休み中になんとかするみたいの事言ってたけど、当てでもあるのかな……？」

えーっ！？それは確約じゃないんですか？それすらも未定？

## 026 不安

「俺上がるわ。」

「ちょっと待つてよ。」

そう言つて向かい合わせに座つてたマッキーが、俺の足の間に入つてきて後ろを向いて寄り掛かつてきた。なつ、なんなんだ？ 誘つてゐる…？ からかわれてるのか？

「ねえ？」

「なつ、何？」

「男になつてどう？」

「どうつて？」

「だから…、女の時と違うと思ふ事ない？」

「ん…、体付きとか？」

「そんな他人でも見れば判る事じゃなくて、感情つていうか…、感覚つていうか…」

「感覚ねえ…。例えば？」

「例えば？ うん…。五感とかは？」

「五感？あゝ、ビールは美味く感じた。」

「ビール？」

「焼肉奢ってもらった時はそうでもなかったけど、沖縄で飲んだ時は、まだ飲めそうだったし。」

「ふゝん。他には？」

「えゝ、他？？そうだな…、なんかエッチになったみたい。」

「えっ？」

「昔は自分からしようとは思わなかったのに、昨日はマツキーの事襲っちゃったし…、」

「…。」

「それに自分ので見慣れてる筈なのに、今だってドキドキしてる…。」

そう言い終わる前に、マツキーが俺の方に振り向いた。

「ドキドキしてるんだ？」

「まあ…。」

「今日もエッチする？」

さっきから目が合った状態だ…、これはマツキー特有の冗談か…

？見極められない…、が、我慢出来ない…。

「本気にするよ。」

そう言つて両胸を後ろから鷺掴みにして乱暴に揉んでやった。柔らかに感じて気持ちいい…、

「由宇…、」

そこで唇を重ねてやった。向こうも柔らかな唇で迎えてくれた。

「上がってベッド行くぞ！」

「…うん。」

珍しく俺がリードしてる？っていうか俺のペース？っていうかマッシーも随分素直じゃね？そして疲れてる筈なのに、俺達はベッドで激しく絡みあっていた…。

昨日は何時に寝たか覚えてない。気付いた時…、それは今なのだが、携帯電話の着信で起こされたのだ。寝ぼけたまま電話に出る。

「もしもし…。」

「あれっ？」

「あー？」

「あつ、すみません間違えました。」

そう言われ、速攻電話を切ってやった。たく、間違えんなよ……。そう思いつつ、また寝ようとしたら、また電話が鳴るのだ。

「なんなんだよ。」

そんな独り言を言いつつ電話に出る……、

「……はい。」

「あの〴〵度々すみませんが……、」

また間違い電話の奴か？と思ったところで、ある事に気付いた。

「あんた誰ですか？」

この声の主が彼氏の小松和也だと気付くのが遅すぎた。あーヤバイ！どーしたらいい？どう取り繕えば……？

「もしもし？聞いてます？」

和也がキレ気味に聞いてきてる……。

「はあ……、貴方は？」

和也つて分かってるけど、苦し紛れに口から出てしまった。

「あー俺は、今アナタが持つてる携帯の持ち主の彼氏です。アナタは由宇とどうゆう関係ですか？」

キレ気味だが、キレてるのを押さえてる…？和也にしては珍しい対応の仕方だ…。

そんな時に横で寝てる裸のマツキーが目に入る。

「すみません。ちょっとお待ち下さい。」

電話を押さえながらマツキーを起こしにかかる。

「マツキー起きて！」

「ん…、何？朝からうるさいな…、どうした？」

「和也から…、彼氏から電話なんだよ。私の友達の振りしてゴマかして！お願い。」

「ん？何？ボーツとしてるからもう一回言って。」

「だから…、」

2回目の説明でなんとか理解してくれて、代わってくれた。

「もしもお電話代わりました。わたくし真木と申します。はい。あーそうなんですか？いえ、昨日大学で拾ったんですよ。」

拾った？咄嗟の嘘にしてはうまい。俺もそう言えばよかったのか…。

「はい。ええ。それで春休みで事務員がいないので、落とし物預けられないので…、もしよかったら持ち主の方の名前と特徴教えて下

さい。いえいえ。あー成る程。分かりました。氷室教授の…、あー  
そうですか。いえ、では失礼しまーす。」

そう言っであっさり切ってしまった。

「はい、携帯。」

「サンキュー…。」

俺の手に携帯電話が戻ってきた。

「なあ、由宇。」

「うん。」

「こんな事言うのなんだけど別れちゃえば？」

「えっ？」

「いつ戻れるか分からないし、春休み中だって元に戻るか怪しい  
よ。」

「…。」

「いつまでもゴマかききれないぞ…。」

そう言っで俺に軽くキスをして部屋を出て行った。しばらくして  
シャワーの音が遠くの方から聞こえてくる。

「だよな…。」



って、今キスされた？いや、確実にマツキーの唇の感触が残ってる。マツキー…何考えてるんだ…？

それに、彼氏にゴマかしきれないだろうから別れたらって軽く言うけど、そう簡単に諦めきれない。和也は初めて付き合った人…、唯一告白してくれた人なのだ…。

とはいえ、この状態はいつまで続くのだろう…。

027 欲求不満な女

俺がシャワーから出ると、マッキーはすでに外出出来る準備を整え終えていた。

「えっ？何？どっか行くの？学校？」

「いや、ちょっと三崎とな…、」

「三崎？三崎君と何処行くの？」

「買い物だよ。この間買い物途中で引っ返させちゃったからな、そのお詫びだよ。」

あれ？三崎君とは俺も買い物の約束をさせられている。マッキーはいつの間に…？

「そう…。あつ！この間の内緒話って買い物だったの？」

「あゝあれ…、あれは…ちょっと違うよ。」

「違うんだ…。何を話したか教えてよ。」

「いや、別に教えない事もないけど…、」

「じゃ、教えてよ。」

「うん…、あれはな…、」

「うん。」

「『由宇を彼氏してイイ?』って聞かれたんだよ。」

「ヘッ?俺?彼氏?」

「だから…、三崎は由宇みたいのが好みみたいよ。」

「あつ…、そう。」

嬉しいような、悲しいような…。

「あれ…、でもそのあと確かマツキー『かぶってもイイ』みたいな事言ってたよね…?」

「あー、だから由宇は私と三崎と二股でいいから。」

「へっ…?ちよつと待ってよ!俺はすぐにでも元に戻りたい…、」

「だから戻るまでだよ。それに昨日も言ったけど、そんなすぐ戻る保証ないから。」

「うつ…、」

「それに私とは体だけでいいから、三崎とはデートしてやりなよ!」

なんかサラッと凄い発言なんですけど…。

「あと合鍵テーブルの上に置いてあるから出掛ける時は鍵閉めてっ  
てな。」

「ちょっと待って、何時頃帰ってくるの？」

「三崎次第だな。そんじゃ行ってきまーす。」

「おい！」

そんな俺の呼びかけにも答えず、無情にも玄関のドアはボタンと音をたてて閉まった。俺は腰にバスタオルを巻いたままボーツと立ち尽くしてしまった。俺も連れていってくれよ…。

テーブルを見ると鍵とサンドイッチが用意されていた。卵とマヨネーズのシンプルなサンドイッチ。

ちよつと待て…、三崎君があの時点で『彼氏にしてもイイ？』って聞いて、マツキーが『かぶつてもイイし』って言っただって事は…、あの時点でマツキーにも狙われてた？あれ？どうゆう事…？いや…、この手の事を考えるのは止めよう。なんにせよ、元に戻れば問題ないのだ！それまで三崎君の事はうまくかわしていけばいい。

テーブルでサンドイッチを食べていると、チャイムが鳴った。ハテ？誰だろ？マツキーの友達か？そんな事考えながら玄関に向かうと、急にドアが開いた。

「うわっ！あー、えつと、美穂さん。」

「何シャワー？」

俺といえば、今だバスタオル一枚の格好なのだ。

「あつ、すみません。」

「上がるわよ。」

「はい…。」

美穂さんがリビングに入ったところで振り向いた。

「あの子は？翼の従姉妹。」

「さっき買い物行くなって出掛けましたけど。」

「そう…、さっき。」

「はい。」

「ねえ…？」

「はい…？」

「お姉さんとイイ事しようか？」

へっ？イイ事？まさかエッチな事…？朝から？

「みつ、美穂さんお仕事は行かなくて…、」

「今日は午後からだから平気！ねえ…。」

そしてソファーに押し倒され、バスタオルを剥ぎ取られてしまいました。

ノーーーーー！！！！

## 028 女心

結局…、美穂さんとエッチしてしまった。始めは抵抗したが…、抵抗といっても口だけけど…。それに最後はガンガン自分から腰振ってたし…。なんかどうしちゃったんだろ…、っていうかどうなっちゃうのかな…？

「ねえ…？」

「なんでしょ？」

「彼女に悪い事しちゃったわね…。」

「…。」

「留守中とはいえ…。」

「大丈夫です…。」

「そう…、もしかして本当にあの子と付き合いって無いの？」

「付き合いってる人は地元にいるんで…。」

「そうなんだ…、聞くんじゃなかった…。」

「あつ…、もう言いません…。」

「ねえ…、」

「ん？」

「なんで東京出てきたの？」

「なんでって…、」

「翼の真似してホストになりたかったとか？」

まあ、ここは別にごまかす必要ないか。

「大学です。系列の短大から4年制に編入出来る事になったんで、出てきました。」

「そう。」

「美穂さんは何してる人ですか？」

「私？」

「はい。」

「私は…、医者よ。」

「医者？」

「医者っていつでも美容整形外科なんだけどね。今日も午後からオペ入ってるんだ。」

「医者か…、凄いですね！」

「別に凄くないわよ。」

「凄いですよ。医者になるくらいだから頭イイだろうし。」

「まあ…、それなりに…。」

認めちゃうんだ！謙遜しないんだ…。

「今度から『先生』って呼びますね。」

「止めてよ。プライベートまで、そんな呼ばれ方されたくない！『美穂』って呼んで欲しいな…。」

「名前ですか…、『美穂さん』って呼べばいいですか？」

「う…ん…。」

なんか不服そうだ。そうだ！確かマツキーが『美穂はM（体質）だから…』みたいな事言ってたな…。

「美穂！」

「えっ…！？はい。」

呼び捨てにしたただけなのに、なんだか嬉しそうな顔をしている。急に呼ばれて驚いたのとは違うと思う。

「呼んだだけ。」

「何よ…、そうだ、私は何て呼んだらいい？」



面倒臭い人だな…、

「適当に呼んでいいよ。」

「分かった…。」

一瞬悲しそうな顔をした気がした。愛ちゃんの時みたい感じに“名前と呼んでいいよ”って言ってやればよかったかな…。

「ねえ？」

「ん？」

「美穂にとって真木翼ってどんな人？」

「翼？あつ、そうだ！今回の事は翼には絶対内緒にしてね。」

「えっ？あー、そう…。だったら口止め料にお小遣でも貰っておくかな？」

「しょうがないな…、分かった。あとでね。」

「ラッキー！」

「で、なんだっけ？」

「だから真木翼の話。」

「あゝ、翼ね。翼はとにかく優しいのよ。好みのタイプってのもあ

ったけど、なんかハマっちゃってさ…。」

「『ハマっちゃって』か…。」

「でもなんでそんな事聞くの？幼なじみなんでしょ？」

「それはあれだよ…、え〜と、女性には接し方違うだろ？」

「まあ…。」

ゴマかせたか？それよりマツキーの事もっと聞きたいのに聞けなそうだな…。ここは話題を変えて…、

「それより美穂っていくつ？」

「何それ？オバサンだって言いたいの？」

「ちっ、違うよ。美穂に興味持ったらダメなら聞かないけど。」

「えっ？ん…、ダメじゃないけど…。」

「じゃ、いくつ？俺はハタチ！」

「さっ、36…。」

「本当に？」

「…、」

「干支は？」

「干支？干支は…、」

「ブー時間切れ！」

「あつ…え〜と、本当はね…、」

「言わなくていいよ。美穂は若く見えるよ。20代って言われても納得いくし。」

「…あつ…ありがとう。」

美穂が戸惑ってるように見える。別にお世辞じゃなく、実際29歳と言われたら信じる人もいるだろう。

「あつ！美穂もう12時過ぎてるよ！仕事間に合う？」

「えっ！嘘？ヤバイ！シャワー借りるね。」

そう言っただッシュでリビングを出ていった。部屋に残された俺は、美穂のバッグが目についてしまい、見てはいけないと思いつつその中を見てしまった。

中には保険証が入っていて、美穂の生年月日から計算すると…、ちょうど20コ上だから40歳！？扶養家族に12歳の娘さんが1人…。ん…バツありか？

それにしても…、40歳か…。自分の20年後なんか考えられないけど、そんな頃までエッチしたいもののかな…？エッチ好きな大人の女性って…、それとも個人差かな？

玄関まで美穂をお見送りにいくと、気前よく5万円渡してきて、最後にキスのおねだりをされた。

「甘えん坊だな。」

「早く早く。」

「口紅落ちない？」

「そんなディープなキスじゃなくて……」

面倒臭いと思いつつ、チュツと軽くキスしてあげた。

「行ってきます。」

「仕事頑張つて！」

そう言つて見送つた。でも美穂が若いのは、きっと自分のクリニックで色々やってるからだ。シワにヒアルロン酸注射をして、シワを消すつてなんかの本で読んだ事がある。多分自分でもやってるに違いない。

でも5万円も貰つてよかったのか……、なんか罪悪感を感じずにはいられなかった。でも考え方を変えれば、援交したみたいなものか……？女だった頃に援交なんかした事はないが、こんな感じだろうか……？

でも美穂みたいああゆう人がホストクラブにはまるのか……。彼女達は月にどの位店でお金を落としていくのだろう……？

午後は暇だった…。そもそも研究の手伝いが必要ならば、東京にいる理由がないのだ。オバサンになってしまった教授は、一応明後日から研究室に出てくるそうだ。

とりあえず履歴書なしで働ける日雇いバイトでも捜そうと思い、東京に出てきた時に買ったアルバイト雑誌を見るが、日雇いはどれも安い…。しかも基本的に履歴書はどこも必要な感じだし…。

それを考えたらエッチしただけでお小遣を5万もらったのは効率的だった。

アルバイト雑誌をペラペラめくっていて、ふと、お昼ご飯を食べてなかったのを思い出した。冷蔵庫を覗くが食材は卵くらいなもの…。ベーコンは昨日の晩にビールと共に胃袋に収まってしまっていて既に無い…。そして俺は何日か分の食材を買いがてら、食事をしに外出する事にした。

男になって初めて一人で歩く…。女だった頃は、一人で外食なんて考えられなかった。彼氏と一緒に友達と一緒にないと、お店に入りづらいと感じていたのだ。でもどうだろう…。牛丼屋やラーメン屋だって今の俺ならデビュー出来そうな気がする。

でも結局入った店は普通の喫茶店。ランチを食べ終わるとスーパーへと繰り出した。

籠を持つと、野菜・肉・魚・牛乳・お菓子と籠へ入れ、酒のつまみになりそうなものも忘れずに籠へと入れていった。と、そこで女性に声をかけられた。

「お兄さん。」

回りを見ても、明らかに男は俺一人…。

「俺？」

「そう。」

「なんででしょうか？」

女性は見たところ20代後半の専業主婦といったところか…？

「いや、人違いでした。」

「はあ…？」

「あのお…、お兄さん芸能人に間違えられません？」

「芸能人ですか？ってあなたなんかの勧誘ですか？」

「違いますよ。ほらっ、なんていったかしら、最近ドラマに出てくるようになったジャニーズの子…。」

俺が女だった頃好きだった子に違いない。私自身似てると感じて  
るのだから、この人がそう思っても、なんら不思議じゃない。

「すみません。失礼します。」

そう言っただけで放置されてきた。でも、そういえば、若い女性に  
はチラチラ二度見されてる気がする。確認されてるのだ。違うと分  
かってても見てる人もいた。

そういえば喫茶店のウェイトレスにもガン見された気がする。こ  
んな感じならホストで十分やっていけるかもしれない。

短い期間でいいなら、ホストやってもいいかなと思いつめていた  
…。

遅い！遅すぎる！マッキーはどこまで買い物に行ったんだ！？俺が作ったカレーは、鍋の中でとくに冷めている。まったく、どこ行っただんだか…。

結局俺は一人で食事を済ませ、お風呂に入った。風呂から上がった後もマッキーが帰ってきた様子は無く、俺は一人広いベッドで寝る事になった。

翌朝、2日連続で携帯電話の着信で起こされた。

「誰だ…？」

携帯電話のディスプレイを見ると“和也”と表示されている。

横を見ても今日はマッキーがいない。昨日は帰ってこなかったようだ。一瞬出ようか迷ったが、昨日出て今日出ないのは変だと思える事にした。

「もしもし！」

「あーすいません。昨日の方ですか？」

「はい…。」

和也の声がトーンダウンしたのが分かった。

「すいません。昨日は土曜で学校に行っていないもんで…。」

「そうですか…。」

「明日は月曜なんで行ってみます。その教授さんの部屋に行きますので。」

「すみません。よろしく願います。」

「いえいえ…。でも春休み中なんで、会えるかどうか分かりませんから、あまり期待しないで下さいね。」

「はあ…。」

和也がさらにトーンダウンしてる。

「それにしても随分心配なさっているんですね。」

「そりゃ…、いえ、それでは願います。」

「あっ！」

俺は和也ともう少し話してたくて、何か話題を考えた。

「はい？」

「彼女と…、彼女とケンカでもされたとか？」

「いえ…、ここ最近連絡が取れなかったから、心配になってて…。」

うわっ、なんか本音っぱい事聞けて嬉しいな！

「そうでしたか。それは心配ですね。」



「あのく、あなたは大学生なんですよね？」

「はあ…、一応。」

ん…？なんだ？

「やっぱりあれですかね、女子大生は、キャバクラなんかのバイトしてる子多いですか？」

おー！マジで心配してくれてる！和也ったら…。でも俺はどんだけ信用されてないんだ…。

「えーと、俺の回りは聞かないけど、知らないだけだと思いますよ。それにもしそれでも、自分からは言っておけないですよ。」

「…ですよね。」

「彼女もキャバ嬢してるって疑ってるのか？」

「いえ…、そうじゃありません。ただ…、」

「ただ？」

「東京ですからね。」

「成る程…。でも彼女がどういった方が知りませんが、信じてあげたらどうですか？」

「はあ…、いや、あなたに言われるまでもなく信じてますよ。ただ

すぐに会える距離じゃないから心配だけです。」

「そうですか…。」

「見ず知らずの人にこんな話してすみません。」

「いえ…。」

「ではよろしくお願いします。」

和也はまた電話を切る切り出し方だ…。2度も引つ張ったら変な人に思われるに違いない。俺は泣く泣く、

「はい。それでは…。」

そう言って電話を切った。電話を切って、和也ともう少し話せなくて残念だが、なんだか和也がどう俺の事を思ってくれてるか分かって、なんだか嬉しかった。

「何ニヤニヤしてんだよ。気持ち悪いな…。彼氏か？」

「マッ、マッキー！」

この女、朝帰りの上に盗み聞きしてたとは、しぶとい奴だ！俺はいつの間にかマッキーの事を“女”と認識してるようだ。だが俺はそれをまったく自覚してないのだ。

031 男らしく

「マッ、マッキー!」

「何ニヤニヤしてんだよ! 気持ち悪いな。」

「何処行つてたんだよ! 心配したんだぞ!」

「ゴメンゴメン。ちよつとな...。」

「ちよつと何?」

「いや...、どうもお酒が弱くなっちゃったみたいで、起きたら知らない男とベッドの上で...。」

「はあー?」

「いや、だから...、」

「やられちゃったの?」

「多分...。」

「馬鹿か?」

「由宇に言われたくないよ!」

ん...、確かに...。俺も沖縄でマッキーの寝込みを襲ってるか...、

「で、今の電話彼氏？」

「うっ…、うん。」

「あの感じだと別れるつもりなの？」

「えっ…？まあ…。」

やっぱり盗み聞きしてたのか…。

「いつまでも騙しきれないと思わない？」

「そうだけど…。」

「まあ、いいけど…。カレーは由宇が作ったの？」

「えっ？うん…。他に誰が作るんだよ？」

なんか今日のマツキーは話が二転三転するな…。

「美穂とか、愛ちゃんとか？」

「俺です！…えっ！？ちょっと待って、愛ちゃんってそんな頻繁に来るの？」

「なんで？」

「いや、別に…、少し気になったから…。」

「そうだな…、美穂の次に来るかな。まあ、この二人しか来た事な

いけど。」

「そう…。」

愛ちゃんか…。どのくらいの歳から性同一性障害だったんだろう…。

「今日愛ちゃんの店行ってみる？」

「えっ？」

「興味出てきたんだろ？」

「そんなんじゃ…。」

「まっ、いいや。夜に愛ちゃんの店行こうな。」

「行ってもマツキーは飲んだらダメだからな！」

「由宇と一緒にいるから平気だろ？」

「いや、まあ…。」

「逆に由宇が一番危ないか？」

「何を!？」

「ははは…。」

またマツキーの冗談に引っ掛かってしまった…。やっぱり俺は根

が素直らしい…。

「カレー食べていいかな？」

「あつ、うん。今、温めるよ。」

「自分でやるからいいよ。それより出かける準備してよ。シャワー浴びるならサクツと浴びてさ。」

「出かけるって何処行くの？」

「着いてからのお楽しみ。」

ん…？なんか意味深だな…？それから言われた通りサクツとシャワーを浴び準備を済ませ出かける事になった。

今日も愛ちゃんのオンボロだ。まだマツキーの愛車に、一度も乗せてもらってない。

「マツキーの車って、このマンションの駐車場には置いてないの？」

「それだったら、愛ちゃんの駐車場にいるよ。たまにはエンジンかけてあげないとダメだよな。」

「入れ替えたんだ。」

「もう一台分駐車場借りるのは手間だからな。」

「そっか…、そうだよな。」

日曜の都内是比较的空いている。商業車輛がいなくなるからだろ

う。ただ幹線道路はレジャーに行き来する車で混む時間があるようだ。

「そう言えば三崎君は一緒じゃなかったの？」

「うん…、そうだね。」

「じゃ、一人で飲み行ったの？」

「いや、三崎と別れたあとナンパされて…、つつい飲みにいつちやってさ…。」

馬鹿だな…。のこのこ付いていけば尻軽だと思われて、ヤラレるのが落ちだ。

「三崎君は平気だったのかな…？」

「さあ？どうだろ、大丈夫じゃない？」

「そうかな…？ところでそのナンパしてきた相手って格好よかったの？」

「そう…でもないかな…。」

「じゃ、なんで付いていったの？」

「いや、酒が強いつて自負があったから、酔い潰してやろつと思っただけ、逆に潰れたみたいで…。」

「成る程…。今度から気をつけてね。」

「分かってる。由宇という時以外飲まないよ。」

「だね…。」

ん…？なんか俺って頼られてる？それに今、マツキーを“守らなきゃ”と思った？

体や本能、そして気持ちまでも男の体に馴染んでいくのかな…？

でもまだ由宇には自覚がない。由宇達は気持ちの上でも更なる変化を遂げるのだろうか…？変化後の性が支配していくのである…？  
…？



車は有名なホテルの駐車場へと入っていった。

「マツキーまだ昼前だぞ！」

「ん？おーい、由宇は何勘違いしてんだよ？」

「えっ？違うの？」

ホテルに入っただから、ついエッチでもするのかと思ったが、どうやら目的は違うようだ。

よくよく考えれば一緒に住んでるのだから、エッチはマンションですれば済むことだし、わざわざホテルですることはないのだ。

「じゃ、何しに来たの？」

「昔、ここの1階にスケートリンクがあったんだよ。」

昔…？

「今はそれを改装して、水族館をやってるんだ。」

「ふん。」

「イルカやアシカのショーもあるし楽しいよ。」

「そう。」

ん…？これって単なるデート？

「さっ、行くよ。」

そして二人で車を降り水族館へと向かったのだ。

「ここにな、3年前まで一緒に研究してた先輩が勤めてるんだよ。一年しか一緒じゃなかったけどな。」

「へ。」

「年上だけど何かとよくしてくれて、今でも仲良くしてもらってるんだ。」

「ふん。」

「お前関心ないね。」

「え…。だって、俺の知らない人の話でしょ？」

「先輩の話じゃないよ。」

ん？マッキーは何が言いたいんだ？勿体振るのはいいが説明はシンプルに願いたい。

「いいか、ここは水族館だ。」

「はあ…、」

「最近の水族館はな、映画の影響もあってクマノミとかも展示して

あるんだよ。」

「あーっ！ムゴッ…。」

つついデカイ声を出して、マッキーに口を押さえられてしまった。

「静かにしろ！」

回りの人の視線が俺達に集まってる。

「まだ譲ってもらえるか分からないけど、メールはしておいたから事情は分かってくれたはずだよ…。」

「いや、絶対譲ってもらおうよ。」

「って言って、もらえたとしても、山ちゃんが盗む形になるから、無理強いも出来ないし…。」

「そっ、そうか…。」

「だから今日は下見だよ。」

「下…見…？」

何言ってるの？まさかこの有名なセキュリティもちゃんとしてそんなホテルに盗みに入ろうとしてる？

「どうした？」

「いや、だって…。」

「欲しくないのか？」

「欲しいけど…。」

「だったら決まりだな。」

えーっ！犯罪者にさせるのだけは止めて！

「おっ、来た来た。センパイ！」

『センパイ』じゃないっの！

いや、逆に先輩に大活躍してもらわないと、強盗犯にされてしまう。俺も心の中で“センパイ”と叫びたい気分になってきた。

その山ちゃんと呼ばれてる先輩は、目を丸くし、疑った目でマツキーを見てる。

「先輩？」

「本当に真木か？」

「あつ、そうですよね。紛れもなく真木翼です。なんなら免許証でも見ます？」

「いや…。そうか、やったな！そうか…。本当に薬出来たんだ…。」

なんかこの山ちゃん先輩は泣きだしそうな感じだった。ん…、も

しかしてこの人って隠れ組員…？性同一性障害か…？

「ちょっと…。」

そう言って山ちゃん先輩を物影に引っ張って行くと、

「由宇ちよっと見張ってて！」

「えっ、あ、OK！」

そして胸とアソコを触らせてあげたみたいだ。

「本物だよな？手術やったとかじゃないよな？」

と、先輩の歓喜の声が聞こえてきた。

「本物です。どうですか？一肌脱いでもらえませんか？」

「ん…、それは…、ちょっと考えさせてくれ…。」

いや、山ちゃん先輩は考えないで“力になる”と言ってくれ！

「そうですか…。」

「他の奴らに聞いてみようか？」

「ツテありますか？」

「まあ水族館同士は、結構つながりあるんだよ。理由つければ少しくらい分けてくれるところあるだろう。」

「そうですか…。」

「急ぐのか？」

「いや、由宇が…、この子が早く戻りたがってて。」

「ん？この子が…？えっ？この子って…男じゃなくて元女って事？」

「どうも、後輩の田丸と申します。」

「どっ、どうも…、山田です。」

「で、2・3匹早急になんとかありませんかね？」

「ん…、あー、じゃ、なんとかやってみる。チャンスは俺の夜勤の日だな。」

「夜勤あるの？」

「病気の子とか出産控えてるイルカとかいるから、獣医とスタッフの2人は待機してるな。」

「そうなんだ…。」

「水槽と酸素送る機械用意しとけよ。」

「分かりました。で、夜勤いつですか？」

「スケジュール見てメールするよ。」

「お願いします。」

「じゃ、悪いけど仕事あるから行くな。」

「すみませんでした忙しいとこ。それと先輩、」

「ん？」

「この事は誰にも言わないで下さい。これ以上知られるのは恐いので…。」

「分かってるよ。」

そう言って山田先輩は手を振って行ってしまった。山田先輩が大活躍してクビにならない事を祈ろう。

033 恥ずかしい？

ホテルを出た私達が向かった先は叔父さんこと氷室教授の自宅だった。買い物に付き合っただけで欲しいそうさ。

「ねえマッキー。」

「ん、何？」

「氷室教授のことなんて呼んだらいいと思う？マッキー達が『先生』って呼んでるのに、俺一人だけ『叔父さん』って呼ぶのは可笑しいよね？」

「そうだね。ウチらと一緒に『先生』とか『教授』でいいんじゃない？」

「そっか…。」

「それに今は叔父さんって感じより叔母さんって感じだし。」

「だね。」

「それに、今日買い物してる時に『叔父さん』って呼んだら、店の人に変に思われるだろ？」

「確かに。」

どうやら私も『先生』って呼ぶことに落ち着きそうさ。



「そういえば、先生って性別変わって帰ったけど、家族は本人って分かってくれたのかな…？」

「あれっ？先生なら独身だよ。」

「えっ！そうなの？」

「そうだよ、知らなかったの？由宇は本当になんにも知らないんだな。」

「そりゃ…、」

俺の編入の話が出る前なんかは、親ですら年賀状だけの付き合いだったのに、その子供の俺が、その人の配偶者の有無に興味があるわけがない。第一、教授ってこともあるし、そこそいい歳のオジサンのイメージでしかなかった。年齢すら知らないのだ。

「ちなみに先生はバツ2って話だよ。」

「バツ2？離婚歴2回ってこと？」

「そう。次はないだろうけどな。」

「ふん。」

バツ2か…、でも相手がいるなら、また結婚すればいい…、誰かに遠慮することなどないのだ。

「着いた。」

「えっ！まつ、まさか、このアパート？」

「そうだよ。」

見るからに古いアパートだ。大学教授ともあるう人が住んでいる所とは到底思えない…。

「何かと出費が多いみたいよ。」

「えっ？」

俺が、教授なのになんでこんなボロアパートに住んでるんだ？つて、心で思ってる事を、質問する前にマツキーが答えてくれた。

「なんでも慰謝料やら養育費2人分やらで金が無くなるらしい…、金のかかる趣味はスキューバダイビングくらいなものかな。」

「そう…。」

「よし、呼び行くか。一緒に来る？それとも車で待つ？」

「行くよ。」

なんとなくこの古いアパートに興味があつた。自分の叔父の住んでいる家を、見てみたかったのかもしれない。

車を出てドアの前に立ちマツキーがノックをする。呼び鈴は壊れて鳴らないそうだ。

「先生ー！迎え来ました！起きてますかー？」

「おー、真木君待つてたよ。」

マッキーが呼んだらそう言ってドアを開けたのだ。  
ただ、お風呂上がりだったらしく、バスタオルを体に巻き付けただけの格好だった。濡れた髪と胸元の谷間がセクシーな感じだ。それよりなんか一段と若くなってる？気のせいかな…。

「なんて格好して待つてるんですか？」

「なんでって、真木君を待つてたからだよ。着替え持つてきてくれたんだろ？」

「あつ、そうだ！車に忘れてきた！今取ってきますね。」

「おう。早くな。」

「はい。」

そう言ってマッキーは車に取りに行つてしまい、俺は先生と残されてしまった。

「由宇。寒いから中に入ってくれる？」

「はい。」

3月末の昼間とはいえ、風があつてまだ肌寒い時期であつた。中は意外と綺麗にされていて、シンプルな感じにまとまっている。彼女でもいて掃除してもらつてるのかな…？

「男モノの服しなくてな。今日色々買い揃えたいんだ。」

「ですよ。」

「由宇悪いけど、今日は荷物持ち頼むな。」

「はい…。」

そうゆうこと…、今日は荷物持ちか…。

「お母さんは元気か？」

「はい。ピンピンしてます。」

「そうか。」

あれっ？そのあとはふつつ『お父さんは？』じゃないのか？ま、いいか…。

そんな中マツキーが『失礼しまーす。真木上がりまーす。』と言ってドアを開けて入ってきた。

「先生、バストは何カップですかね？とりあえず私のしかないの、私より小さいと助かるのですが…。」

「サイズなんて分からないよ。とりあえず乳首が服に擦れなければそれでいいから。」

「はい。あと服もウエストサイズ分からないので、スカートは止めてワンピースにしました。これはそのうち慣れますから、我慢して下さい。」

「まあ、この容姿に違和感のない服装なら問題ないよ。」

そう言うとおもむろにバスタオルを取り俺の前に、惜し気もなく裸を見せたのだ。

「…。」

スタイルがいい。ウエストがくびれてて、胸も形がいい…。

「まずはパンツから…、」

「マッキー、俺車行つて待つてるから鍵貸して。」

「えっ、あー、うん…、ほらっ。」

鍵を受け取りそそくさと部屋をあとにした。

なんで恥ずかしいのだろう。女の裸なんて十分過ぎるほど免疫があるはずなのに…。

## 034 慣れ

買い物は下着からアウターまでなんでも揃ってて、低価格ってことで、某カジユアルショップに行くこととなった。

二人は先に服を選ぶことなく、バスとウエストを更衣室で計ることにしてみた。先生の家にメジャーがあれば計ってきたのだろうが、男の一人暮らしにメジャーなんかあるわけないのだ。

マッキーは前日の三崎との買い物の際、店員さんに計ってもらったそうなのだが、他の人のを計る方は初めてなので不安と言っていた。この店は下着専門店じゃないので、計ってくれる人はいないのだ。

「由宇！」

「何？っていうか大きい声で呼ぶなよ。」

「ちょっと来て！」

なんだよ。と、思いつつ呼ばれた理由は何となく分かっていた。

「何？」

「やっぱり由宇も計ってよ。私もさっき計ったんだけど、一人だと不安っていうか……。」

「はいはい。やればいいんでしょ！」

「頼んだ。はい、メジャー。」

「はい。先生入ります。」

「悪いな。」

カーテンを開け中へ入ると、先生はバストを押さえて待っていた。一応は恥ずかしいのだろうか…。？下はショーツだけ、布一枚だけの姿だ。まったく、なんで俺はドキドキするんだよ…、

「はい。じゃー、計りますので後ろ向いて手を上げて下さい。」

先生は素直なもんだ。鏡越しに綺麗な胸が見える。トップから計り、次にアンダーを計るので胸を持ち上げてもらった。これにも素直に従ってくれる。

「はい、OK。服着ていいですよ。」

「サンキュー。ついでに悪いけど、ブラのホックと、ワンピースのファスナー上げてってくれる？」

「はいはい…。」

なんとなく見慣れてきたのか、先生の素肌を見ても平気になった気がしてきた。でも俺の下半身は存在を誇張しようとしている。

「どうだった？」

「65のDでいいんじゃないかな？」

「ん…、それって私と一緒にじゃん！」

「へー。」

なんともリアクションしづらい。成長期にはそんな話を女同士でした覚えもあるが、今は何となく話に混ぜてほしくない感じた。

俺が持つ籠はいつしか一杯になっていった。下着を3セットにバシャツ2枚に…、インナーからアウター…、パンツにスカートに…と、色々買い込んでいったのだ。いくら低価格が売りの店だからといって、こんなに買ったらすすがに諭吉が3・4枚いなくなるだろう…。

ストレスを買物で解消するのしみたいだ。調子よく籠に放り込んでいった結果、俺の持つ両手の籠は既に溢れていた。

先生だって4月から講義あるんだから、その時は男に戻ってないといけないわけで…。せいぜいあと10日間くらいだろうに…、ホントにこんなに必要か…？

買物が終わリアパートへ帰ると、ちょっとしたファッションショーが始まった。買物も長い時間付き合わされたが、このお着替えタイムも長かった。

なんだろ…、照れはあるが、先生の下着姿も見慣れて麻痺してきた感じだ。って、下着姿の前に裸を2回見たからか？ん…？いや、違う違う！本来俺は女なんだからこれで問題ないのだ。

「君達夕飯はどうする？どっか食べいくか？」

「いや、すみません私達行くところなので失礼します。」

「そうか…、残念だな…、買物の御礼に飯でもと思ったのだが…、」

「それだったら、明日のランチお願いします。」



「分かった。」

「先生明日は何時くらいに出てきます？」

「10時だな。」

「わかりました。私達もそのくらいに出ていきます。」

それで先生のアパートをあとにした。

「夕飯くらいご馳走になればよかったに。」

「いや、先生は夕飯の時必ず飲むんだけど、飲み始めたら長いんだよ。」

「そうなんだ…。でもマツキーみたいに、お酒弱くなって飲めなくなってるかもよ。」

「みんながみんなそうとは限らないだろ？」

「そうだけど…。」

「だろ？ そうだ、どうする？ ご飯食べてから行く？ 軽食くらいなら向こうにもあるけど。」

「向こう？ さっきも聞こうと思ったんだけど、どこか行く予定だったっけ？」

「え？ 覚えてないの？」

「えつと…、」

「愛ちゃんのところだよ。」

あつ！そうだった。すっかり忘れてたしまっていた。和也の電話で起こされて、水族館行って山田先輩って人に会って、先生の買物に付き合って、なんちゃってファッションショーに付き合わされて、濃い一日だったから忘れてたしまっていた。そして一日のシメが愛ちゃんの店に行く予定だったのだ。

## 035 危険人物？

夕食を食べたあと愛ちゃんの店へ行っただが、想像してたのは全然違い、意外とこじんまりした店だったことに驚いた。二ユーハーフの数も予想より下回っていたのだ。

「いらっしやいませ。」

「どうも。」

「あゝ、マッキーに由宇ちゃんじゃない。来てくれたの。」

やっぱり愛ちゃんは苦手だ…。しかもこの手の店に来るのは初めてだが、他のスタッフからも見られてる気がする…。

「カウンターにする？テーブルがいい？」

「カウンターでいいよ。今日はスタッフこれだけ？」

「今日は私入れて3人。」

「あれっ？いつもの子は？」

「ん？ああ、莉奈なら辞めたわよ。あと連絡ないけど那緒も、もう来ないと思う。」

「なんで？」

「莉奈に引き抜かれたのかな。」

「結局、自分の店出したの？」

「みたいよ。招待状来てたけど顔出さなかった。」

「そう…。」

そんな会話をしながらマツキーはカウンターの真ん中に座った。カウンターと言っても5席しかなく、テーブル席は4人掛けが3つの店内だった。

そのマツキーの右隣へ腰掛ける。

「何にする？」

「ウーロン茶ちよーだい。」

「あら、珍しい。由宇は？何飲む？」

「えーと、生ビールってあるの？」

「あるよ〜。」

そう言っ手際よく準備している。

「いらっしゃいませ。」

右後ろからそう声がした。その声は女性そのものだ。

「ママ。氷お願いします。」

「はい。ちょっと待って。」

「あら、いい男。ママの知り合い？」

「はあ…。」

しかも丸ノ内OLのような綺麗なボディラインだ。スレンダー？  
セクシー？元男には見えない。

「新人さん？」

横からマツキーが声をかけた。

「はい。美月っていいです。お二人はモデルさんかなにかですか？」

「いえ、一般人です。」

「あら、勿体ない。」

「ははは…。」

そうこうしてるうちに飲み物が出てくる。更にテーブルのお客さん用の氷も出てきた。愛ちゃんは手際がいい。

「私も何かもらっていいかな？」

「もちろん。」

「ありがとうございます。」

こういったところのシステムはよく分からないが、お客さんに断って飲み物を用意するらしい。それが売上につながるらしいのだ…、要はお客の支払いに乗っかるという事だ。

それからはカウンターの内の愛ちゃんと、くだらない話しをして時間を過ごした。

ウチらの他にはテーブル席に1組のお客がいて、2人のお客に対して、キャストも2人。氷を取りに来た美月って子じゃない方の子は、俺と背中合わせの状態で見えないが華奢で綺麗系のようだ。

「二人共前からいない子だね。」

「うーん。美月は知り合いのママに頼んでこの間から来てもらう事になったの。もう一人はマッキーも知ってる子よ。」

「見た事あったかな？」

「この間までカウンターでボーイやってた子よ。」

「おー、そうか。」

「呼ぶから待ってて。」

そう言つと『ごちそうさま。』と言ってカウンターから出ていった。

そして入れ代わりにその子がカウンターの中へ入ってきた。他の二人に比べ若い感じがする。

「はじめまして花音です。」

花音って子は俺の方を向いて話し始めた。俺が一応男だから先に

挨拶したのかな…？

「どうも。」

「何か飲み物頂いてよろしいかしら？」

「はあ…、どうぞ…。」

「お名前お伺いしてもよろしいですか？」

「田丸です。」

「田丸さん。」

そしてマツキーの方へ向きを変えた。

「真木です。」

「あら、ご夫婦ですか？」

「えっ？」

「だってマキって下のお名前ですよね。」

「いや…、」

確かにマキって名前の女性もいるだろうが、いくらなんでも夫婦って…。

それにこの二人、さっき愛ちゃんが面識あるような事、話してたような…。マツキーだって分かんないって事…？

「恋人です。」

ブーッ！俺は飲んでたビールを少し吹き出してしまった。

「マッ、マッキーは！いつから俺達そうなったの？」

「何、由宇は焦ってるの？」

「だって…。」

すると耳打ちするようにして『エッチしたし、同じ部屋住んでるんだから、他人からみたらどう見える？』と言ってきた。花音さんはテーブルを拭くおしぼりを用意してくれている。

「あらあら、仲良くして下さいね。」

俺にはれっきとした…、れっきとした…彼氏が…。

和也の事は好きだ。でも今は、なんとなく違う存在に変化している…。

「花音さんちょっと聞いていいですか？」

「はい。」

「工事は済んでいます？」

「あつ…、いえ…。」

マッキーが変な事を聞き出した。花音さんも恥ずかしそうに答え



てる。

「ありあり？」

「はい…。」

「予定は？」

「今度タマの方を…、」

「いつ？」

「ちょっとマッキー！」

「何？」

「そんな聞いたら失礼じゃん！」

「大丈夫ですよ。結構聞かれますし。」

「そうなの？」

「で、いつ？」

「一応来月中旬には…、」

「そうか…、ところでさ…今日アフターしない？」

「はあ？」

「ちょっとマッキー…?」

「なんだよ由宇。」

「まさか、次の時に呼ぶつもり?」

「そつだよ。由宇にしては勘がいいな。この子が望むならと思ってさ。だから少し聞いてみようと思って。」

「…。」

マッキーはおかしな方向に走り始めてる…。この子をモルモットのように見ているかのようだ。

「由宇は少し黙っててよ。」

「…。」

「二人共仲良くして下さい。それにアフター誘われるの初めてなんで嬉しいです。女性から誘われるのがちょっと悲しいですけど。」

「じゃ、アフター大丈夫?」

「もちろん。ママのお友達みたいだから安心だし、しかもカップルだから安全だし!」

「安心安全ね…。」

いや…、マッキーはある意味危険人物になりつつあるような気がする…。

## 036 立場

俺とマツキーは、店の近くにあるファミレスで花音さんを待った。

「すぐ薬出来るか分からないんでしょ？」

「でも悩んでる子がいるんだから、手を差し延べてやってもいいだろ！」

「神様にでもなつたつもり？」

「神様…？」

「良くないよ…。」

「でも、どうせあの子だってどんどん手術繰り返して、愛ちゃんみたいに体いじっちゃうんだよ。」

「そつだろっけど…。」

実際、あの手の店に入る大半の子は、何らかの手術をしているだろう。ただ始めから見た目を諦めてる子はやらない人もいるみたいだが…。

「だろ？人助けだよ。」

「でも…、だったらみんな助けるわけ？」

「みんな？」

「例えば…、店にいた美月さんとか…、」

「あの子は…、」

「何？」

「去勢済みの子はちょっと怖くて出来ない。」

「去勢？」

「タマ無しって意味だよ。美月って子はニューハーフ歴長そうだから、多分タマ抜きも終わってるし、女性ホルモンも長い事やってそうだし。」

「…。」

タマ抜き…、そっか…、マツキーみたくな男の体からなら、今みたくな女の体に変われたけど、生殖機能が欠けてたらどう変わるか分からないって事か…。

「その状態の子に使った時にどんな感じになるか分からないだろ？」

「異形になるって事？」

「だから分からない。」

「マウスで、そうゆうテストやってないの？」

首を振ってる。やってないみたいだ。

「どの道、少しの人数しか試せない…。」

試す？実験感覚…？やっぱり人助けというのは二の次か…？

「変化の過程を映像に残せればと思ってる。もちろん本人の撮影許可があっただけだね。」

そうゆう事が…、映像資料を得るのが目的…。

「うん…。」

「由宇はそうゆうの反対？」

「マツキーは…、」

間違ってる。そう言いかけて止めた。言ったところで、俺にマツキーの考えを変える力はなさそうだ。

製薬会社ではモニターを集めて、薬の効果のデータを集めたりしてると聞いた事がある。

でも今回の場合は、人体実験に限りなく近い…。しかも認可が下りてないのにだ…。その前に申請も出してないだろうけど…。

「由宇が先生に『元に戻るんですよね？』って質問した時の、先生の答えた言葉覚えてる？」

「えーと、データの話？」

「違うよ。先生は『おそらく戻れると思う。』って言ったんだ。」

「確かに『おそらく戻れる…』って…」

「先生も原理は分かっているんだろうけど、マウスは同じ薬じゃ元に戻らなかったんだよ。」

「えっ！？元に戻らない？」

「びっくりした？でもそうなんだよ。だから、今のままなら先生は大学を辞めさせられるかもしれない。」

「嘘でしょ？」

「本当だよ。性別が変わった先生を学長が受け入れてくれれば別だけど。」

「いや、そこじゃなくて、同じ薬じゃ戻らないって本当？」

「マウスの実験では戻らなかった…」

「そう…なん…だ…」

びっくりしたというより愕然という言葉の方がしっくりきそうだし。でも、始めの話じゃ『春休み中だけでも…』的な言い方だったのに…、だったら山田先輩に貰っても俺は戻れないって事…？いや、俺用にもらったわけではなかったって事になる…。

「授業の方は、しばらく準教授にしてみようとしても、その状態が長く続けば学校に居れなくなるだろうし。」

「…。」

「だからおそらく研究所を立ち上げると思うんだ。その時は必ず手伝って欲しい。」

「そう…、研究所…。」

「うん…。」

何かなんだか分からなくなってきた…。

「そつ、そつだ。聞いておきたいんだけど、マッキーって元に戻りたくないの？随分落ち着いてるけど、マウスではダメだったんだよね？」

「そうだな、薬が出来なきゃ戻れないね。」

「それって答えになってくれない？男に戻りたい？それとも今のまま女でいいの？」

「どっちでもいいよ。」

「へっ？」

「性別なんてどっちでもいいって言ったの。」

「マジ…？」

「昔『今度生まれ変わったら男がいい？女がいい？』って友達同士で質問しなかった？」

「した…かな…？」

「俺はその質問に『出産出来る男がいい。』って答えたよ。」

「えっ？」

「みんなそんなリアクションさ。でも出産は女だけの特権だろ？」

「…だね。」

「でも生理とか面倒だって言うじゃん！生理痛だってあるし。それさえなければ女でもいいけど…。」

「そうだね…。っていうかそのうちマツキーにも生理くるんじゃない？」

「ゲッ！？そうかな…？」

「うん…、こっちは射精出来たんだから、普通に考えたら可能性高いよね？」

「そっ、そうか…、きたら色々アドバイス頼むね。」

「うっ…、うん。」

「まあ、話戻すと、いずれは男に戻りたい。そのためには研究の手伝いしなきゃだろ？」

「まあ…。」



「将来的には性同一性障害の奴らだって助けられるだろ？」

「うん…、だろうね…。」

『助けられる…、』やはりマツキーは、自殺した友達の事が心の中で引っ掛かってるのだろうか？

「由宇は早く戻りたいんだろ？」

「そうだよ。」

「じゃあ、積極的にお手伝いするんだな！」

「やっぱり、そうなるの…？」

早く元に戻りたい俺は、少しでも早く“戻る薬”が出来るように、データを取るサンプルとしても協力しながら、手伝うしかないみたいだ…。

037 即答

「どうかな花音さん？協力してもらえない？」

「はい。こちらこそよろしく願いします。」

「本当にやってくれるの？」

「その話が本当ならやりたいです。でも、本当に二人共その薬で性別変わったんですか？俄かには信じられないんですけど！」

「本当だつて！」

「証拠見せてもらえませんか？」

「嘘じゃないって！っていうか、私は男の時あなたに会ってるし。」

「えっ？」

「分からない？」

「はい…。」

「ママの友達でマツキーって覚えてない？」

「マツキーさんなら知ってます。店にもよく来てらっして、確かホストをやつてて…」

花音さんの動きが止まり、マツキーを凝視し始めた。

「えーっ！？もしかして、マッキーさんですか？」

「やっと分かった？」

「いや…、どつから見ても女性の顔立ちですよ…、顔は、顔はいいじつたんですか？」

「顔も葉のお陰でこの通りさ。」

「そつ、そうなんですか…。胸とかもちゃんとあれです？」

「『あれ』？まあ、普通にあるよ。アソコも綺麗な感じだし、なんなら見せてもいいし触らせてもあげるよ。」

「はあ…、」

「今からウチ来ない？」

「えっ…、」

「いいだろ由宇？つていうか由宇からも言っつてやってよ。」

「つていうか俺はただの居候で、あそこはマッキーのマンションだし…。」

「それでも…、」

「今日は遠慮しておきます。」

花音さんがマツキーの言葉を遮って断ってきた。

「えっ！？あつ、そう…、それだったら、今度愛ちゃんと一緒に来なよ。」

「ママとですか…？」

「それなら安心だろ？」

「まあ…。じゃあ、ママはこの事…、」

「知ってる。この事を知ってる、数少ないウチの一人だね。」

「そうなんだ…。」

「よし、お寿司でも食べ行こうか？」

「えっ？今から？」

「何だよ由宇？」

「こんな時間に食べたら太るよ。」

「花音さんの初アフターが、ファミレスで終わったら可哀相だろ？」

「いえ、大丈夫です。それは殿方に単独で誘われた時にとっておきますから。それに私も太りたくないですし。」

「そう…？」

「はい。」

「そっか…。そうだ！ちなみに聞きたいんだけど、美月さんは付いてるの？有り有り？」

「お姉さんは有り無しです。」

「そっか…。」

どうやらマッキーの予想通りタマ抜きは終わってるらしい…。

「美月さんもさっきの薬の話、誘ってみましようか？」

「いや、今のところ訳があつて、有り有りの人だけしか出来ないんだよ。」

「そうなんですか…。」

「愛ちゃんには明日の午前中に電話で話しておくから、気が向いたらウチに遊びに来なよ。」

「はい。」

「あと他の人には絶対に内緒ね。」

「…分かりました。」

「彼氏とかにも内緒だからね。」

「そんな人いません。」

「そっか…。まあ、なんにせよ前向きに考えてよ。」

「そうします。っていうかやります。」

「本当に?」

「だって、タダですよ?」

「勿論。」

「痛くないですよ?」

「うんうん。」

「副作用もないんですよ?」

「うっ、うん。」

「あるんですか?」

「実は…、」

「何ですか? 気になります! 言っして下さい!」

「副作用って訳じゃないんだけど、性同一性障害の子に限っては、もしかしたらあるかもしれない…。」

「そっなんだ…。それは教えてもらう事出来ないんですか?」

「うーん…、確かかどうかまだ分からないけど、変化後も性同一性障害の可能性があるんだよ。」

「って事は…?」

「花音さんが女に変わったら、今度は逆に女の人を好きになってるかもしれないって事。」

「そっ、そうですか…。」

「まだ1人中1人ですけどね。それも今はどんな感じになってるか、よく分かってないですし…。」

「えっと…。」

「そいつだけかもしれないし、全員そうなるかもしれないってやつです。今の体に馴染んでるといいですけど…。」

「えっと、するともし仮に体が女になったとしても、女性が好きになって、そのあとその事で悩むのは変わりないって事ですか?」

「可能性としては有り得るんだよ…。」

「うーん。それは悩めますね…。」

「そうだよな。」

「その人に会わせて頂く事は可能ですか?」

「あー、はい。勿論ですよ。今度店に連れて行きますよ。それか今

週どこかで大学の研究室に顔出して頂けると有り難いけど…。」

「あゝ、だったら行きます。大学のキャンパスって、一度入って見たかったんですよ。」

「本当ですか？」

「はい。」

「でしたら明日の午前中はどうですか？10時とか？」

「分かりました。」

それから花音さんとの待ち合わせ場所を決めて、今日はお開きとなった。



038 お見通し

「明日は葵も三崎も時間には来るんでしょ？」

「あつ！」

「何？」

「三崎に言つの忘れてた…。」

「なっ！？葵には言ったのに三崎は言っていないの？」

「葵にだって言っていないよ。あいつはマウスの餌やりとか、薬を投与した奴らの経過確認っていうか、データ取りがあるから、毎日午前中は来てるはず。」

「そうゆう事が…、じゃあ、もう遅いから三崎にはメールしとけば？」

「そうだね。そうするよ。」

でも時刻は深夜2時になろうとしていた。そしてなぜか普通にマツキーのベッドに2人で寝ている。別々に寝たのは初めてここに来ただけ…。

「マツキー。」

「ん？エッチなら今日はしないよ。」

「なっ！？そうじゃなくてさ…」

「何？明日じゃダメなの？」

マツキーは既に眠れる状態らしい…。っというか眠いらしい。

「ん…、なんか凄い不安になってきたんだよね…」

「うん…」

「この体に馴染んでるってゆつか、女だったのかすら疑問に思えるくらいだし…」

「…。」

「でも地元に残してきた彼氏の事も忘れてないのも事実だし…」

「…。」

「マツキー聞してる？」

「…。」

天井に向けてた視線をマツキーの方に向けると、既に眠りに落ちているマツキーがいた…

「つたく…、話くらい聞いてくれよ…」

結局マツキーは三崎にメールせずに寝てしまった。俺の携帯電話には三崎のアドレスは入っていないから、連絡は明日にするしかない

さそうだ。

何やら体が揺れている。というか揺すられている。そして誰かが何かを言っている…、

「由宇起きて！起きないと先に学校行っちゃうよ！」

「ん…。」

そして無理矢理上半身起こされたかと思うと、唇に柔らかい感触と共にチュツと音がした。それでやっと目が開いたのだ。マツキ  
ー？

「おはよう。シャワー浴びるなら早くしてね。」

なっ、なんなんだ？この新婚生活が始まったばかりのようなマツキーのこの態度は…？おはようのキスが好きなのか…？和也にそんなのされた事ない…。

「お…は…よ…、」

「早く準備しないと置いてくぞ！」

「えっ…、あっ、はい。」

そして言われるままにシャワーを浴び、準備されてあつた服をそのまま着た。マツキーのセンスは別に悪くないと思う。

俺が着替えて髪を乾かしてる間、マツキーは軽く化粧なんかして

いる。どこで覚えてきたのだろう…？

「三崎にメールした？」

「うん。って言うか電話だけだね。」

「そう。」

「来れないってさ。」

「なんで？」

「なんかこの間私と買い物して別れた時に、彼女もナンパされたみたいで、その彼とデートするみたいよ。」

「はあ？」

マツキーは三崎の事を『彼女』と言った。すでにマツキーの中では、三崎を女性として認識してるという事だろう。

「何？心配？それともヤキモチとか？」

「そんなわけないだろ！っていうか大丈夫なのか？」

「やっぱり心配なんだ？」

「そつ、そりゃ…、」

マツキーみたく襲われてからじゃ遅いだろうし…。でも昼間だから平気か？いやいや…、俺はおととい朝から美穂に襲われてる例も

あるし…、

「三崎なら大丈夫だよ。由宇よりしっかりしてそうだし。」

「なっ！？それってどうゆう意味だよ？」

「昨日の朝帰ってきた時、ソファアの後ろに誰かが脱いだストッキングがあつたよ。」

「えっ…！？」

「ストッキングを脱ぐって事は、誰かと由宇がこの部屋でエッチな事を…、」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待って！」

「あー、私なら平気だよ。別にウチら付き合ってるわけじゃないし、美穂と由宇がどうなるって…、」

「えっ？なんで美穂って分かったの？」

「やっぱり美穂か？」

「げっ！？」

「ヤバイ…。ヤバイよ…、言っちゃったよ。」

「別に気にしないでいいって！それにココにタダでいるの美穂に後ろめたかったし、美穂をどう納得させようか迷ってたんだよね。正直言つと、由宇をホストにさせて、美穂を手なずけて貰おうと思っ

てたんだよ。」

「なっ？」

「手なずけては言い過ぎか？まっ、二人はすでにイイ仲みたいだし、手間が省けた。これからも仲良くしてあげてよ！」

「はぁ…、」

お咎めなし…。っていうか美穂と仲良くって…、むしろ罰が付加されてるような気さえする…。

「さっ、先生も来てるだろうし学校行くよ。」

「うつ、うん…。」

美穂との事バレてたのに一日何も言わないなんて…、いや、それより三崎は本当に大丈夫かな…？すんげえ心配だ…。

そして俺達は花音さんとの待ち合わせ場所へと向かったのだ。

## 039 待ち合わせ

駅で花音さんを待つてると、そこになぜか愛ちゃんが現れた。

「あらっ？由宇こんなとこで何してるの？」

「あっ、愛ちゃん！」

あれっ、愛ちゃんもこの駅周辺に住んでたんだ…？

「一人？」

「いや、マッキーと一緒に。」

「何、マッキートイレでも行ってるの？」

「いや、駅前って車止められないから、ちょっと離れたとこで待機中。」

「車？」

「そう。愛ちゃんの愛車ね。」

「そう。で？由宇はこんなとこで何してるの？誰か待つてるとか？」

「えっ！？あー、そうなんだよ…、そうだ！調度いいや！すぐそこにマッキーが車で待機してるから会って話していつてよ。」

「話？」

「うん…。」

なんか複雑だ…。愛ちゃんがあの薬を使える可能性は、今のところまだない。生殖機能を排除してしまつてるからだ…。それを私達は花音さんに試そうとして…。そしてそれがまた成功すれば花音さんも女になるのだ…。それも子供を産める可能性がある女性にだ…。愛ちゃんとすれば複雑だろう…。

マツキーの待機してる場所を教えると、愛ちゃんはそっちの方へと歩きだした。外見的には完璧に女に見えるのに…。後ろから見た体のラインだつて完璧だ。

「田丸さん！」

「わぁ！」

愛ちゃんの後ろ姿を眺めていたら、いきなり肩を叩かれ名前を呼ばれたのでビックリしてしまった。

「すつ、すみません。」

振り返ると花音さんがそこにいた。太陽の下で見る花音さんの女装姿はまだまだ未熟で、愛ちゃんとは比べものにならなかった。化粧のせいかな？昨日は可愛いらしく見えたのに…。

「おはよう。じゃ、行こうか。」

「はい。」



車は近くにあつて、すぐ着いた。そしてその助手席には愛ちゃんが座っている。

「あれっ？ママ？」

「あゝそうなんだよ。さっきそこで偶然会つてね。いいタイミングだから話してもらおうと思つてね。」

「そうですか…。」

すると私達に気付いたのかパワーウィンドウが下がって、

「後ろ乗っちゃって！」

「うん。」

そうして4人は駅前をあとにしたのだ。

「愛ちゃんは何処に行くところだったの？」

「エステ。脱毛の方ね。」

「あゝあ、エステか。」

「ねえ花音？」

「はい。」

「いい人達に出会えてよかったわね。」

いい人…、何だか罪悪感が湧いてきた。マッキーが映像資料を残したくて花音さんに協力してもらおうとしてることを、愛ちゃんも花音さん本人もまだ知らないのだ。

「そうですね。でも、なんか色々考えちゃって昨日は眠れませんでした。」

「一睡も？」

俺の横で頷いてる。

「そっか…。」

「女になれると思うと…、でも昨日あんな話を聞いたから…。」

「あんな話？」

すかさず愛ちゃんが食いついてきた。

「性同一性障害の子は、変化後も性同一性障害の可能性があるんだよ。」

「それって…、」

「それで、私と由宇と同じタイミングで性転換しちゃった子の中に、一人だけそういった子がいるから、今日は花音さんに会って色々話してもらおうと思ってるんだ。」

「そっか…。」

なんだか車内が重い空気になった。

「でも私はやります。私と同じような子達の為にもイイ前例になるし…。」

「花音…、」

イイ前例か…、確かにそうならば最高なのだが…。

「マツキー！」

「ん？」

「花音をよろしくね。」

「分かってるって！」

「本当に頼むからね。」

「うん。」

そして愛ちゃんを一駅先のエステの前で降ろし、私達は大学へと向かったのだ。

「あ…。」

「ん？」

「私のこと『さん』付けで呼ぶの止めてもらっていいですか？」

「あつ、嫌だった?」

「いえ…、年下なんで呼び捨てでかまいませんから。」

「分かった。花音って呼べばいいのね。」

確かに『花音さん』より『花音ちゃん』と呼んだ方がしっくりきそうだ。

「はい、お願いします。ところでこれから会う人ってどんな人ですか?」

「会ってみれば分かるよ。いい子だよ。」

「ふん。」

「そういえば、ここ何日か葵に会ってないね?」

「そういえば、そうだね…。」

最後に会ったのは沖縄行く前だ。この期間葵はどうしていたのだろ…?」

時刻は10時を5分過ぎたところだ。予定外だった愛ちゃんと会ったことで、到着予定の時間より10分位遅れてしまったのだ。

「おはようございます。」

「おつ、おはよう。」

「先生、葵来てます?」

「来てるよ。ていうか、変わり過ぎてて驚いたよ。誰だか分からなかった。」

「でも面影は残ってるでしょ?」

「そうだな。でもあの顔は驚いたよ。」

あの顔?

「怪我でもしてるんですか?」

「会えば分かるよ。」

「はあ...。」

そこに当の本人が入ってきた。

「なっ...。」

「おー！久々！」

「おー！っていうか、ヒゲくらい剃れよ。熊みたいだぞ。」

「熊？それは言い過ぎだろ？」

「ハハハ…。」

いや…、決してそれは言い過ぎって事はない…、と俺は思っ

「えっと、後ろの…、彼女は誰さん？」

「あ！そっだ、こちらは花音。」

「はじめまして花音です。」

「こっちがウチの教授で、」

「氷室です。」

「で、こっちのヒゲ面なのが、葵。」

「どうも葵です。」

「どうも。」

「えっと花音説明しちゃっていいかな？」

「はい。」

「由宇悪いけどコーヒー人数分頼むよ。」

「オッケー。」

つて、ここに来るのまだ3回目なんだよな…。コーヒーは何処かな…？

それから教授を交え色々話し合った…。葵の今の心境は、自分でもよく解らないそうだ。マツキーの事は綺麗だと素直に思うし、俺の事はカッコイイと素直に思えるらしい…。だけど、男と女どっちが好きかと問われると、なんとも複雑のようだ。

それから花音があゝの薬を投与して欲しい事を話した。話の流れからして先生も葵も、花音が薬を希望することは気付いていたみたいだ。花音が部屋に入ってきた時から、二人共そう思ってたかもしれない。

もし成功しても今の段階では戻る薬は作れてないこと…、それを花音に向かって説明しているのだが、どうやらそれは俺に言ってるようだ…。それを先生の口から今日ハッキリ聞かされた…。

それについては俺の方がかなりショックを受けた。いや、ショックを受けたのは俺だけなのだろう…。『由宇悪い。沖縄で会った時にちゃんと話せば良かったんだけど、お前の事を思うと言い出せなくて…。』との事だ。

一分の望みを断たれた気がした…。マツキーから事前に聞いていたが、先生の口から言われるとショックだった。

マツキーが和也との別れを勧めていたのが何となく分かったような気がする…。俺はしばらく男のままらしい…。和也の事を諦めるのか…？

俺のショックを他所に話しは変化の状態を録画させてほしいとの事を、花音に相談していたみたいだが、俺は考え事をしてて、会話

が一切入ってこなかった。

和也との別れ…、2年間の2人の歴史…、振り返ってみるとケンカもしたけど、楽しいことの方が多かった気がする…。和也が今の俺を受け入れるとは到底思えないし、俺だって…、和也に抱かれるなんて想像出来ない…。いや、想像出来るけどあんまり考えたくない…。

「由宇…。」

「泣いてるの…?」

「えっ…?」

いつしか俺の頬に涙が流れてたようだ。

「大丈夫か?」

「…。」

「由宇ちょっと着いて来い。」

「…?」

先生が席を立ち、俺を着いてくるように言うのだ。先生は隣のマウスとかいる部屋に入っていく。

「由宇!」

「あっ、うん…。」



マツキーに促されるまで立てないでいた。  
部屋に入ると先生は椅子に座るよう勧めてる。

「期待させてちゃって悪かった。」

「いえ…。」

「ハッキリ言うとな私もこの先、何年かかるか分からないんだ…。」

「…。」

「研究において、発見とは偶然によるものが時としてあるんだよ…。最近それを思い知らされたばかりなんだ。」

性転換の薬の配合が、偶然出来たモノだともいうのか？でも“失敗作が大発明ということがある。”と聞いたことがある。そのことが言いたいのか？

「由宇…。」

「はい。」

「今後…、私のサポートをお願いしたいんだ。そうすれば、いつか戻る時が来るだろう…。」

「考えときます…。」

と言っても、選択の余地は今後の俺にはなさそうだ。

「悪かった…。」

「でも、大学には残れないんでしょう？」

「うーん。それなんだけどな…、なんとか学長を騙せないかと思ってるんだ…。」

「騙す？」

「いや、だから…、私の…、氷室教授の知り合いを装ってだな…、  
“私のいない間の講義の代理に彼女を推薦します。” みたいな推薦状を書くってのはどうか？つまりは今の姿の私なんだけど…。それなら私はここにしばらく残れるだろうし。」

「そんな！バレたらどうするんですか？」

「そこでなんだが…、」

「はい…、」

「由宇のお姉ちゃんはまだ向こうか？」

「えっ？お姉ちゃん？」

俺には年の離れた姉がいるのだが、イギリスに留学中に知り合った彼と5年前に国際結婚して、そのまま向こうに住んでいるのだ。おそらく向こうで骨を埋めるつもりだろう。

「まだ、っていつか一生あっちだと思いますけど？」

「お姉ちゃんに成り済ますなんて出来ないかな？」

「えっ？」

「確か向こうの大学出てるよね？オックスフォードだったか、ケンブリッジだったか…？」

「なんて名前の大学か忘れちゃいましたど、姉の学歴なら申し分ないんですか？」

「おそらく。学長なら調べるだろうからね。学長は何処の馬の骨か分からない奴は使わないだろうし、ブランドに弱いから。」

「はあ…。」

「なんだか変な展開になってきたな…。先生が女のまま講義するのか…？しかも俺のお姉ちゃんなりすまして？それでいいのか？」

花音への薬については山田先輩次第という事で落ち着いたようだ。それ以外にも、熱帯魚を扱うペットショップを各自廻って捜す事にして解散することとなった。

しかし俺は、先生に呼び止められ買い物に付き合わされる羽目に…。学長に会う時のためのスーツが欲しいとのことだ。

確かに昨日買った洋服はカジュアルなものしかなく、学長の前に出るにはラフ過ぎる感じだった。とにかく学長の許可をとらなければ、研究室さえ使えなくなる可能性もあるのだ。少しでも印象が良いに越した事はない。

でも何故俺なんだ？マツキーとなら車だつてあるだろうに…。？一緒でもかまわないのでは…？

そうこうしてるうちにマツキー達が帰ってしまった。花音と葵と3人でご飯を食べに行くそうだ。俺と先生も誘ってもよくないか？

「うちらもどつか食べ行きせん？」

「そうだね。何食べたい？」

「ご馳走してくれるんですか？」

「由宇がお金ないのは真木君から聞いてるよ。」

「ハハハ…。」

「姪っ子…、じゃなかった。今は甥っ子だな。甥っ子払わせる気なんてないから、食べたいもの言っていーよ！」

「だったら…、東京ならではの食べ物がいいな。」

はて…？そういえば東京ならではって何があるんだろう？深川飯とかもんじゃ焼きとかか？でも、せっかくおごってもらつなら高いのがいいな…。

「だったら、今日は私の食べたいものでいいかな？」

「はい。」

で…、ちょっと期待と不安な気持ちの中、連れて来られたのは天ぷら屋さん…？

「ここはなんでも美味いんだよ。私はかき揚げが好きなんだが、由宇はどうする？東京っぽいって言えば穴子天なんて東京っぽいけど。」

どうしよう…？天ぷら屋なんてチェーン店しか入ったことないから緊張するな…。でもどうせ叔父…、今は叔母さんだな…、叔母さんなら遠慮なく高そうなものを…、

「えーと、穴子海老天丼頼んでもいいですか？」

「好きなもの頼みなさい。」

先生が頼んだのは天ぷら定食だった。

「由宇悪かったな。」

「もういいですって。それに俺がこうなった直接の原因は、三崎の不注意なんですから…。」

「でも、謝りたいんだ…。」

「研究も…、研究も手伝いますから安心して下さい。」

「助かるよ…。」

しばらくして目の前にオーダーしたものが運ばれてきた。

「さっ、冷めないうちに食べようか。」

「はい。」

そして食べながら話していく…、

「そういえば、なんで今日はマッキー達誘わなかったの？」

「いや、由宇がトイレ行った時に誘ったんだが、葵と用事が出来たとかで、ご飯食べたあと花音さんを送って、どっか行くそうだよ。」

「どっか…?」

マッキーはたまに謎の行動に出るんだよね…。俺にも少しは話してくれればいいのに…。この間だって三崎と二人で買物行っちゃうし…。

しかし、なんでマッキーの行動が気になるんだろう…?

「ところで由宇。」

「はい。」

「お姉ちゃんの学歴とか詳しく分かるかな？」

「だったらメールして聞いておきます。高校までは俺と同じはずだし。」

「助かる。」

「いえ。」

「それで…、まあ、これは聞きにくいが、彼氏はどうするつもり？」

「か…れ…、」

明日…、いや、せめて1ヶ月後のゴールデンウィークまでに戻る保証があるなら、ゴマかしながら会わずになんとかする自信があった。

だがそれが無期限の状態となると話は別だ。いつ戻れるか分からないのに待たせるわけにはいかない。事情を話せば1・2年なら待ってくれるかもしれない。だけど現実…、

「多分…、別れると思います。今の状態の俺があの人を幸せには出来ませんので…、」

「そっか…、」

「直接会って、事情を話したらマズイですかね？」

「うつ、うつん…。」

案の定、あまり良い反応ではなかった。

「ですよ…。うまく別れる方法考えておきます。」

嘘について別れるのは辛い…。和也の事は、多分今でも好きだ…。最後に会ったのはこっちに出てくる前の日…。その時こんな風になるとは誰も予想出来なかっただろう。あーなんだか和也の事考えてたら、研究室の時みたく涙が出てきそうだ…。

俺はそれを打ち消すように天井を掻き込んだ。



## 042 逆ナン

先生はデパートの婦人服売場へと俺を連れ出した。

「もつと安い店ありますよ？何もデパートで買わなくてもいいんじゃないありません？」

「まあ、一着いいのを持っていればなんかの時に使えるだろ？」

「そうだけど…、それは先生が女の体に馴染んできた時に買った方がいいんじゃないですか？」

「その時はまた買えばいいよ。」

「だから今回は安い店で買った方が…」

「まあ、今回はここでいいから。」

「はあ…、」

「何かお探しでいらっしゃいますか？」

「ああ…、えつと…、あつ、姉がリクルートっぽいスーツを探してて…。」

俺はどうも店員に話しかけられるのは苦手だ。どうもそれは男になっても変わってないようだ。それで咄嗟に先生の事を“姉”と言ってしまった。

「それでしたらあちらの方にございます。」

さつきから、もの凄く馬鹿丁寧な口調だ。

でもこの店員さんのお陰でスムーズに買物が済んだ。買うにあたって、まずは先生のスリーサイズを計ってもらった。やっぱりサイズを計るのは、計り慣れた人にやってもらうに限る。

先生が計ったり試着してる間、外で待ってる俺は手持ちぶたさだっただ。

試着室に連れがいるとはいえ、婦人服売場に若い男がポツンと一人でいる状況だ。さつきから見られてる気がする…。変な目で見られてるんじゃないかと気になり、視線をなるべく下に向けていた。

「あの〜？」

ん？俺か？振り向くと20代後半の綺麗なお姉さんがこちらを見ていた。店員ではなくお客らしい…。

「俺ですか？」

「あつ、違う？しつ、失礼しました。私が好きな芸能人に似てたもので…。」

「いえ…、そうゆうの慣れてますので…。」

この間のスーパーで買物してた時と同じパターンか…？って、視線はその類いの視線か？

「あの〜、お一人じゃないですね？」

「はあ？」

「いえ、もし一人ならお茶でも何かと思ひまして？」

「あー、えつと…、姉が中で試着とかしてます…」

「今日はお付き添いでいらつしやったのですか？」

「まあ…」

「あー、このあとお暇じゃないですかね？」

「えつ？まつ、まあ…、予定は無いけど…」

「でしたら是非お茶でも如何かです？もちろんお姉さんに聞いて頂いてからでかまいませんから！」

「はあ…。これって宗教の勧誘とか、なんかの営業じゃないですよ？」

「違いますよ。」

困っていたその時、『失礼します。田丸様、中でお姉様がお呼びです。』と声をかけてきてくれたのだ。

「分かりました。すいません、失礼します。」

そう言つてそのお姉さんから離れようとしたら、

「すみません。」

「はい？」

「こっ、これ、」

そういいながらバッグから何か出そうと探している…、出てきたのは名刺入れのようだ。そして名刺を取り出し裏に何か書いている。

「これ、私の携帯電話の番号とアドレスですので、お暇でしたら電話でもメールでもして下さい。」

「はあ…。」

気のない返事をしながら受け取ってしまった。

「いつでも気軽に連絡して下さいね。」

それに会釈をしてその場を離れた。東京の女性って名刺を配るのが趣味なのか？ふとキャビンアテンダントの真下晴子を思い出した。あの子にも機内で名刺をもらったのだ。考えてみればあの時仕事中心だったはず…。

試着室に行くとグレーのスーツを着ていた。膝が丸見えのスカートの丈だった。

「ストッキングも買わないとダメだね。」

「それは面倒臭いな…。」

「結構ストッキングって暖かいよ…、じゃなくって、暖かいつて言うじゃん！」

さつきから二人の会話を怪訝そうに、この店員さんは聞いていたのだ。実はさつきもサイズを計る際、俺がいるのに先生が脱ぎ始めてしまい、『弟さんは外で待つようお願い出来ますか?』などと言われてしまったのだ。

「ストッキング履くのって面倒じゃない?」

「えーと、お客様は今まで履いたことなかったのですか?」

そう言われて、やっと先生も気が付いたようで、

「今まで縁がなかったんですよ。」

「そうですか。」

まあ、店員もそう答えるしかリアクションのしようがないよな…。

「由宇はさつきの紺色と、このグレーだったらどっちがいい?」

「断然こっちだね。」

「じゃ、これ下さい。」

「ありがとうございます。」

それであっさり買ってしまったのだ。意見があつたのだろうか? 先生が着替えるので、また外に出るとさつきの女性がまだいた。

「あゝ。」

「うわっ！？ なっ、なんですか？」

「お名前聞いてもいいですか？」

これって逆ナンだよね…？いくら綺麗系のお姉さんでも、ちょっと恐いな…。

「田丸です。すいませんが今日は連れがいるので…。」

「はい。では連絡お待ちしてますので。」

そう言つと立ち去ってしまった。逆ナンってすごいな…。って、あの人だけ特別なのか…？ 顔立ちが芸能人に似てるっていうのも困りもんだな…。

### 043 焦り…。

「もしもし…?」

「…。」

「もしも…、」

電話の相手は和也だった。かかってきた電話に受話ボタンを押したまではよかったが、何をどう言ったらいいか分からない…。それで一言も言わずに切ってしまったのだ。

切った電話はもう一度鳴った。今度は受話ボタンじゃなく切る方のボタンを押す。おそらく向こうには『現在お客様の都合により出ることが出来ません。…、』と無機質な機械の案内が流れてるはず…。

しかし、携帯電話は着信音を再度鳴らして存在をアピールしてる。俺は再度同じ行動を繰り返した。俺は和也に対して、どう対応したらよいのだろう…?

おそらく一番楽なのはメールで別れを告げる事…。

しかも一方的に…。

今の顔が、元の顔の面影がないなら会って『由宇の新しい彼氏です。』とか言つて、最悪一発殴られてもいいかと思うけど…、顔でバレル可能性もある。

それに和也に会って『由宇を諦めて下さい。』とか言ったら、俺が泣いてしまいかもしれない…。

やっぱりメールか？

また着信音がなるがディスプレイに表示された名前は、

真下晴子。

「もしもし？」

「ご無沙汰。」

「『ご無沙汰。』じゃないわよ！連絡くれるかと思って期待して待ってたのに、全然音沙汰ないじゃん！まさかまだ沖縄にいるわけじゃないでしょ？」

「あー、ちょっと忙しくてね。」

「そう…。あれっ！？何か元気無いね？沖縄行って旅行疲れしたとか？」

「いや…、疲れとかじゃないよ。」

「そう…、疲れてないんだったら夕方から会わない？もう東京にいるんでしょ？」

「あー…、」

そうだ、和也のことを忘れるためにも気分転換に、遊ぶのもいいかも。



「何処連れて行ってくれるの？」

「会ってくれる？」

なんだか妙にハイテンションだな…？

「ああ。」

「場所は会うまでに決めとく！すぐに出れる？」

「外出中なんだ。だから直接向かうから大丈夫だよ。何処に何時に行けばいい？あつ、田舎者だから判り易いところにしてよ！」

「だったら八チ公前にする？それなら知ってるでしょ？」

「そうだね…。」

一抹の不安はあった。あんなところ行ったら、逆ナン天国じゃないのか？でも時間も遅いし暗くなるだろうから平気かな…。それに知ってる場所なんて少ない。唯一待ち合わせで行けそうな場所のような気さえする。俺は東京に出て来てまだ日が浅いのだ。

そして渋谷で夕方6時に待ち合わせすることになった。

先生とは靴屋さんで買物をしたあと別れた。洋服を買ったあと靴屋にも寄って、パンプスとスニーカーを買っている。買物することでストレスを解消するO.Lさんみたいだ。昨日今日でいくら使ったのだろう？

待ち合わせの時間に遅れたのは俺の方だ。というよりはわざと遅

れて行った。正直真下さんをこんな人ゴミの中から見つけるのは大変そうに思えたからだ。顔を忘れたわけではないが、向こうが探してくれた方が早いに決まってる。一応『10分くらい遅れる。』とメールだけはしておいた。

予想を超える数の人…。酸欠になりそうだな…。駅から出て八チ公の方に向かうと、あっさり俺を見つけてくれた真下さんが小さく手を振ってくれた。

「久しぶり…、」

「久しぶり。」

「なんか顔やつれてる？それより顔変わった？」

「えっ？」

「なんかあった？失恋したとか？」

「してねえし！顔が変わるわけないじゃん！」

やつれてる？気付かなかった…。それにしても『失恋したとか？』って、今の俺には嫌な響きの言葉だ。

「そうかな…？この間会った時より似てる気がするけど…、そんなわけないか？」

「行く場所決めたの？」

「ん、着いてからのお楽しみ！」

「ふうん。」

そう言っただけ腕に絡んできた。

「ちょっと真下さん！」

「何？」

「何って…。」

「いーじゃん！腕組むくらい。それより『真下さん』は止めてくれない？」

「あ…、だったらなんて呼んだらいい？」

「名前で呼んでよ！下の名前は晴子だよ。ちゃんと覚えてくれてた？」

「もちろん覚えてたよ。」

でも本当はさっきの着信の時にディスプレイに表示されたからで、真下さんの名前など気にもとめてなかった…。

「本当に…？まあ、いいや、着いたばかりで悪いけどまた電車で移動ね。」

「だったらなんで待ち合わせここにしたの？」

「それは由宇君が田舎者だから！」

そう言つて彼女は笑っている。確かにさつきは自分でそう言つたが、あれは自虐的に言うからいいのであつて、他人に言われると少し力チンとくるものだ。でも確かにここくらいしか分からないから仕方ないのだが…。

電車は乗り継いで芝公園に着いた。東京に来てから一番東京湾に近付いたような気がする。羽田空港も埋め立て地だから元は東京湾なのだろうが、海つて感じは一切しないのだ。

「どうする？お台場に行く？それともそのホテルで食事する？そろそろ夜景見えて綺麗な時間だよ？」

「お台場だとまた移動でしょ？」

「そうね。」

「ここで降りたつてことは食事したいんじゃないの？」

「うゝん、そうかな。」

「だったら、そうしようよ。」

「うん。」

お台場に行きたかつたら直接電車で行つてはまず、何もこんなところで降りる必要はないのだ。

そしてよく来ているのかエレベーターで25階に上がり、その中の鉄板焼きレストランと書かれているステーキ屋に入っていく。

「晴子さん。」

「『さん。』は付けなくていいから！で、何？」

呼び捨て？まっ、本人がいいならいいか…。

「俺マジで金無いですよ！」

「そんな事心配しないでいいから！」

「だって高そうじゃないですか？」

「いいから、いいから。」

せめて割り勘にしようと思っていたが、せっかくなんでご馳走になることにした。席に案内され上着を店員に預けた真下さんの胸元は俺にアピールするかのような服だ。ただ残念なのは胸のサイズ…、

……残念？

いやいや、残念って俺は何を考えてんだ？それは男の発想だろ！  
？えっ？何だ？うわっ？俺って男になってから何日だ？

「どうした？」

「○× …、なっ、なんでもないよ…。」

「さっ、頼も！」

「うっ、うん…。」

はつきり言ってくれてやばい事態じゃないのか？思考までも男  
になってきたのか？今後俺はどうなっちゃうんだ…？

## 044 晴子の将来

鉄板焼きの注文は晴子と同じのでいいからと任せた。松坂、神戸、米沢、オージーと値段もピンキリだが、やっぱりおごってもらう方としては値段を気にしてしまう。叔父である先生におごってもらうのとはわけが違う。

食事やワインの味は正直よく分からなかった。考え事をしていたのもあるだろう…。

「ねえ、由宇？」

「…。」

「由宇？」

「ん？あつ、何？」

「もう！私の話、全然聞いてないでしょ！」

「ん？あつ、ゴメン。なんだっけ？」

食事中はそんな感じだった。

店から見える夜景は晴子の言う通りとても綺麗で、田舎にいた頃に思い描いていたザ・東京が目の前に広がっているのだ。

「夜景本当に綺麗だね。」

「でしょ！あそこにビルが立つ前はもっとよかったんだから！」

「そう…。」

「ねえ、由宇…。」

「ん？」

「実はさっき、この上の部屋空いてるか確認してもらったんだ。」

「そう…。」

『さっき』とは、晴子が食事が終わリトイレに行った時の事だろ  
う…。

「でね。空いてるみたいなの…。」

ん…？んー！部屋？何だって？部屋…って、やっぱりあれ  
か？あれだよな？

「少し休んでいかない？」

「うっ…、うん。」

確か男には“据え膳食わぬは男の恥”っていう言葉があったよな  
…。誘ってる女性に恥かかせたらダメだよな…。

それ以前にキャビンアテンダントだけあってお洒落に気を使っ  
て、前に会った時より魅力的に見えるし！今日晴子が着てきた服  
って彼女にとって勝負服だったりして？

「乗り気じゃない？」



「とんでもない。是非ゆつくり休んでいきましょ！」

「うん…。じゃ、行こっか！」

俺って節操ないな…。誰でもいいのか…。？マツキーに美穂、それに晴子…。いや、美穂の場合は不可抗力…。なんて言い訳か…。

なんだ俺…。

一つ言える事…、

それはセックスが好きということだ。いや…。絶対に嫌いじゃない。

横にいる晴子の寝顔は可愛いと素直に思える。

晴子に会ったのは…。沖縄に行った機内と、その夜のホテルのレストラン…。それと今日だ。

デートしたのは今日が初めて…。それなのにお互い裸になって同

じベッドの上で絡み合った。

指で晴子の髪をクルツと巻いて遊んでみる。ついでテグシの要領で指を通すとサラサラした髪で綺麗だった…。

「ねえ由宇…、」

「ん？ゴメン！起こしちゃったね。」

「寝ちゃってた…？」

「そうだね。」

「由宇ってすごいね…、女のツボ凄い知ってるみたい…。」

そりゃ…、元女だからある程度は知ってるつもりだし、マツキーのレクチャーもよかったってことになるのかな…？

「エッチ好きなの？」

「…？」

「いや…、深い意味はないけど…。」

「ちょっと待って！言っておきますけど私は誰とでも寝る女じゃないわよ！由宇が特別なだけ…、私の…、理想の男性っていうか…、」

「ゴメンね。逆に誰とでも寝ちゃう男みたいで…、付き合ってる子だって俺にはいるのに…。」

「そんなつもりで言ったんじゃないって…、…ねえ、」

「ん？」

「また私と会ってくれる？こんな私じゃ嫌かな？」

「俺…、金ないから、晴子の負担になっちゃうし…。」

「もう！それなら平気だって！あんまり言いたくないけど、これでも一応お嬢様なんだから！社会人になって親のすねかじってるみたいで嫌だけど、カードもある程度の額まで使っていいって言われているし…。」

「お嬢様なんだ…？」

「そう…、一人娘だから最近はうるさくって…。」

「うるさい？」

「お見合いしろってさ…、しかも政略的な感じるし…。」

「そっか…。でも若いママってのもいいじゃん！」

「だって…、持ってくる見合い写真見たらオジサンばっかなんだもん…。」

「オジサンか…、年上ダメなの？」

「別に…、由宇みたいに格好良ければ年上でもいいけど、写真見ただけでオジサン臭するのは嫌だよ。」

オジサン臭って…いくつになったら出るの？

「彼女と別れて私と付き合っただけでなんて言わないから、たまに会ってくれるだけでいいから…、ねっ！お願い！」

「分かったって…。」

「本当に？」

俺は頷いて見せた。そして彼女は嬉しそうな微笑みを見せていた。

「ねえ、もう一回呼んでくれない？」

「何を？」

「さっき私の事名前で呼んでくれたでしょ？」

「そうだった？」

それはそっちがそう呼べって言ったからでしょ！

「うん言った！だからもう一回呼んでよ。」

面倒臭っ！こつこつ言われると“女ってウザ”って男は思うんだな…、でも俺も今の晴子みたいに『私のこと好き？』的なこと聞いたことあったな…。

「なあ、」

「何？」

「晴子の親父って何してるの？」

ただ名前を呼ぶのが嫌で質問を試みた。

「詳しくは分からないけど社長みたい。建築業で一応従業員何十人も抱えてるみたいよ。」

「そっか…、そうさっき一人娘っていったよね？」

「うん…、そうだけど？」

「じゃ、晴子と結婚する人は会社継ぐんだ？」

「そうなるのかな…？何？由宇が私と結婚してくれるの？」

「俺まだハタチだよ？それにまだ学生だし！」

「私なら待つわよ？」

「さっきの『たまに会って』からかなり飛躍したね？」

「だね。」

そして二人は同時に笑いあった。

この4つ年上のお姉さんはあと何年後かには、誰かと結婚させられちゃうだろう。俺とは恋愛ゴッコというか、単なる思い出作りなんだろうな…、『あの時付き合ってた男はいい男だったな…』。『的な…。政略的な見合い結婚させられたんじゃない可哀相だとは思っ。思

うけど今の俺には何も出来ない…。

いや、彼女がたまに会って食事してエッチするので満足ならそれもありかもしれない…。彼女の方が年下の俺の事を“遊び”と割り切ってるなら、今の俺にとっても楽しく遊べそうな相手に思えてきたのだ。

## 045 訪問者

俺は静かに鍵を開け音のしないように中に入った。そして何事もなかったようにソファで寝た振りをしてマツキーの起きてくるのを待ったのだ。

しかしいくら待ってもマツキーは寝室から出てこない。いつもなら起きてきてもおかしくない時間なのに……？そうこうしてるうちに俺は本気で寝てしまった。

どのくらい寝てたのだろう……？俺は携帯電話の着信音で起こされた。

寝ぼけながらもディスプレイを見ると真木翼と表示されている。

昨日も和也から電話があって過剰反応してしまってる。和也からだっただけなら出ずらい……。だからディスプレイで誰からの着信か、確認してしまうのだ。

「おはよう！起きてた？」

「うん……寝てた……。」

なんでマツキーから電話？部屋にいなかったのか？

「また無断で外泊して悪かったね。私達は直接研究室行くから、由宇も来るなら来なよ。」

「なっ……。」

突っ込み所満載だ。何から聞くか……？それにしてもまた無断外泊

か…。

「私達って誰といるんだよ？」

「あつ、えーと…、葵と一緒にいる。」

「あー葵ね。」

ん？んっー？葵のどこ泊まったのか？昨日からずっと一緒だったって事か？頭の中で色々な事を想像しだした…、まさかあんなことやそんなことしてないよな…？

「どうする？由宇は来る？」

「あー、今日はパスしていいかな？」

寝不足だった。理由は明け方近くまで晴子と絡みあってたからに外ならない。

「分かった。無断外泊してゴメンね。今度はちゃんと連絡するからさ。」

いや、お互い様だから別にいいけど…。

「あー、そうだ。今日なんか予定あるの？」

「いや、特にないけど…？どうした？」

「そしたらさー、前に言ってたホストの件なんだけど、メールしておいたら昨日返信があって『面接しに寄越して！』だってさ。履歴



書要らないし生活するのにお金無いんだからするでしょ？」

「う…、うん。」

仕方ないよな…。生活のためだし…、と自分を納得させてみた。

「それでさー、葵もやるって言うから4時頃マンションに居てよ。迎えに行くから。」

「マジ？葵もやるって？」

「やる気みたいよ。」

「分かった。」

仲間がいるのは安心だ。

「そんじゃ夕方ね。」

やっぱり葵も履歴書の性別の欄でひっかかってるんだな…。っていうかマッキーも三崎もこのままだったら水商売しかないか？でもマッキーは貯金あるって言ってたし、三崎は実家暮らしだから当分は平気か？

それ考えたら先生はズルイな…。人の名前を名乗っちゃうなんて…、間違えば犯罪だよ。

それから俺は無人のベッドに移り二度寝することにした。

寝ていたのだが…、またも携帯電話の着信音で起こされた。

「うるさいな…、」

ディスプレイには葵ひかりの名前だ。時刻は12時ちよつと前。2時間位は寝たらしい。

「大変だよ!」

「ふぁーっ!まだ眠いんだけど?何が大変なの?」

「小松君!」

「はぁ?」

「だから小松君来たよ!今マツキーが外に連れ出したとこ!」

「えっ!?今、小松って言った?」

「そうだよ。由宇の彼氏の小松って名乗る人が来たんだよ!」

和也だ…。でもなんで?確か研修中のはず…。?抜け出した?サボり?

「由宇聞いてるの?」

「ん?ああ…、で、どう、どうなってるの?何しに来たって?」

「その彼氏が言うには『事務所に聞いたら、携帯電話の落とし物の届けは無い。』って言われたらしくってさ、それで研究室まで来たみたい。」

「それで、なんだって？」

「始めは『田丸さんいますか？』って言われて、それに『今日は休んでいます。』って説明したら、住んでる場所聞かれた。」

「そんで？」

それからマツキーが上手く知らないとかまかしたみたいだ。それに知っても教えられないと言ったらしい。

本人の承諾なしに教えてストーカーだったら困るから……。それを言っと、住所を知ってると思ったのか、一緒に写ってる写メを見せたり携帯電話の電話番号やメールアドレスを見せたりしたらしい。が、マツキーは『別れた彼氏がストーカーって話しはよくある話だから、尚更もし知っても教えることは出来ません。』と突っ返してみたんだ。

それで押し問答になった末、今はマツキーが廊下に連れ出したらしい。

「由宇どうする？」

「どうするって言ったって……。」

本当にどうする？マツキーは今どう対処してくれてるんだ？

## 046 冷静? (前書き)

ご無沙汰してます。えーと、作者も設定を思い出しながら久々に書いています。多少表現が違ったりするかもしれませんが、その辺は大目にみて下さい。

## 046 冷静？

葵には『何かあったら連絡して！』と言って電話を切った。

どーしよう…？どーする…？どーしたらいい？俺はプチパニックに陥ってるようだ。待て待て待て…、冷静に、冷静になるんだ…。

俺も学校に行く？いや、どの面さげて…？いや、待てよ…、薄く化粧して女の時に着てた服着て伊達眼鏡してニット帽被って、マブラーしてマスクしてけば…、

風邪引いたとか言っでごまかせないかな…？

声か…？風邪声ってことに出来ないか…？

よく分からないけど、一応一通り集めてみた…。

そして…、スカートのウエストが入らない…、とりあえずワンピースに変更して…、すね毛が…、確か黒のストッキングどっかにあったはず…。それにダウンを羽織って…、

出来上がった自分を鏡で確認してみた…、

まあ、見れなくはないけど、どーやっても昔の俺には遠いらしい…。今の俺って意外と肩とかがっちりしてて…、男が初めて女装に挑戦しましたって感じに見える…。

これでとりあえずテレビ電話で葵に電話してみた。

「どう？なんか進展あった？」

「今んとこないけど…、それよりそれって口紅してるの？」

「あー、どう？女だった頃みたいな感じに見える？」

そう言って携帯電話をテーブルに置き、全身が映るであろうところまで下がって葵に見せてみた。

「んー…、テレビ電話ならごまかせるかもしれないけど…、実際会うのは無理じゃない？っていうか声がダメだろ？」

「やっぱダメか…？いや、そしたら風邪ひいた体で、声出さないで、テレビ電話で筆談だったら？」

「由宇…、諦める。」

「ヴッ、ダメか…。」

冷静になって考えたつもりが、あっさり葵に却下された…。

「そついえば先生は？」

「みんなの分のお弁当買いに行ってくれてる。」

「そつか…。みんな…、三崎は？三崎は今日は来てる？」

「あー、三崎なら今日も来てない。」

「なんで？」

「そんなの聞かれても連絡ないから分からないよ。」

三崎は何やってるんだ？俺と一緒に今年から研究メンバーになったはずなのに…。二日連続でサボりか？まさかまたナンパでもされたとか？

「そつか…。葵さ…、廊下で何話してるか聞こえないの？」

「無理。聞こえないよ。近くにいろかさえわかんないもん！」

「マジかよ…、あー、なんかどーすりゃいいんだ？」

「由宇さ…、」

「ん？」

「こんなの俺が聞くのはアレだけど、彼氏の事どうするつもりだったの？」

「えっ…、それは…、」

「昨日先生言ってたじゃん！『現段階では元に戻る薬は出来てない。』

『つて!』

「うん…。」

薬が出来てないことを言われると、暗い気持ちになる…。

「昨日は由宇が泣いたの見て、こっちが動揺しちゃったよ。由宇つて、あーゆう時そつとしとして欲しい人?それともカラオケとかで騒いで気分転換したい人?」

「どうだろ…?」

実際には晴子に会って、現実逃避してたわけだから後者寄りかもしれない。ん…?

「昨日は気を使って、そつとしておいてくれたの?」

「あー、そうだね。マッキーはそのつもりだったのかもね。」

マッキー…。本当、どう対応してるんだろ…。

「なあ、由宇?」

「ん?」

「別れるつもり無いの?」

「……………、そのつもりだけど…、」

「だったら…、」



「どう切り出しているか分かんないんだよ！」

少し喰い気味に怒鳴ってしまった。

「それに先生は、極力外部に情報を漏らしたくないみたいだし…。」

「由宇…。」

「だから、和也にも…、彼氏にも言わないで済むならそうして欲しいみたいで…、今の…、男になった俺じゃ直接会えないから、メールで…、メールで別れを伝えようって思っではいたんだ…。」

「うん…。」

「けど、東京出て来る前日まで仲良かったのに、10日も経たないうちに“あんたの事、嫌いになったから別れて！”とか“好きな人が出来たから別れて！”って言ったら変じゃない？それで納得するとは思えないし…。」

「…そつ、そうだね。」

「葵さ…。」

「何？」

「新しい彼氏のフリして、和也に一発殴られてきてよ。」

「えっ!?!」

「冗談だよ。冗談…。」

はぁ……。深いため息をついていた。葵との電話を切って着替え直すことにしたのだが…、

それにしてもあらためて見ると今の俺の格好はひどいな。愛ちゃんにも負けてるし、花音にだって負けている…。

ワンピースを脱ぎ、ストッキングも脱いだところで電話がかかってきた。進展があったのかと思いきや急いで携帯電話を取ると、そこには三崎司と表示されていた。三崎君？

「由宇？」

「あつ、うん…。」

あれっ？名前で呼んだ？しかも呼び捨て？

前回三崎と話したのは…、確か…、沖縄行く前か？その時は『田丸さん』って呼んでくれてたようない？

「今、研究室ですか？」

「いや、違うけど…、どうした？」

「あの、これからテレビ出るから見てもらえませんか？」

「はぁ？」

三崎は何を言い出したんだ？もしかして三崎って変な子？妄想癖

があるとか？

「本当ですって！有名人のそっくりさんコーナーで出るから見ててね！」

「そう…。」

ん…？えっ？

「呼ばれたから行くね！絶対見てね！じゃ、また後で！」

「みさっ…、」

ツイッター…。やばっ！出演を止めさせようと思ったが電話を切られてしまった。すぐ電話を試みるが、本番に向けて電源を落としたみたいで、無機質な“電源が入ってないか電波の届かない…”などとアナウンスが流れてる。

まあ、女として出る分には問題ないか…？“薬だけの性転換に成功した元男です”とはわざわざ自分から言わないだろう…。

そして一応、葵に“三崎から連絡があつて、テレビのそっくりさんコーナーに出るらしいから見て！”と素早くメールをしておいた。

俺は着替えて居間へ移動し、テレビの電源をオンにしてチャンネルを合わせた。おそらく昼間の国民的バラエティー番組に違いない。春休み特別企画のワンコーナーに出るのだろう。

嫌な方向にいかねければよいのだが…。

## 046 冷静? (後書き)

読んで頂き誠にありがとうございます。感想を頂ければ作者のモチベーションも上がりますので、コメント等して頂けると有り難いです。

047 火種

春休み特別企画有名人そっくりさんショーはどんどん進み3組目の出演が終わった。『はい次の方どうぞ！』そう司会者が言つと、横のドアから出てきたのは三崎の母親だった。

まったく、あのオバサンは…、

口止めたんだから、こういった類いの番組も普通は出ないだろう！でも、口止めたから平気だよな…？あの薬の事、話さないよな…？

「お名前とどちらから来たか教えて下さい。」

「えっと…、中野区から来ました三崎幸子です。」

「中野じゃすぐですね。誰が誰に似てますか？」

「えーと、息子が…、じゃなくて娘がグラビアアイドルの〇〇さんに似ています。」

『息子…、』だなんて危ないな…、

「息子と娘間違えちゃったよ。御自分のお子さんなんですから、息子と娘を間違えないで下さいよ。」

「ははは…。」

三崎の母親は顔を引き攣らせながら笑っていた…。そういう俺も弱冠引き攣り気味だ。

「はい。では、本人の登場です。どうぞ！」

そして効果音のあとにカーテンが開き、中から三崎君本人が出てきた。テレビの中の三崎の服装は、胸の谷間が強調されミニスカートに生足といった実にセクシーな出で立ちだった。一応ダウンジャケットを羽織ってロングブーツだが、外に出たら寒そうだ。

評価する立場のタレントから“オー！”と歓声があがり、“似てるー！”の声が客席からも出てる。で、結局満場一致で“そっくりの札があがり熱海温泉ペア宿泊券をゲットしたのだ。”

その間三崎本人はハニカミ笑いだけで、一言も話せないでいた。緊張してるのか？

「でも似てますねー。」

これにも笑いながら軽く2度頷くだけ。

「よく似てるって言われるでしょ？」

「はっ、はい…。」

喋った！しかも嬉しそうに笑ってる。でも、もう喋んなくていいから！

「誰か伝えたい人いますか？」

「えっと…、じゃあ…、由宇君に…。」

はあ？俺？

「じゃ、そのユウ君にブラウン管を通してメッセージをどうぞ！」

「はい。えつと…、由宇、今度デートしてください！お願いします。」

なっ！何ーっ！？全国ネットで何そんな事言ってるんだ！？

「おー！若いつていいですねー。全国ネットでデートのお誘いとは…。」

「すつ、すいません…。ダメでしたか？」

「いえいえ、いいですよ。はい、ではユウ君これ見てたら今度デートしてあげてね。」

それに笑顔で応えてる。

「それにしても本当に似てるよね。本人に合わせてみたいです。」

「ははは…。」

「はい、ありがとうございました。では次の方どうぞ！」

それで三崎親子は舞台上手へさがっていった。  
一先ずは何もなくてよかった…。

でもこのテレビ出演が、三崎にとって、とんでもない火種となっ

て燻り始めるのだ。でもそれはまだ先の話…。

三崎のテレビ出演を見届け、俺は出かける事にした。向かう先は大学で、和也に会うためだ。

自分の中で何かが弾けた感じだった。三崎が今の自分の姿をテレビで全国に晒しているのに、俺が和也に一人くらいに今の俺の状況を打ち明けられないってもいかなものか？そうゆう気持ちになっていたのだ。ある意味三崎に勇気をもらった感じだった。

先生には部外者には極力漏らさないように言われたが、俺は和也に全部話すつもりだ。そうすれば和也も納得してくれるだろう。いや、納得するように話さなければダメだ。

直接本人に本当の事を言って、自分の本当の気持ちにケリを付けたいのだ。

俺の本当の気持ち…、

本当の事を言えば別れたくない。元に戻る薬が出来るまで、待っていて欲しい……、それが本音だ。でもそれがいつ出来るか分からないのに、待つてくれる男なんていないだろう…。

何年先になることやら分からない…、明日出来るかもしれないし、50年経っても出来てないかもしれない。

せめて3年待つてくれないかな…？



そう思ったりもした…、いや…、でも3年後に元に戻る薬が出来る保証なんて全然無い…。

この先和也にもきつとイイ人が現れるだろうし…。3年も強要出来ない…。和也には幸せになって欲しかった。

だから好きだけどサヨナラ…。

とにかく色々な想いにケリをつけたいのだ。

それに今の俺は…、今の俺は、既に他の子とエッチをしている。

マッキー、美穂、それに晴子…。しかもその誰とも付き合ってるわけではなく…、本気でもない相手…。流れていうか勢いっていうか…、まあ、そんなのなんの言い訳にもならないけど…。

『よぉーし！全ては研究室に着いてからだ！待ってる和也！』

そう思いつつ大学に向かうのであった…、

## 047 火種（後書き）

どうも作者の優楽です。先日久々の投稿だったのですが、結構読んで頂いたみたいで嬉しかったです。あと、早速コメント頂けて有り難かったです。投稿していて読者から何も反応がないのは、やっぱり作者側はつまらないもの……。実際他の作品でも“この続き読みたいな”と思う未完ものが多々あります。私が“小説家になろう”を見つけたきっかけの作品も、出会った時には既に最終投稿日から何ヶ月経ってました。たまには感想コメントが欲しいと思う作者でしたm(\_\_\_\_\_)m

## 048 予想外の発言

中へ入るとそこにいたのは先生だけだった。

「おー、由宇。どうした？今日は来ないって聞いてたけど？」

「あー…、うん。えーっと…、気が変わって出てきました。」

「そう。」

「はい…、あの一、ところでみんなは？」

「みんな？あー、葵君は友達から電話があつて『ちよつと出て来ます。』って出ていったきりだし、真木君は帰って来た時に居なかったし、三崎君は…、」

「マツキーまだ帰ってきてないんですか！？」

「ん、ああ…、そうだね…。」

始めに葵から電話がかかってきてから、かなり時間が経ってる…、あれからマツキーは帰ってきてないということなのか…？

「葵は？葵はどこに行くとか言ってますでした？」

「ん…？ああ…、駅に友達を迎えに行くとかなんとか…、」

友達…？

葵の交遊関係なんか知らないが、今の姿になってから会える友達なんか限られるだろう。いや、寧ろゼロに近いはず…、葵の場合は顔に多少面影が残ってるものの、今の体はがっちりしてて以前の葵と全然違うのだ。葵は誰に会いに行つたんだ…？

俺が知ってる範囲で考えられる人は、前に会い行くとか言つてた地元の子くらいだが…。そういえば結局あの時会つたのか？ただ遠くから見ただけつてことも考えられるよな…。それにあの時“女性に興味がわなくなつた”的な事を言つてたような…。

いやいや…、そもそも葵の事を性同一性障害だと知つてた人間はいたのだろうか…？

いや、そんな事より今は和也の方だ。葵に電話して確認してみるか？ん…待てよ、俺は駅からここまで歩いて来たが、葵とはすれ違わなかった…。葵はメインのルート以外を通つたのか…？

そうだ！葵じゃなくてマッキーに連絡を…、そう思ったところで先生が話し掛けてきた。

「ところで由宇は、お昼ご飯食べた？」

「いえ…、」

「じゃ、これ真木君と葵君の分で買つてきたんだが、よかつたら食べな。」

俺が色々考えてるのは裏腹に、先生は呑気に弁当を勧めてきた。

「えっ…、でも、これは二人の分じゃ…、」

「二人が来たら、買いに行かせればいいさ。それに帰ってきた頃に

は冷めて美味くないだろ？」

「そっ…、そうだけど…、」

落ち着いてご飯を食べてる場合ではないのだが、無下にも断れず食べることになってしまった。

まだ和也は東京に居るだろうか？今日は研修ズル休みだろうし…、会社は平気かな…。

マッキーだって和也とどうなったか連絡くれてもいいだろうに…。それともまだ一緒にいるのか？

ハア・・・、

なんだか考え過ぎてタメ息が出た…。和也に俺の現状を全部話そうと意気込んできたのに本人はいないし…。

いくら待っても葵もマッキーも帰ってこないし、携帯電話も一切繋がらなかった…。

「私はこのあと行こうと思っているところがあるんだが、よかったら付き合ってもらえないかな？」

「えっ？あー…、そのー…、」

「なにか予定ある？」

「えっと…、」

「…？」

和也に話す事を、先生には言わずにおこうと思っていたが、話してみようかな？和也に全て話す事を了承してくれるといいのだが…。でもこの前みたいに“極力外部秘…”って言わる可能性もあるよな…。

「実はマツキーに急用があつて…」

迷った揚句和也に話そうとしている事を飲み込んでしまった…。

「ん…？真木君とは一緒に住んでるんだろ？家に帰ってからじゃダメなの？」

「まっ…、まあ…、はい。急用で…」

「そっか。」

「ところで、行きたい場所ってどこですか？」

「んっ…、いや買物にな…、」

「またですか？今度は何を買うつもりですか？」

「化粧品を…」

「けっ、化粧品？」

なんか少し呆れてきた。なんか女になったのを楽しんでいるような…、

ん…？待てよ…、

そもそも研究を始めたのは自分のため？元々そっち系の人ってことか…？でもバツ2で子有りだよな…？どっちかといえば普通に女性が好きなのーマルな人に分類されるはず…。バイセクシャル？

「いや、ほら、大人の女性がすっぴんで出歩くのも変だろ？」

「まあ…確かに。」

「この間スーツ買いに行った時だつて『ストッキング履いたことない。』って言ったら、天然記念物でもみるような目で店員さんに見られてたし。由宇が化粧品を適当に見繕ってくれば助かるんだが…、」

「んー…、だったら、デパートの1階の化粧品売場のお姉さんに教えてもらうつてのはどうですか？結構しっかり教えてくれるし、1品2品買えば更に丁寧に教えてくれますよ。」

「うーん。でもああゆうところに私みたいな化粧素人が行ったら力モにされないか？どンドン買わされて…」

「うーん…、俺が女だった頃は、化粧っ気がなかったからな…、そうだ！花音の勤め先のママに教えてもらうつていうのは？」

「花音の勤め先つて…、ニューハーフの店じゃないのか？」

「そうですよ。」

「『そうですよ。』って…、」

「その辺の女性より化粧もお洒落も敏感ですよ。それにママさんは、マッキーの昔からの友達で今のウチらの事情も知ってるし、キレイ系で化粧も上手だし。」

「なっ、なんだって？今なんて言った？」

んっ？なんかマズイ事言ったかな…？そう思うくらい先生は驚いた声を出した。“事情を知ってる”ってのがまずかったのか？

「いや…、花音の話だって一応は話しておかなきゃいけない人ですし…、」

「ん…、まあ…、そう…、そうだけど…、」

「それにマッキーが女になってからは何かとお世話になってます。彼女がいなかったらマッキーだって苦労してたはず！」

「わっ、分かったよ由宇。その人はウチらの…、なんて言うか…、理解者と考えていいのかな？」

「まあ…、広い意味では多分そうです。それにもつと言えば俺の恋人にだって、ちゃんと説明したいですよ…、」

「由宇…、」

「先生だって、ウチの親に説明してくれてもいいんじゃないありません？」

「うっ…、」



「お姉ちゃんの名前も借りて騙るわけですし！だから…」

なんか分からないけど、いつの間にか不満をぶちまけるような形で勢いよく喋っていた。

「由宇。」

「だから…」

「由宇！！！」

「えっ？」

2度目に名前を呼ばれた時は、先生の声はかなり大きくて少しびつくりしてしまった。

見上げると、苦虫を潰したようなひどい表情を先生はしていた。そして、

「悪かった。」

「えっと…、そんなつもりじゃ…」

「本当にすまない…。由宇がそんなに精神的に追い込まれてるとは思わなかったから…」

年上である先生に頭を下げさせてしまった俺は、なんともバツが悪かった。謝ってもらいたいと思って言っただけじゃないのだ。

それに俺が精神的に追い込まれてるってのはどうなのだろうか？他人からはそう見えるのか？

「みんなに本当の事を話そう。」

話す？しかもみんなって…？誰に…？和也？お母さん？学長？色んな事を考えて、返事を出来ないまま先生を見てると、

「薬の事を世間に発表しよう！」

「えっ？えーっ！？」

思わず大声で『えーっ！？』と言わずにはいられなくなるような意外な発言だった！

## 049 口論（前書き）

今回由宇は登場しません。

一方その頃、学校内の駐車場では…、

「だから、それが事実なんですって!」

「っていうか、さっきから俺の事、馬鹿にしてるだろ?」

「してませんよ。」

「第一っから本当にそんな薬が作れたのかよ!?それに大学教授ともあろう人が、そんな研究するなんて考えられない!」

「うーん、いや、元々は海洋生物の性転換を研究していてですね…、えーと、どうやったら信じてもらえるんですか?」

「『どうやったら』って…、だったら証拠…、証拠見せて下さいよ!その…、性別が変わったっていう…、」

「『証拠』って言うてもな…、」

「ほら!そんなの信じろって方が可笑しいだろ!」

「あーそうだ!だったら私の運転免許証と学生証見てみます?写真に面影残ってると思うんですが…、葵も今学生証持ってる?」

「えっ、あー、うん。あるある。」

葵が電話で呼び出された相手…そう、それは真木翼だった。『先

生に私からの電話つてバレないように上手く言って、車まで来てくれ！』とでも言ったのだろう。だから葵は駅に向かうことはなく、当然学校から駅までの道で由宇とすれ違わなかったのだ。

それで今3人がいるのは愛ちゃんの車の中。

「はい。こつちが免許で、こつちが学生証。」

和也はそれらを受け取りマジマジと写真と本人を比較し始めた。

「んー…、まあ…、似てなくもないかな…、でもこれって本当にあなたの免許証ですか？」

「勿論！」

「あなたがこの…、真木翼つて証拠もないし、免許証も学生証にも性別は記載されてないじゃないですか。兄弟の物つてことも考えられますよね？」

「『兄弟』つて…、じゃ、小松さんは兄弟の免許を持ち歩いた事ありますか？」

「いや…、それはないけど…」

「でしょ！だったら！」

「ちょっと待って！真木つて…、あの時電話に出た、由宇の携帯電話拾った人と一緒にいた人？」

「あー…、そうだね…。」

「『そうだね。』って…、由宇の携帯…、由宇の携帯は、まだその人が持つてるんですか？」

「でしようね。本人の携帯電話ですから。」

「はあ？」

「いや、だからあの時電話に出た男の声の主が、由宇本人ですよ。」

「はあ…？」

小松和也は“この人何言ってるんだ？”って顔して真木を見ている。頭の中はプチパニツクの状態なのだろう。

「男性の声だったのが納得いかないかもしれませんが、あの時電話に出たのが紛れも無く由宇ですよ。」

「…、」

「で、『拾った』って言ったのは、私が考えたつつさの嘘です。」

「『嘘』…？」

「はい。あの時由宇は、自分が男になってしまったことを小松さんに隠しておきたかったみたいですから。」

「…？」

和也は何がなんだか分からない様子だ。  
そしてしばらくの沈黙のあと和也が重い口を開いた。

「その人に…、あんたが言ってる由宇本人に会わせてくれ！」

「だからさっきも話したように、由宇はまだ気持ちの整理が出来てないみたいだから…、って由宇が男になった事は信じてくれたんですか？」

「いや…、そのあんたが由宇っていう人と話してみたらだよ！二人しか…、俺と由宇しか知らない事をその人が知っていたら信じれるかもしれないし。だからその人と会わせてくれ！」

「分かりました。」

「マツキー『分かりました。』って…、会わせるの？」

「仕方ないだろ？会わなきゃ納得してくれそうにないし。由宇だってその方がスッキリするでしょ。」

「まあ、確かに。」

「葵、由宇に電話してくれない？『今から迎えに行く』って！」

「本当に？」

「マジだよ。どのみち今日はバイトの面接行く予定なんだから、迎えに行くのが少し早くなっただけのことだよ。」

「わっ、分かった…。」

そして切っていた携帯電話の電源を入れると、不在着信が2件と

メールが3件ほど受信してあることが表示された。そのいずれもが由宇からのものだと言易に想像がつく。それを確認するのを後回しにして葵は由宇に電話したのだ。

トゥルルルル・・・



俺は研究内容を発表することを先生に止めるよう説得していた。もし発表したら色んな問題が発生する事が考えられるからだ。俺らだって最悪の場合、色んな人から奇異の目で見られる可能性さえあるのだ。もし発表するにしても戻る薬が出来てからにしてほしいものだ。

そんな中、葵からの電話が鳴ったのだ。俺はディスプレイの“葵ひかり”の文字を確認すると慌てて電話に出た。

「今どこ？和也は？」

「由宇声デカイよ。」

俺は続けざまに大声で質問していたようだ。

「ゴッ、ゴメン…、っていうか何度も連絡したのに、携帯の電源が入ってないってどーゆうことだよ！」

「あー、」

「いや、それはいいや。和也は？マッキーは和也の事どう対処してくれた？」

「あー、うん。それはこれからそっちに行って話すよ。」

「そっち？そっちって何処？」

「いや、だから…、マッキーのマンション？居るんでしょマンシヨ

ンに？」

「いや、今、研究室にいるんだけど。」

「はあー？なんで？」

「『なんで？』って、そりゃー和也に…、」

「あー、先生近くにいるの？イエスかノーで答えて！」

ん？先生に聞かれたくない話か？

「イツ、イエス！」

「じゃ“ 適当に用事が出来たから帰ります ”とか言っ出て来て！」

「あー、いや…、それが…、」

「何？どうしたの？」

「あー、うん…、葵がこっち来れない？」

「なんで？」

「えーっと…、先生がこの研究内容を世間に発表するって言い出してさ…、止めるように説得してるんだけど、一人じゃ説得出来そうになくて。」

「えっ！？マジで？」

「うん。」

「なんでそうなったの？」

そう言つと、葵の後ろで誰かが『どうした？』と声をかけたのが聞こえた。マッキーの声に似てるような……？その声の主と葵が何やら話している。

「ちょっと葵？」

「えっ？あー、今戻るから待ってて。」

「分かった。」

どの位の時間で戻ってこれるか聞きたかったが、俺が『分かった。』と言つた途端電話を切られた。

「葵君か？」

「あつ、はい。」

「由宇。」

「はい……」

「私の中では、発表は早いか遅いかだけの問題で、由宇の言ってる『発表しちゃダメ！』ってレベルじゃないんだよ。」

「だってこれって問題ですよ！性別が変わっちゃうんですよ！？政府の反発だって、いや、世界中の色々な人や団体から反発されます

よ！」

「中には賛成する人だっているだろ？」

「そうでしょうけど…、」

「由宇は世界でどの位の人が性転換したか知ってるか？」

「いや、知らないです。知りたいとも思わないです。」

「そうか…、」

「はい。」

「じゃ、少し話の角度を変えて…、性適合手術をしてる人達やその準備段階の人の中に、性ホルモン剤を摂取しているのは知ってる？」

「そうなんですか…、あつ、そういえばマッキーがそんなような事を言ってたような…、」

「それに個人差はあるが、多かれ少なかれ副作用があつて大変なんだ。寿命も短くなる可能性もある。」

「はあ…。」

「でもこの薬があれば、そんなリスクもなくて済むだろ？」

「それはまだ分からないじゃないですか！この薬だつて副作用あるかもしれないし。ウチらまだ何日も経ってないじゃないですか！もっと経過観察っていうか…、」

そこでドアが勢いよく開いた。葵とマッキー……そっ、それに、和也！？和也も一緒？

久し振りに見る和也。

走ってきたのか少し息が荒い。

その和也と目が合う。

お互い何も言えないまま沈黙が続いた。

「葵君そちらはどなた？」

そう言って先生が沈黙を破った。

「あつ、えつと……こちらは……」

葵がもごもごとしてマッキーの方をチラッと見て助けを求めている。

「また希望者を連れてきてくれたのかな？」

希望者？

「違います。男性から女性は花音一人で十分でしょ！この人は由宇の彼氏だそうです。」

もごもごしている葵に代わって、マツキーが本当の事を答えてしまった。

「ほう。そうなの？」

「はい。小松と申します。」

「そう。」

「それより先生、もう発表するつもりですか？まだ何一つ論文というかレポートにまとめてないじゃないですか！」

もう？『もう』って言った？ってことはマツキーも発表するのは賛成なんだ…。

「そりゃ、あれだよ。大急ぎで仕上げるよ。だから花音さんの映像が取れ次第発表出来ればと思っている。」

花音の映像…、

「先生。」

「なんだ？」

「発表の時の資料は花音の映像じゃない方がいいと思いますよ。人での映像では問題がありますよ。前に言ってたチンパンジーは確保

出来ないんですか？」

マツキーと先生がそんな話を始めた。こっちの話題も気になるのだが、俺としては和也の方が気になって仕方ないのだ。

「あの…、」

「なんででしょう？」

「そこに座っている方が由宇ですか？」

この時俺は、マツキーが和也に全てを話した事を悟った。マツキーの方を見ると小さく頷いている。本当の事を言うつもりで来てはいたが、いざこの状態で会うとなると和也の反応が気になる。

「久しぶり…だね…。」

俺はそう言うのが精一杯だった。

## 051 涙

俺と和也は、マツキーの計らいで隣の準備室に二人っきりにしてもらっていた。

「本当に由宇なのか？」

「うっ、うん…、」

「本当に…、」

和也と目が合う。その状態のままで頷いてみせた。

「本当かよ…、っていうかあんた誰かに似てるよね。え〜と、あのアイドルグループの…、なんていったっけ…、」

「でも中身は間違いなく由宇です…。」

それから和也と俺の付き合い始めから最近あった出来事など話してあげた。

それに和也からのいくつかの質問にも、覚えている範囲で正確に答えていく。

「だったら一年前に旅行に行った場所は？」

「箱根でしょ！初めて食べたアワビの踊り焼きに感動して、和也ったらはしゃいじゃったよね〜。仲居さんに笑われて恥ずかしいっ



たらなかったよ。」

「…。」

その質問の答えを聞いて和也が黙ってしまった。何かフォローの言葉をかけてやらないとダメかな…？

しまいには和也は、左手を顔に宛て目の辺りを円を描くように擦り始めてしまった。更にその行動はエスカレートして、今度は両手で頭を掻き乱し髪の毛をぐしゃぐしゃにしている。

「あの…、」

「…、」

「和也？」

「…、」

なんだろう？大丈夫かな？すると和也が急に動きを止め、目を開くと、

「すぐ戻してもらえ！あの…なんだ…、あっちの部屋にいた…白衣着てた先生っぽい人に言えば戻してもらえるんだろ？」

「そつ、それが…、」

「何？」

「戻る薬が出来てなくて…、」

「…。」

「それが出来てたら、和也に隠す必要がなかったわけだし…」

「ハア？」

「…、」

和也がキレそうな感じだった。

でもどうやら、俺が由宇だって事は信じてもらえたらしい。

「だから…、だからさ…、」

『だからさ…、』の後の言葉に詰まってしまふ。“別れ”を切り出すいいタイミングだと思ったのだが、それを切り出す事がこんなに勇気がいるものだとは知らなかった…。

告白なんかしたことないが、告白より勇気がいるのではなからうか？やっぱりメールで別れを伝えればよかったと、今更ながら後悔してしまう。

「だから何？」

「せつ、先生が言うにはなんだけどね…」

「おう！」

「もつ、元の体に戻す薬が出来るメドも立っていないんだって…」

「ハアーーーー？」

やっぱりキレる？

「デカイ声出さないでよ！」

「チッ！」

デカイ声の次は舌打ちかよ！あーなんか嫌な感じだ。和也のこうゆうところは直して欲しかった。

「俺は男同士ケツ掘り合う趣味なんかねえぞ！」

「…、」

そんな光景なんぞ想像したくもない！

ボーイズラブ系のマンガは、友達が好きだった影響で少しくらいは読んだ事はある。でも実際それが自分となると想像したくない。

「俺だつてなりたくって男になったわけじゃないんだよ！巻き込まれたっていうか…、」

「聞いた。あの、真木って奴に。あいつらも元はアレだろ？違う性別だったんだろ？」

「うん…、」

「あーあ、ったく…、とりあえず別れるか？」

「えっ？」

向こうの口から予想してなかった言葉が出て、びっくりして聞き

直してしまつた！

「いやだから別れようぜ！っていうか、俺は男と付き合う趣味ねえし！」

「うつ、うん…。」

「こんなもんか…、こんなあつさり…。しかも、結局こっちの方がフラれてるし…。」

「心配して来て損したぜ！つたく！」

男の姿になつてしまつたとはいえ、和也にとって俺ってこんなにあつさり別れを告げられる存在だったのか？悲しいはずなのに涙も出やしない。

「和也…、」

和也が怒つた口調で『何？』と返事をした。

「いや、やっぱいい…、」

また同じ口調で『言いかけたんだから言えよ！気になるだろ！』と怒鳴られた。

「じゃ、じゃあ言うけど、もし、もし近いウチに元に戻る薬が出来て、その時お互いに付き合ってる人がいなかったら…、」

「おい！って、無理・無理・無理！っていうか今お前男なんだよ！そんなのに言われても無理に決まってるだろ！？それにこつちの状

況っていつか心境解って言ってる？」

「…。」

「連絡取れない彼女の事が心配で様子見に来たら“男になってました。”って状況なんだよ。こっちの頭ん中整理ついてない時に言う事じゃねえだろ！」

「ごっ…ごめん。でも、そっちが『言え』って言ったから…、」

「あつ…、だよな…、悪い…、」

そこで会話が一旦止まってしまった。

お互い目を合わせられず別の方に視線を向けてしまった。

しかし同じタイミングでため息を漏らしたところで再び目が合う。そこで和也がフツツと笑って立ち上がると、

「帰るよ。」

「あつ、うん。」

なんだか寂しいような、それでいて胸のつかえがとれたような。

「さっきの話なんだけどさ…、」

さっき？

「『もしお互いに付き合ってる人がいなかったら』って言ってたけど、」

「うん。」

「その薬が出来た時に由宇は女に戻ってるんだよね？」

「そう…だね。」

「戻った直後なんだから彼氏はいないわけじゃん？」

「うつ…うつん。」

「だったら俺に彼女がいなかったらってことになるよね？」

「…。」

「まあ、保証はしねえけど、その時彼女がいなかったら考えてやらないこともないけど、期待はしないでくれよな。」

なんていうか…、和也なりの優しさみたいだ。

「分かった。 3年…、こっちから3年連絡いかなかったら忘れてくれていいから…。」

「分かった。 3年ね。頭に入れておくよ。」

「ありがと…、」

「じゃあな。」

「うん。」

そう言って準備室から出ていった。ドアの向こう側でマツキーと話しているのが聞こえてくる。“他言無用”をマツキーからお願いされているようだ。

和也がマツキーと話しながら廊下に出たのか、その会話もう聞こえてこなくなり、和也の気配が感じられなくなった。

そしてそこで、俺の目から涙が溢れてきた。あれっ…、なんで今頃…、俺って鈍感なのかな…。今頃になって涙が出るなんて…。

こうして和也との2年の交際が幕を閉じたのだ。

由宇、ハタチ…、人生初の恋人との別れだった…。

## 052 それぞれの事情（前書き）

由宇のアツという間の何日間（作者は何日だったか把握してません。）が過ぎて、やっと大学に編入します。これから由宇にどんなキャンパスライフが待っているやら…。



## 052 それぞれの事情

和也との別れから1ヶ月…。大学とバイトとで新鮮で充実した日々を過ごしている。今となってはなんで別れる事をグダグダ先延ばしにしていたのか解らない。そのくらいスッキリした心境なのだ。

先生といえば、素直にありのままを学長に話し、一定の理解を得たらしい。だが、授業に関しては生徒達の混乱を避けるため、准教授に任せるということで落ち着いたようだ。

今後このまま学校に籍を置くには、研究内容がどう世間の評価を受けるかにかかっているみたいだ。そう…結局は研究内容を発表する方向らしい。そこで発表を前に特許申請をしたみたいだ。発表は特許が取れてからになるらしいのだが、1年は取れないだろうとの見通しだった。特許自体取れるかどうかも怪しいものだ。

そんな先生は、医薬メーカーの研究所に行ったつきりで、最近は顔を見る機会が無くなってしまった。なんでも、先生が作った薬の成分分析をしているとのことで、同じような効果が得られる成分を見付けだしてるみたいだ。

その医薬メーカーとどういった契約をして研究所の一室を借りたのか知らないが、そのメーカーの何人かは“薬”の存在を知った訳で、後々面倒な事にならなければよいのだが…。

研究室のメンバーはというと…、

マッキーが2週間前にマンションから引越してしまった。料金先払いシステムのアパートだったため、保証人も必要なく、すんなり

契約出来たのだ。

大学にもしつかり通ってるらしい。2浪して入学したからには親の手前、卒業を目指すとのこと。“らしい”というのもマッキーとは学年が違うのもあって、この2週間はまったく会ってないのだ。何日か顔を合わせてないだけなのに少し寂しい気がする。

葵は…、葵は一年休学することにしたとのこと。あまりにも体格・体型が変わってしまったから、というのがその理由らしい。外見とつかシルエットの全くの別人なのである。30センチ近く身長が伸びたらそりゃ別人だよな…。友達とかにどう対応したらいいかわからない…。ってのもあるみたいだ。

かといって学校に来なくなっただかといえそうではなく、研究室のマウス達の世話をしている。

そして夕方には俺とバイト先で顔を合わせている。授業を受けなくなった葵はほぼフル出勤だ。ホストのスーツが似合ってるのが意外だった。髪を落ちて着いた茶色に染めたのが良かったのかもしれない。

そして三崎なのだが…、

「なっ、なあ…、」

「ん〜？なあ〜に〜？」

「もうちょっと離れて歩かねえ？っていうか、いつから腕に絡んでるの？」

「いーじゃん少しくらい！」

「『いーじゃん』って…、」

学年が同じ三崎は何かといえば隣にいるのだ。というかキャンパスにしている間はほぼ一緒といってもいいだろう。

三崎にはいつも仲良くつるんでいたグループがある。三崎の他は男女2人ずついて、一応、三崎が女の子に変わった事を理解してくれた様子…。中には嫌悪感を持つてる子もいるかもしれないが、今の所表面には出てない。でも俺や三崎がいないところで陰口を言ってる可能性はあるだろう。

そのグループの中に俺も入れてもらったのだが、三崎はいつの間にか俺の横をキープしているのだ。

しかも三崎という目立つ。いや、目立つというよりも、そもそも三崎とマツキー自体が学校内で噂の的なのだ。モデルのように変わったカツコ綺麗なマツキーと、グラドルみたいに可愛いくなった三崎。

三崎もマツキーも回りからニューハーフと思われる。去年まで男として存在していたのだから、回りがそう思うのも当然といえば当然なのだが…。

そんな三崎と編入して早々仲良くしているのだから、自然と俺も噂になっているみたいだ。それでなくても俺の場合は、あの人気タレントに似てるということで二度見されることが多いというのに…。

そんな中、『知らないかもしれないけど、三崎ってこの間まで男だったんだよ！』と教えてくれる子もいるし、『あんなのと付き合ってるの？』とか、『あんなオトコ女と別れて私と付き合ってた下さい！』って告白される始末…。その度に『付き合ってたんですよ。』

ただの友達です。彼女は地元にいるから付き合えません。』と返答するのだ。最後の“彼女が地元”というのは当然作り話で、何か

と面倒臭そうなのでそうゆう事にしておいた。  
回りからそんな風に誤解されるくらい、いつも三崎が傍に  
いるのだ。

「ねえ、由宇？」

「何？」

「明日からの予定は？」

「明日から？」

「ゴールデンウィークじゃん？どこか遊び行こうよ！」

「あー、ゴールデンウィークかぁ…、そうだねたまにはマッキーと  
葵でも誘って…、」

「ちょっと！なんでそうなるかな？」

“？”ってな具合で三崎の方を見ると、不服顔をして俺を見てる。

「たまには二人でどこか行こうよ！」

「『たまには』って…、」

毎日一緒にいる三崎にそんなこと言われても、なんとも実感がな  
いのだ。それに今だって二人だし…。

「どこか行きたい場所でもある？」

「うん…、うん。ある！」

「何処？」

「マンション！真木さんって、いないんでしょう？」

「えっ？ウチ？」

「そう！招待してよ！ベランダから見える夜景が綺麗って言ったよね？」

「いや…、そうだけど…、」

「何？嫌なの？」

「ほら、夜はバイトだし…、」

「じゃあ、昼でもいいよ！ご飯作って食べようよ！」

「昼は…、」

「……。なんなの？私の事嫌なの？」

「いや、ゴールデンウィーク中の昼間ウチに来るのはヤバイよ。いつ美穂が来るか分からないし…、」

ゴールデンウィークともなると、昼間から美穂が来る可能性がある。もし、仲良く料理でもしている時に美穂と鉢合わせしようものなら、あー考えただけでも恐ろしい…。

でも実際の美穂のゴールデンウィーク中のスケジュールは、オペ

の予定で一杯だったみたいだ。そんな忙しい中、ホストクラブに来て由宇のとこ泊まる余裕なんて無かっただろう。

「だったら、いつだったらいいわけ？」

「って、その前に会うつていつ決まったのさ？」

「『いつ』って…、だったら『行きたい場所ある？』なんて聞かなきゃいいじゃん！」

うつ…、ごもつとも…。

「ゴメン…。いや、ウチはヤバイよ。」

実際俺は美穂の扱いに困っていた。いや…、美穂だけじゃなく、三崎の扱いにも困っている…。

美穂とは何か約束したわけではないが、マッキーが引越して以来、たまにマンションに来るのだ。それというのもマッキーが美穂に『由宇が“騎士”でホスト始めたから顔出してあげて！』とメールしたからだ。マッキーは他の客にもメールしていて、お陰で新人なのに俺と葵には太い指名客がいる状態。

といつてもまだまだ新人の俺達には、指名の無い日の方が多く大体が先輩方のヘルプ。浴びるほど飲まされ酔い潰れることもあるし、どうやって帰って来たか分からない日すらある。

とにかく俺は美穂にとってマッキーの代わりで、困われてる愛人みたいな存在なのだ。住むところをそのまま間借りしてるのだから俺としても文句を言える立場ではなかった。その事は三崎もよく理解しているはずだった。

「分かったよ…。」

「悪いね…、じゃ、俺バイトあるから！」

「あつ！」

何か言いたそうな三崎を残し、地下鉄の駅の階段を早足で駆け降りたのだ。後ろからは『メールするね！』とだけかろうじて聞こえてきた。

三崎の事は決して嫌いなわけではない。グラドル並に可愛いし、魅力的なボディラインだし…。性格は…、普通…？でもグループ内の微妙な空気が、何となく三崎を少し遠ざける要因になっているのだ…。

でも三崎は俺が元女だと知っている数少ない内の一人である。だから絶対蔑ろには出来ない。

そう、俺は三崎やマッキーと違いカミングアウトせず、元から男として生活しているのだ。

### 053 ホスト由宇

裏口から入るとロッカールームに直行する。葵は既に出勤して店内の掃除をやったことだろう。そして開店のお客様を出迎えるため、仲間と通路に立っている頃だ。

「遅いぞ由宇！」

「あつ、すみません。着替えてすぐいきます。」

ここのマネージャーさんで中田さんだ。  
通称ナカさん。

面倒見がとてみいのでありがたい。

『遅いぞ』と口調は少し尖っているが顔は笑ってる。俺が学生ってことを今のところ最大限に理解してくれて、今日みたいな多少の遅刻なら目をつぶってくれるのだ。マッキーがメールで上手く言ってくれただろうし、マッキーの上客を俺と葵で何人かずつ引き継いでいるのも原因だろう。客を呼べるホストは優遇されるのだ。それも大金を落とす客なら尚更だろう。

「なあ由宇？」

「はい。」

「お前、大学なんか辞めて毎日ウチで働けよ。最近、表の写真パネルとかネット見て、お前指名してくる客増えてるみたいだぞ。」

「マジっすか？」



「ああ、本当だよ。ネット見てきたお客は、お前の出勤をチェックしてくるからいいが、休んだ日の一見客からの指名逃してるぞ！」

「そっか…、でも大学は辞められないですよ。」

バイト感覚の俺にとって、これが当然の受け答えだろう。

「そうだよな…。だったら週4日と言わず、暇な日は出てこいよ。」

目的はこれだ。始めに無理なお願いをする。その後にハードルを下げてお願いをするのだ。人間の心理からいうと一度断った後だけに、二度目は断りずらいということらしい。しかもお世話になってる人から言われたら効果は大きいだろう。これを知ってて使ってるのだろうか？

「はあ…、一応考えておきます。」

「頼んだ。」

それには頷いて応えた。確かにたまに指名は入るが、俺の指名はまだまだ少ない方なのだろう。ただ初めてのお客様が俺を指名してくれるのは、表に貼ってあるパネルの写真写りがいいからだ。おそらくパソコンで画像修正してるだろうが、あの人気タレントそのものと言ってもイイほどの出来だ。

「あつ、そうだ！」

「はい。」

「翼どうしてる？連絡あるか？」

「いえ…、」

実際このところ会ってなかったのでそう答えた。

「そうか…、」

「どうかしました？」

「いや、メールしたんだけど返信がなくてさ…。」

ん…？マツキー何してるんだ？

「俺からもメールしてみます。」

「頼むよ。」

ナカさんはマツキーにどんな用件があつたんだ？それにしても最近会ってないだけに、マツキーのことが気になった。

今日は週末からか、ほぼ席が埋まっている。ナンバー1とナンバー2のお客様が競うかのように高いお酒をオーダーしてきて、今日は何度目のシャンパンタワーだろう…。コールに加わるのも面倒臭いし、新人に分類される俺達は当然グラスを空にする役廻りだし…。流し込む様に飲むので今日は後で大変だろう。

そんな中俺に指名が入った。

「いらっしやいませ。ナイトへようこそ。」

「どうも。先週も来たけど覚えてる？」

「もちろん覚えてるよ。ご指名頂けて光荣です。」

このお客は前回新規で来たにも関わらず、ドンペリのピンクを3本入れてくれた里奈だ。20代半ばといったところだろう。ウチの店ではピンクは1本10万円となっている。その里奈が俺を本指名してくれたのだ。これで俺が彼女の担当になった。

でも2週連続ともなると支払いの方が心配だ。売り掛けにされて飛ばれてもしたらこっちが大変なのだ。どれくらい余裕があるお客かを見極めるのも重要になってくる。俺らとしたら無理をしない程度に適度に足を運んで欲しいのだ。

里奈は前回、40万以上払っている。一体彼女は何をやっている人だろう？それとも家が資産家でお嬢さんとか？

「何かお飲みになります？」

「あー、そうね。ピンク頼もうかな。」

「ありがとうございます。」

黒服に目をやると向こうもこちらを見てた。入ってきたばかりのお客とあって、注文する可能性が高いとみていたのだろう。

「ねえ、何回くらい来たらアフターしてくれる？」

「アフター？今来たばかりじゃん？もう帰りの話？」

「うん…、あーそうだよね…、じゃー、今日は？いくら使ったらア

フターしてくれる?」

「今日?」

今日は俺が入って2回目の締め日だ。それだけにナンバー1もナンバー2もじゃんじゃん自分の客に頼ませてる。ナンバー1を死守したい者とその座を奪いたい者。双方の常連達もその辺が分かって、今日の店はある種の熱を帯びている。その熱い争いに入る余地は、今の俺に到底無い。

お客には基本的に無理をさせたくないのだ。1回で沢山お金を使つて来なくなるよりも、今の俺は上客の常連を一人でも多く作りたいのだ。でも締日ともなると、正直自分の売り上げを伸ばしたいのも現実だった。

「それとも、もう今日は誰かと予定入ってる?」

「いや、ラストまで遊んでいってくれたら、喜んでアフター行かせて頂きます。」

本指名してくれた日にダメとも言えない。それに彼女は世間で言うところの“いい女”なのだ。それに、彼女は俺にとって“いいお客”になる可能性が十分ある。ウチの店は永久指名制だから俺が辞めない限り、彼女が此処に通う間指名を変えられないのだ。

「ほつ、本当?今日大丈夫なの?」

「ええ。」

マツキーには『始めの内は勉強だと思って、枕営業したらいいんじゃない?それでお客を見極めなよ。』と言われ、次いで『常連に

アフターを言われても最低でも2回に1回は断れ。』と言われている。ケースバイケースで客にもよるが“いつでも寝る男”のイメージが出来るのはなにかとマイナスらしい。上手く焦らすのも必要とのことだ。

「嬉しい！！じゃ、ピンク止めてプラチナにして。」

「えっ？」

プッ、プラチナ？ブラックとゴールド飛び越えてプラチナを頼むの？

「何？私がプラチナ頼んだらダメなの？」

「いや…、大丈夫？」

俺は支払いを心配してしまった。プラチナといえば確かウチの店だと1本70万円はしたはず…。

「あー、支払いなら大丈夫。今日は帯付きを3つ持ってきてるから。」

そう言って持ってきたバックの中を見せてきた。中には本当に3百万入っている。

「大丈夫なの？」

「平気だから気にしないで。」

「おっ、おっ…。」

なんか俺の中の感覚が崩れていく感じがした。一度しか会ったことのない男に、こんな風に注ぎ込めるものなのか…？

一ヶ月前まで自分も女だったが、とても同じ生き物とは思えなかった。

オンナ…、

実はその感覚は薄れつつあるのだ。いや…、身体が男なのだから、現実的にそんな身体と毎日向き合っていれば、前の感覚を忘れるのは当然なのかもしれない…。今となっては、俺は元から男だったのではなからうかと錯覚するのだ。

意識の中では女心を忘れないようにと思っている。でも、色んな女性に接したり、その女性と裸で抱きあったりしているうちに、どんどん俺の中の何かが変化しているのだ…。一ヶ月程度でこんな感じなのだから、この先俺はどうなっているのだろう…。

## 054 枕

今は朝の9時半。完璧に寝坊で、大学には完全に遅刻だった。土曜くらい休みにして欲しいものだ。

俺は昨日、ホテルで客の里奈を抱いた。今もそのホテルのベッドの上にいるのだが、実は客と寝るのは今回が初めてだった。お客の方に誘われるまで、枕営業をする必要がないと思っていたからだ。

でもマネージャーのナカさんには、『新人なんだからどんな自分から枕営業するんだよ！』

女つてのは一度抱かれたら、また次行ったら抱いてくれるかな？って思うもんなんだよ。

特に渴いてるご無沙汰な干物女はな。だから一発目にちゃんと気持ちよく逝かせてやれよ。そして2回目は何回か通わせてからにするんだ。そこは少し焦らしたりしてだな…、まあ、女は2度抱かれたら惚れるもんなんだよ。ホストは惚れさせないと金にならないよ。』とレクチャーされながら煽られている。

基本イイ人なんだが、その発言を聞いた時にはちよつと引いてしまった。それを聞いた時には“女目線”の方が強かったのかもしれない。

そしてバスルームのシャワーの音が止んで、しばらくするとバスタオルを巻いた里奈が現れた。

「おはよう。」

「おはよー。ルームサービスでも頼む？」

「んー、それだったら目覚めのキスを頼むよ。コーヒーよりそっちの方が目が覚めそうだ。」

なんて、そんな冗談を言ってみたら…、

「オツケー。」

そう言つとベッドに上がつて俺の横に肩肘付いて寝そべると、軽く唇を重ねてきた。冗談のつもりで言つたのに…。でも何日か振りの寝起きのキスだ…。

マッキーは寝起きのキスをする人で、エッチした翌朝などはほぼ100%してきていた。いや、実際は俺が目覚めてなかっただけで毎日されていたのかもしれない。

「なんで俺だったの？」

「ん…？あー、えーつと…、タイプだったから。それに…新人だからかな。」

「新人だから…？」

「新人なら、まだそんなにお客も付いてないでしょ！」

「あーなるほどね。」

古株のホストだと常連客が多く付いていて、アフターに誘つても先客がいる確率が高いということだろう。だから顧客が欲しい新人なら食いつくと踏んだのだ。それにまんまと俺は乗せられてしまったらしい。

「納得してくれるの？」

ん？裏の意味でもあるのか？



「ん…、どっちがいいの？」

「どっち？」

「いや、『納得した。』って言って欲しいのか、『本当の理由は？』って聞いて欲しいか。」

「“聞き上手”ってよく言われるでしょ？」

「どうだろ？里奈が言いたくなければ聞かないし。」

「ふっ…、なんか大人だね。っていうかドライなのかな？」

「どうだろ？」

「年ごまかしてるでしょ？なんか年下だとは思えないよ。」

基本的にホストが客にプライベートなことを聞くのはタブーだ。でもここは店ではない。年齢とか、なんで羽振りがイイか聞いちゃおうかな？寝たんだし聞いても平気かな？

年齢を聞かれ答えた時に『年下か』。言っていたことから、俺よりお姉さんという事だけは分かっている。ただ、今のところいくつ上かは分らない。

「里奈さ…、」

「うん？」

「いや、こんな心配するの違うと思うんだけど、お金大丈夫だっ

たの？無理してない？」

「平気だよ。っていうか、そんなこと気にするホストなんかいないよ。っていうかお金使わせてナンボの世界じゃないの？」

「まあ…、そうだけど…。里奈が無理してないって言うならいいけど…。」

薄々は感じていたが、どうも里奈はホストクラブに通い慣れてるようだ。他の店にも俺みたいな男がいたのかもしれない。飽きたら他の店に行つて違う男を漁る…。そういった具合だろうか？

「ありがと。ねえ、そんなことよりお願いがあるんだけど。」

お願い？なんだ…？

「何？俺に出来ることなら力になるけど？」

「写メ撮つていい？」

「写メ？」

「実はね…、」

彼女の話は簡単に説明すると……、俺が女だった頃好きだったアイドルが相当なヤリチンみたいで、里奈の友達が何回か会つてやりпойされたらしい。そこでその人にそっくりな俺とベッドの上での写メを撮り、それをそのアイドル本人としてネットに流したいとのこと。

写メの構想もあるらしく、シートから肩を出して寄り添い、いか

にもさつき（エッチが）終わりましたって雰囲気を出したいみたいだ。それでその写メに週刊誌でも食いつけば、尚更痛快ということだろう。

『彼女の代わりに仕返ししてやりたい。』と言っではいるが、実は里奈本人の話じゃないかと俺は少し疑っている。

「うん。」

「ね？お願い。またお店に遊びに行くし、迷惑かけないから。」

「でもそれって俺の顔曝されるってことだね？」

「えっ！？うっ、うん…。」

「里奈は？里奈の顔は？」

「目のところに黒い太線入れるから平気。」

「そっか…。」

画質が悪い写メなら本人と見間違える可能性はある。そうなるとそのアイドルの人気も少しは落ちるだろう。…って事はホストクラブでの俺にも多少の影響が出るのかな…？

「ちょっと考えとく。」

『考えとく』と言った時は、おそらくやる可能性が低い。でも断って相手がイヤな気持ちにならないように、前向きな表現であやふやに先延ばししておくのだ。でも相手もこっちが嫌がってるのは感じてくれるだろう。

「うつ…、うん。」

「俺を指名した本当の理由ってそれ？」

「違うよ…。」

里奈の口調が弱くなったように感じた。凶星か…？こんな感じで今日別れると、里奈はもう店に来なくなるかな…？

「ねえ？もう一回エッチしようよ？」

「ん…？んー、するか。」

これも断ったら空気が悪くなりそうで、これ以上空気が悪くなるのが嫌だった俺は、つい里奈の提案に乗ってエッチをしてしまった。結局、里奈の歳を聞くタイミングも逸しちゃったし…。朝から俺は何してるんだか…？

俺がこの日学校を休んだのは言うまでもない。

## 055 親子喧嘩

俺は死んだように眠っていた。いくら若いといっても昨晚は結構飲んだし、遅くまで里奈と絡みあつてたし…。多少は寝たのだが、寝足りなくて帰って来て昼寝をしたのだ。そんな中、電話で起こされた。

「今どこ？」

「ん…、誰…？」

「あれっ？もしかして寝てた？」

「ん…、うん…。」

寝起きなので声の主を誰か理解するのに時間がかかってしまった。

「今日泊めてよ。」

「えっ…？」

「ダメ？」

「んっ、いいけど…。」

「ありがとう。あつ、電車来た！10分後くらいにはそっちの駅に着くから、着いたら電話するね。」

「んっ、」

それで電話を切られた。

フワーツ…って、まったく…人が気持ちよく寝てたのに…、って、んー！？今『泊めて』って言った？って…、ウチに泊まるってこと？はあ？マジか？あいつは何考えてんだ？どうしよう…、今から断るか…？って今何時だ？6時…。俺は何時間寝てたんだ？あーそんなことより三崎だ。適当に理由付けて電車のある時間までには帰らせよう…。いや、他にもっといい方法ないか…？

トゥルルルル…

「今、駅に着いたんだけど、こっからどうやって行けばいいの？」

「あー、今向かってるとこ。もうすぐ着く。北口にコンビニあるからそこで待ってて！」

「分かった。北口ね。」

俺は駅に向かって歩いていった。最悪泊めてもいいが、まずは水際作戦に切り替えたのだ。ウチまで連れて行かないこと…、まずは晩飯でも食べて、次にカラオケかネットカフェでオールに持ち込む。うん、このプランだな。

でも予想に反して彼女は大荷物だった。

「旅行…に…でも行くの…？」

「違うよ。親父に家から出された。」

「へっ？」

「だから、単身赴任中の親父がゴールデンウィークってことでウチに帰ってきて、私の格好見て激怒して大喧嘩。」

「大喧嘩…？」

「『親から貰った身体を勝手にいじって女の体になんかにしやがって！顔だつてそんなに変わって…』出て行け！！』って具合。お母さんもかなり怒られちゃってさ。で、お父さんが単身赴任先に戻るまで、家出することにしたの。だからしばらくよろしくね。」

「『しばらくよろしくね』って…、それで俺のとななの？」

「いいでしょ？他の友達のとことと…、なんかホラっ私って自分で言うのもなんだけど、最近敬遠されてるっていうかキモがられてるじゃん？」

「キモがられる？そうなの？」

「そうだよ。んーってそうか…、そうゆうのって本人じゃないと気付かないよね。」

まったく気付かなかった。逆に三崎が意識し過ぎてるのだけなのではなからうか？

「始めのうちは興味本位なのか色々と聞いてきたりチャホヤされた感があったけど、結局は変態扱いっていうか…変な目で見られてるっていうか…。しまいには『エッチしょ！』とか言われちゃうし。」

「そう…。」

うーん、『エッチしょ!』か…。男の生態ってよく分からないな…? 男から女になったのでもやりたいって思えるのか…? 三崎くらい可愛い感じだと“有り”なのかな…?

「まあ、始めっからそうゆう事言う人もいたけどさ…。だからさ…、なんていうか男友達のところは危ないし、女友達からは距離おかれる感じだから、泊まるとこないでしょ?」

「そんなことは…、」

でも実際はどうなのだろう? 去年までのグループ内の三崎らの距離感が俺には分からないからなんともいえないが、グループ内の奴らも少し距離をおきだしたのだろうか?

男友達も…元男を泊めたら回りから変態扱いされる可能性もあるか…。女友達なら…? 女友達も微妙かあ…? 気にしない奴は気にしなそうだけどな…。

「だから消去法で自然と由宇のトコしかいないって結論に至ったわけ。」

「はあ…。」

「美穂さんだっけ? その人が来る時はネットカフェでも行くからさ。お願い!」

「いや…、」



美穂さんが来るとすれば今のところ水曜もしくは土曜だ。結構流行ってる美容整形クリニックみたいで、土日は日帰りのプチ整形のオペが集中して基本的に忙しいみたいだ。一応木曜日に休みをもらってるらしいのだが、だいぶストレスが溜まっているみたいだ。

俺がホストクラブで働き出してから、欠かさず水曜に来店しラストまでいてアフターのパターンなのだ。単に次の日が休みだからだろう…。しかもマッキーがいなくなってから水曜は、今の所2週連チャンでお泊りしてる。それで先週初めて土曜に来たのだが、シラフだったからかその日は大人しく帰ってくれたのだ。で、今日もその土曜日なわけで…、

「そつえば、今日バイト休みなの？」

「えっ？あつ、そうそう。」

三崎には“俺は予定のない限り店に出てる”ということにしている。

三崎はグラドルみたいで誰もが振り返るくらい可愛いのだが、なんとなく敬遠してるのだ。

最近分かったことがあって、グループ内の女の子の片方が、どうも三崎の事を好きだったみたいなのだ。

それが休み明けに三崎が性転換していたものだから、気が動転して大変だったとのこと…。

好きだった男が今や自分と同じなりをしているのだ。しかも自分より可愛く魅力的なボディラインを兼ね備えて…。そんな三崎といきなり編入してきた俺が仲良くしていて、そいつも芸能人に似てカッコイイ…。ム力つく矛先を何処に持っていけばいいのやら…。って具合らしい。それもあって距離をおかれてるのかもしれない。

「ふん。」

「昨日、先輩方のお客さんがほとんどシャンパン頼むから、新人の俺達が飲まなくちゃならなくてさ…、」

「それで飲み過ぎちゃったわけだ？」

「だね。」

「それで休みもらったの？」

「そつ、そつ。」

「随分融通効くんだ？」

「看板ホストってわけじゃないから。」

「ふん。」

まったく…、ゴールデンウィークごときで、単身赴任先から帰ってくるなよ…。はあ…、ゴールデンウィークか…。

本当なら今頃、和也が東京に出てきてラブラブしてるはずだったんだけどな…。って、それだ！美穂には以前、田舎に恋人がいることを話した事があった。その恋人がこっちに遊びに来てるって言えばゴールデンウィーク中は美穂はここに寄り付かない！

いや、それだと休みの間三崎をずっと置いてやってもいいことになる…？いや、このことを三崎に言わなければいいんだ…。

「由宇？」

「…ん？」

「さっきから一人で何ブツブツ言ってるの？」

「えっ？ いや、ちよつと考え事。」

「ご飯作ってあげるからスーパーに買い物行こうよ。」

「へっ？」

「最近お母さんに料理教わってるんだよねー。腕試したいから感想言ってるね。」

「いや…、」

「さっ、行くよー！」

俺のプランが…崩壊していく…。

結局、マンションのキッチンには三崎が立っていて何かを作っている。包丁の扱いは、最近料理を教わり始めたと思えないくらい上手だった。

俺はそんな三崎をおいといて部屋へと移動した。プラン2だ…まずは美穂へのメール。内容は『地元から彼女が遊びに来てるから、ゴールデンウィーク中は会えないけどゴメンね。彼女が帰ったら連絡します。』と、嘘のメール。でも、これだけ送っておけばまずこのマンションには来ないだろう。

今年のゴールデンウィークは次の水曜までだから、三崎のお父さんも水曜日までには帰るに決まってる。そうなれば三崎だって水曜には帰るに違いない。その日、俺がバイトから帰ってきた時に三崎はいないということになるだろう。

連絡しなくても、美穂はいつも通り水曜に店に来るだろうか？っていうか俺もお金貯めて早くここから出よ…。でないとなんか変になりそうだ。

それによくよく考えればバイトをするにあたって、履歴書の性別欄を男にしたところで別にたいしたことないのではなからうか？身辺調査をするわけでもないし、俺が通っていたのは男女共学の高校で女子高というわけではない。履歴書に〇〇女子高卒業と書くわけではないのだ。

「ちょっと由宇ー。」

キッチンで三崎が俺を呼んでいる。

「何ー？」

「何してるの？」

振り向くとそこにはお玉を持った三崎が立っていた。そんなに広いマンションじゃないが、いつの間にドアのどこまで来たんだ…？

「何って…、」

「怪しいな…。」

「何が？」

「携帯電話にぎって何してるの？」

「何って…これはだな…、」

う…ヤバイ…なんてごまかそう…、って別に三崎と付き合ってるわけでもなんでもないんだから、何してようが問題ないか…？

「あつ、あれだよ、あれ！営業メール！“また店に遊びに来てよ！”みたいな…。」

「ふーん。あつ、そう。それ終わったら手伝ってね。」

そう言っただけで部屋を出て行った。フツ…。っていうかさっきのメルだけでも消去しておこうかな…、でもさすがに俺の携帯黙って見たりしないか…。

そうだ！ここはいい機会だから俺と三崎の関係をはっきりさせておこう。俺と三崎はただの友達。それ以上でもそれ以下でもない。いや…、あの“薬”の秘密を共有してるといった意味では、戦友と

「うー、仲間というか…」

別に深い関係になってもいいのだが、三崎とは今の所そうゆう感じじゃない。それに、これ以上そういった人がいたら身が持たなそうだ。そう決意してキッチンへと向かった。

「何手伝つたらいい？」

「あー、うん…、いや、やっぱ別にいいかな。座つてて。」

「分かった。」

さっき『手伝つて』って言わなかったか？内心“何だそれ？”と思いつつソファーに座った。そこでメールを受信した音が鳴ったのだ。三崎の痛い視線を感じながらメールを開くと、予想と反して違う人からのメールだった。

予想では美穂からの返信だと思っていたのだが、グループの中にいる子からのメールだった。それも“相談したいことがあるから今から会えないかな？”という内容のメールだ。

「お客さんから？」

「いや、貴美ちゃんから。」

俺は素直に答えてしまった。ちなみに貴美ちゃんとは、同じグループにいる中森貴美子で、三崎のことを好きだった方の女の子だ。

「貴美ちゃん？なんだって？」

「いや…、相談乗って欲しいから会ってくれってさ。」

「ふん。由宇に相談ってなんだろうね？」

「さあ…、」

って、三崎の事だろ！と言ってやりたいのを我慢した。三崎が男の時は鈍感な奴だったんだろうな…。

「分かった。あれじゃない？また由宇に告白したい子がいて仲介頼まれたとか？」

「ゲッ！また…。」

確かにそんな事も以前にはあったが、今回は違っだろう。

「いつ相談に乗って欲しいって？」

「いや、バイト終わりで駅にいるらしいから、ちょっと行ってくるよ。」

「えっ？今から？」

「そう…だね。ほら、確か貴美ちゃんのバイト先ってその駅ビルの何とかっていうケーキ屋だったろ？」

「あー、そうだね。」

「ちょうど閉店時間じゃね？」

「まだ早いでしょ？んーそうだ！貴美ちゃんも呼んじやいなよ！私も相談乗っちゃう！」

「あんな…。」

「何？」

「三崎に相談出来る事なら始めっから俺じゃなく三崎に連絡するだろ？付き合ってた俺より1年長いわけだし。」

「そう…だね…。」

「グループの新参者の俺だから言える話だってあるだろ？」

「そう…？」

「あー、っていうか三崎に関しての相談の可能性だってあるわけじゃない？」

「私の…、」

三崎は思い当たる事でもあるのか、急にトーンダウンしてしまった。

「とにかく、行つて来るから飯は一人で食つてくれ！」

そう言つて、財布と鍵と携帯電話を握りしめ玄関の方へ向かうと三崎も玄関まで付いてきた。

「『一人で食つてて』ってひどくない？二人分つくっちゃったし！」

「三崎には経験ないかもしれないけど、女の子の相談つてのは長い



んだよ。なんなら先寝ていいから！あと俺の分はラップして冷蔵庫突っ込んでおいて！」

「なっ！？」

「それに俺達って付き合ってるわけでもないし、俺が誰と会おうと関係ないだろ？蒲団は客間のクローゼットの中にあるから。」

やった！言っただけやった！でもちよつと三崎の顔が曇ったような…。

「…。」

「そんじゃ行ってくる！」

そう言っただけでマンションを出た。後ろからは『ちよつと！』と聞こえてくるが、それは無視した。

本来なら貴美ちゃんの方に『友達と会ってるから今日は無理。休み明けじゃダメかな？』と断れば済むはずだった。けど俺の優先順位で、三崎は低いようだ。

そしてメールで『5分で着くから北口のコンビニ前にいて。』と返信し、駅へと向かうのであった。

057 相談2

「よっ！」

「あっ！ゴメンね急に。」

「大丈夫。えーと何処がいい？ファミレス？ファーストフード？それとも…飲み行く？」

「あー、そうだね。ちょっと飲もうか？」

「じゃ、その店でいい？」

「うん。」

そんな会話があつて、俺達は近くにあった全国チェーンの居酒屋に入った。それで二人共とりあえず生ビールを注文。

「二人で飲むのって初めてだね。」

「そうだね。」

「うん…。えーっと…、それで相談って？」

「うん…えっと…、実は三崎君の事なんだけど…」

「三崎ね。」

予想通り三崎の話みたいだ。

「由宇君と仲イイみたいだし、最近の三崎君の事詳しいよね？」

「まあ…そうかな。」

「ちょっと教えてくれるか？」

「うん…、」

「あの…、その…、三崎君ってあれだよ…、全身美容整形したって事だよ？顔もそうだけど、身体も…。」

「ん…？そうだね。」

どう答えていいか分からずそう答えてしまった。

“薬”の事はグループの奴らにも言っていないので、他の奴ら同様に三崎は整形した物と思っているのだ。

「それじゃ、やっぱり下も終わってるのかな…？」

「下？」

「…、なんていうか…その…下っていうか…、下腹部も完全に女の子になっちゃったのかな？」

貴美ちゃんが俯きながら恥ずかしそうに質問してきた。再度確認したかったのであろう。

でもそれ自体は、以前みんなの前で三崎自身が『全身全部工事済みです！』と公言していた。表向きは性転換手術をして変わった事にしただけだ。

「俺もそう聞いているけど？」

「そっか…。」

俺の言葉を聞いて、貴美ちゃんが落ち込んだように見える。

「あー貴美ちゃんさ…、」

「うん…、」

「三崎の事好きだったって聞いたんだけど、それって本当？」

「えっ!？」

「いや、なんていうか、今日だって三崎の事聞きに来たわけだし…、まだ…、」

「…うつ、うん。そっ、そうなの…。春休み入る前に気持ちは本人に伝えたんだ…。」

「マジ？」

貴美ちゃんは軽く頷いている。

「返事は？」

「『少し考えさせてくれ。』って言われた。」

「そっ…、」

「でね。春休み明けたらあんなでしょ！？その…、なんていうか…、グラビアアイドルみたいな感じで…、私なんかより全然可愛くなっちゃって…。しかもテレビに出たって話だし。」

「ああ、テレビに出たのは俺もびっくりしたよ。」

『私より全然可愛く…』って、ところは触れずに会話を続けた。もしパツと見だったら三崎の方を選ぶ人が断然多いだろう。元男って教えても三崎の方を選ぶ奴はいるのではなからうか…？

「だよね…。」

「今更、返事貰おうとは思ってないんでしょ？」

沈黙になるのが嫌で変な質問をしてしまった。結果、貴美ちゃんのキズに塩を塗るような発言だと気付きすぐに後悔がやって来る。

「そりゃ…まあ…。」

顔色が一層曇ったような…。そこにやってきた生ビールを見るや、両手で抱えて半分まで一気に飲み干した。貴美ちゃんって飲める子だったっけな…？それに一杯目なんだから、乾杯してもよさそうなものじゃないか…？

「それだったら三崎なんて忘れちゃいなよ。」

「そつ、そつだね…。」

「そつだよ。男なんていっぱいいるじゃん！」

しばらく沈黙が続いた。なんとも嫌な重い空気になる。するとジョッキに残っていたビールを飲み干し、店員さんを捕まえてオカワリを注文している。

そしてオカワリがくるまで重い空気が二人を支配するのだ・・・。

「ねえ。」

「ん…？」

「由宇君って三崎と付き合ってるの？」

「はあ？そんなわけないじゃん！」

「そうなの？」

「そうだよ。三崎が引っ付き過ぎなんだよなー、ったく。」

「ふ〜ん。でも、そうだよな。由宇君モテそうだし、わざわざニユーハーフと付き合わなくても女の子達がほっとなかなそうだもんね。」

「まあ…。」

貴美ちゃんはさっきの三崎の話のショックがあるようで、たまに話が途切れ沈黙する。

でもどうなのだろう？もし三崎の下腹部が男性器のままだったら、貴美ちゃんはまだ三崎と付き合えたのだろうか？そう思うと不思議な質問だった。

「そつだ！三崎、親父さんと大喧嘩したらしいよ。」

「えっ？」

「単身赴任先から帰ってきたお父さんが、三崎の女の子になった姿を今回初めて見たらしくって、大喧嘩したらしいよ。」

「えっ！？お父さんに言わないで手術したって事？」

「あつ、えっ…、うん。そうみたい…。」

「言わない方がよかったか…？」

「ふーん、なんかすごいね。でも、お父さんが激怒するのも分かる気がする。久々会った息子が娘になってたら、怒るっていうよりびつくりして…。」

「だね…、でも帰省直前に親戚から電話で『テレビで司が女の子の格好して出てたけど、いつからあんな風になったんだい？』って色々質問されたらしい。で、帰ってきて実際に喧嘩になったみたいよ。」

「そう…、それっていつの話？」

「えっ！？えーっと、今日？今日かな？」

「俺はどうやら言わなくてもいいことを言っていたようだ。」

「へーっ…、三崎君は由宇君にはそうゆう連絡してくるんだ？」

「だね…。」

「ふうん。それで、大喧嘩のあとどうしたの？まさか家出して『由  
宇君のどこ泊めて！』的な事言ってきたとか？」

「げっ！？おっ、女の勘ってやつ？鋭過ぎる…。」

「だね…。」

「えっ！？当たり前？」

「それには頷いて応えた。」

「えっと…、それで泊めるの？」

「うっ、うん…。実はもうウチにいるんだよ…。」

「嘘！？」

「マジ。」

「えっ、じゃあ帰ってあげなよ。待ってるってことでしょ？」

「いやー、それは大丈夫だよ。それでちょっと扱いに困っててさ…。」

「困ってる…？」

「まあ。」

「迷惑だったらなんでOKしたの？断ればよかったじゃん？」



「そうなんだけどさ、泊まるとこ無いって言うし、夕方だから暗くなるし危なくなる時間だろ？」

「危なく…？元男なんだから平気じゃない？」

確かにそうだが、今の三崎は完全に女性なのだから、腕力はその辺の子と大差ないだろう。

「そうなんだけどさ…、今のあいつ理解してやれる奴って少ないじゃない？」

「そう…だね。」

「だろ？」

「それで？いつまで置いてあげるつもりなの？」

「いや、それはまだ話してないけど、親父さんが帰るまでいるつもりなのかも…？」

「そんなのダメだよ！親子なんだからいつまでも喧嘩したままじゃ…。身体は…、身体はもう元に戻らない状態なんだろうし、いつかはお父さんにも理解してもらわなきゃでしょ？」

「ん…そうだね。」

いや、元に戻る薬はいずれ先生に作ってもらわないと困る。

そういえば三崎の家ではどんな話し合いがされたのだろう？薬の話は親父さんにしちゃっただろうか？もし三崎本人が話してなくて

も、あのおばさんならあつさり話してそうだ。

「だったら早い段階で話し合って、和解しなきゃダメだよ。」

「明日にでも返した方がイイって事？」

「出来れば。」

「多少時間空けた方がお互い冷静になれると思うけどね。」

「そうだけど、由宇君は三崎君がいて扱いに困ってるんじゃないの？」

「げっ！そうだ！そうだった。」

「そっ、そうなんだよ…、困ってるんだよ！どうすりゃいいかな？」

「今日はしょうがないにしても、明日家に帰したら？」

「そっ、そうしてみるよ。」

てな具合で三崎の話に始まって、グループの仲間の話やら家族の話やら色々と思痴を聞いてやったのだ。どうやら貴美ちゃんはそうとうストレスが溜まっていたらしい。

それにつまみも美味しいのかどんどんお酒が進んでいく…。そしていつしか俺まで貴美ちゃんの飲むペースにはまっていくのだった…。

## 058 曖昧な記憶

ん…、朝か…？んっ…頭、痛っ…。あーそうだ、昨日貴美ちゃんとしこたま飲んだんだ…。3件目の店のあと…、んー記憶が曖昧だな…、あれっ！？えーっ…ここは何処？

「ふわーっ…、由宇君おはよう。」

「えっ…？」

寝返りをうち反対方向に体を向けるとそこには…

貴美…ちゃん？

そこで始めて同じベッドに貴美ちゃんと寝てることに気付いた。貴美ちゃんの方を凝視する…そして俺の方も確認した…。

はだか…、

じゃなくて安心した。

貴美ちゃんは昨日着ていたパーカーをそのまま着て寝ていた。なんとか友達の一線は守れたようだ。

男になってエッチが好きになった俺なら、酔っ払った無意識の状態で貴美ちゃんを襲いかねない…。でも今回は大丈夫だったみた

いだ。節操なしの俺でもアルコールの力には敵わないらしい。

「おはよう。」

「うつ、うん。」

っていうか近っ！そう感じて離れようとしたら…、

「うわっ！」

ベッドは狭く、俺は“ドスン”という音と共に、掛け布団を引きずりながら呆気なく床へと落ちてしまった。

「痛っ。」

「だ、大丈夫？」

ベッドの上から顔を覗かせながら貴美ちゃんが聞いてきた。

「ハッ、ハハハー、大丈夫。」

「まったく…、なんか食べる？って言ってもパンとタマゴくらいしかないけど。」

「あー、ありがと。」

「じゃ、用意するね。」

そう言ったと思うと急に『キヤア。』と言ってシーツを取り外して自分に巻き始めたのだ。ん？どうした…？

「由宇君さ…、」

「うん？」

「そこにあるスカート取ってくれるかな…。」

「えっ…、あー、うん。」

どうやら貴美ちゃんの下半身はパンツの状態らしい。でもスカートの傍らには俺のジーパンも丁寧にあたんで置いてあった。あれっ？俺も下着…？あれっ？もしかしてなんかしちゃった？

「…はい、これ。」

「ありがと…、えーと…、ちょっと向こう向いててくるかな。」

「えっ？あー、はいはい。」

そんなの別に気にしないのに…、と思いつつ、後ろを向いてそばにあった姿見の鏡で、貴美ちゃんのスカートを着る仕種をチラッと見てたり…。

「いいよ。」

そう言つて貴美ちゃんは立ち上がると、キッチンに行く途中に俺のジーパンを取ってくれた。

ところでなんでお互い下着だったのだろう…？襲おうとしたけど、途中で力尽きて寝ちゃった…とか？

ジーパンのまま寝る習慣も無いが、パンツだけで寝る習慣もない。

はて…？自分で脱いだのか？それとも脱がしてもらった…とか？

「あのさ…、」

「由宇君…、」

ちょうどハモるようにして言葉を発して、お互い『先どうぞ…』なんて譲り合ったりして…。

「由宇君から先に言ってよ。」

「ああ…、えつと、じゃあ一応聞くけどさ……なんかした…？」

「えっ？」

「いや、だから俺、貴美ちゃんに何かやらかさなかったかな…っと思ってさ…。」

記憶にないものは仕方ない。でもクリアにしておきたいのだ。

「まったく…、何もありませんでした。何も…。」

「ホントに？」

「えーホントです！」

何やら一瞬声が大きくなって、更に不機嫌な感じで言われた気がする。

「ホントに？」

「しつこいな…。」

あれ…？前にも増して不機嫌？なんかしちやったかな…？いや…、逆に何もされなかったから怒ってる…とか？

でも何かやらかしちやったとしても、あっちが何も無いって言うてるからにはそれに甘えておこう。うん。俺って平和主義だし。

「布団、ベッドの上に乗っけておいてね。」

「うん…。」

その時、貴美ちゃんの携帯電話が鳴った。

「誰だろ？」

そして貴美ちゃんは『あー麻衣だ。』と言いつつ玄関の方に移動しながら電話に出た。

麻衣とはグループの一員のもう片方の女の子で金子麻衣のことだ。スラッとした体型でいつもお姉系のファッションでキチツとした感じだ。

みんなで何回か飲んでいるのだが、どうもこの金子麻衣とはまだ馴染めてない。馴染めてないのだが、廻りの人間が“麻衣”と呼んでいるので俺もそう呼ばせてもらっている。

その金子さんと玄関先で話始めたと思ったら、今度は俺の携帯電話が鳴った。

俺はそんなに焦っていなかったのだが、玄関の方で貴美ちゃんが『いや、誰もいないよ。テレビ、テレビ。いやだなー…、』などと言っている。

そんな事聞かされた俺は、黙って携帯電話を持って静かにベランダへ出るしか出来なかった。そしてそのベランダで電話の相手と話

始めた。

「電話に出るの遅いぞ!」

「ゴメン。若干取り込み中で。って久々電話してきてその言い方は無いでしょ!」

「悪い悪い。でも取り込み中ならかけ直すよ。」

「いや、ちょっとなら平気だよ。」

すると部屋の中からガラスをノックする音が聞こえたので振り向くと…そこにいたのは…

麻衣…?

な、なんで麻衣がここに…?その後ろで申し訳なさそうに貴美ちゃん  
が立っている。

「マツキー…、」

「ん?」

「悪いけどかけ直す。」

そう言っ  
て俺は電話を切った。



「田丸由宇君。」

「…はい。」

なんか、久々にフルネームで呼ばれた気がする。でもこの場合の呼び方には敵意が感じられる。

「朝から貴美子の部屋のベランダで何してんのかな？」

「いや、何って…？」

「田丸由宇！」

「はい。」

「確かあんたは4月の時点で『地元に彼女がいる』的なこと言っ  
てなかった？」

「はい…。」

確かに言ったのだが、それはその方が何かと都合がいいと思っ  
ついた嘘だ。

「それが何？浮気？それもよりによってなんで貴美子なの？」

「いや…、浮気なんて…何もしてないよ。貴美ちゃんからも何か言  
ってやってよ…。」

「田丸由宇！」

「はっ、はい…、」

「じゃあ、あんたの彼女が男友達のとこ泊まって『何も無かった』って言ったら信じるの？怒らないわけ？」

「そりゃ…、」

俺には今、恋人と呼べる存在はいない。ここで俺は想像してみた…、もしマッキーが誰かに抱かれてる…というところを…、無意識にマッキーだった。和也や他の誰でもなくマッキーだったのだ。

なんだろう…？なんで今マッキーだったんだ…？

「田丸！」

「はっ、はい…。」

「麻衣ホントに大丈夫だって！ホント何も無かったし、由宇君ちょっと飲み過ぎちゃったみたいだから泊めてあげただけだし。」

「ホントにそうなの？」

「それに由宇君は、すっかり記憶ないみたいだし…。」

「ホラッ！だから何にも無いって言っただろ？」

「そうゆう問題じゃない！」

んー…、麻衣は友達想いなのか…？それにしても、いつもクールなイメージの麻衣なのに、なんだか今日は熱い感じだ…。

あー分かった。この手のタイプは、男が合コンとかに来て欲しくないタイプの子だ。妙に仕切ったり、時には友達風吹かして『あんな男止めときな！』とか言っちゃうタイプだ。要はなんだか自分が一番に持ち上げてくれないと嫌な質なのだ。

短大の友達にもそんな子いたな…。『今度飲み会する時はあの子抜きでお願いね。』なんて何度言われたことが…。

「じゃあ、コレは何？」

「あつ…、」

そう言っただけ麻衣の右手が持ち上げたのは、俺のジーパンに付いたはずのベルトだった。

「これって由宇君のだよな？」

「それは…、」

「あー、それは私が取ったのよ。」

「貴美子が？」

「そう…、寝る時ベルトなんかしてたら苦しいかな…と思ってさ…。」

「そう…、」

ホッ…、なんとか切り抜けそうだな…って、やっぱりジーンも貴美ちゃんが脱がしたのか？すっかりたんであったし…。しかもさっき『由宇君は、飲み過ぎてすっかり記憶ないみたいだし…。』って言ってたよな…。『由宇君は』ってことは貴美ちゃんは記憶あるってこと？

「まーそこまで貴美子が言うなら許してやるか！」

なんか理不尽さを感じながらも、この先この話題に俺から触れるのは避けようと心に決めたのだ。

「あーところで由宇君さ、」

「はい。」

「私も三崎君のこと詳しく聞きたい！昨日貴美子に話してくれたんでしょ？」

「あー…、うん。」

二度手間だ…。貴美ちゃんと俺が昨日会つのを知ってたならなんと一緒に来ない。

「今から二人共俺ん家来ない？」

「なんで？」

「あー、貴美ちゃんには話したんだけど、昨日からウチに三崎が来

て泊まってるんだよ。だから今もいるはずだから直接聞いてくれる？」

「なんで？なんで三崎君が由宇君ん家にいるわけ？」

こうして二度手間ながら三崎家の親子喧嘩の事を説明していくのだ…。

「成る程ね…。でもあれだ由宇君は三崎君を一人ほったらかしにして、貴美子と飲み明かしたわけだ？」

「そうだね…。」

「でもなんでホストの由宇君が飲み潰れてるの？」

「そう…だね…。」

確かに不思議だ…、いくら貴美ちゃんのハイペースに付き合ってた飲んだからといって、普段からホストで慣らされてる俺が潰れるなんて…。

いや、確かにたまには酔い潰れることもある。あるがプライベートで飲んだのだから多少ブレーキをかけながら飲んでたはず…。知らない間に変な薬とか飲み物に混ぜられたとか…？ってそんなこと貴美ちゃんがするわけないか。

「あー、それじゃ着替えたり準備してくるから20分時間頂戴。」

「えっ？あー、うん。」

そう返事をする、麻衣は出ていってしまった。

そういえば普段カチツとした服装の金子さんが、今は部屋着とい  
うかジャージ姿で…よくよく思えばスッピンだったような…。

「えーとき、麻衣って…？」

「あー、うん。隣の隣に住んでるの。」

「隣の隣？」

「うん。たまたま同じマンション契約してたの。ここって1Kのマ  
ンションで手頃な値段だから学生が多いみたい。」

「そうなんだ。」

それで仲がいいのか。洋服の趣味がバラバラな感じのこの二人が、  
なんでいつも仲良くつるんでるのかと疑問だったのだが、やっと腑  
に落ちた。

「ゴメンね。さっき由宇君の電話が鳴ったのごまかしきれなくて…。

」

「いや、それは大丈夫だけど、一つ聞いていい？」

「うん…。」

「麻衣はなんで三崎のこと気になってるの？」

「えっ！？…。私が告白したの知ってるからかな…？」

「相談したんだ。」

「まあ…、でもあれじゃない？三崎君が体をいじったことに興味はあつただけで、中々本人と話す機会が無かったから色々聞きたいとか？」

「そう…？」

廻りの同級生同様、興味本位的な感じなのかな…？と、この時はそう捉えておいた。

そして着替え終わって戻ってきた麻衣は、化粧もしてあつていつもの金子麻衣に変わっていた。

「じゃ、行きますか。」

「はい。」

「うん。」

俺が帰ってきたことを察知した三崎が、玄関まで出迎えたくれた  
…というより、連絡しないで外泊したことに文句を言いたかったの  
だ。

リビングのドアを開きながら『たく！由宇は何時だと思って・  
・』そう言いかけて固まったのだ。その時の驚いた顔は印象的でそ  
うそう簡単に忘れられそうにない。  
やっと帰ってきたかと思いきや、後ろに貴美ちゃんと麻衣を引き  
連れてきたからであろう。

「おはよう三崎君！」

「…。」

麻衣の挨拶にも反応出来てない。

「三崎君？」

「あつ…、おつ、おはよ…」

「あー三崎さ、なんか二人が三崎の話が聞きたいって言うから連れ  
てきた。本人と話した方が早いかなと思ってさ。」

「えっ…、」

いかにも浮かない表情というか、拒絶してるかのような面持ちだ。  
そういえば、あまり気にしてなかったが、グループ内で三崎とこ  
の二人が話してるのをあまり見た事ない。男友達の方とは普通に話



してるのに、考えてみれば不思議だ。

講義は俺の隣のことが多いし、移動の時といえは何かと俺に引っ付いてくるし…。

三崎の方が女性陣を意識しちゃってるのかな…？っていうか女性陣の方も意識してるのか…？

「お邪魔します。」

「どうぞどうぞ。」

麻衣の方は三崎と話をする気マンマンらしいが、貴美ちゃんの方はあまり乗り気じゃないらしい。三崎を嫌いになった訳ではないのだろうが、やはり複雑なのだろう。流れで付いて来たはいいが、さつきから言葉を発せないでいる。

「今、お湯沸かすからソファーにでも座っててよ。」

「分かった。って、テレビおっきいねー。高かったでしょ？」

「まあ…」

俺が買ったわけじゃないから知らないが、おそらく高かったであろう。そう答えつつキッチンに入りケトル取り出し水を張って火にかけた。

リビングから『ちょっと貴美子、景色いいよ。貴美子もこっちきて見なよ。』などと聞こえてくる。

するとキッチンへ三崎が入ってきた。

「ちょっと由宇。」

「ん？」

「連れてくる前に連絡くらいしてもいいんじゃない？」

「連絡したら三崎が逃げるかと思ってさ。」

「んっ…、」

「だろ？」

どうやら凶星らしい。

「それに最近あの二人とはまともに話してないんだろ？」

「…うん。」

「貴美ちゃんにはコクられてたみたいだし、」

「聞いたの？」

「まあ…」

それ以外考えられないだろ？と思いつつ、そこに突っ込むのは止めといた。

「麻衣とは？麻衣とはなんかあった？」

「えっ？」

「いや、だから…」

「麻衣からもなんか聞いたの？」

「いや、麻衣からは何も聞いてないけど…。」

やっぱり麻衣との間にも何かあったのか…？と、勘繰ってしまう。

「そうか…。いや、麻衣とは何もないよ。」

「そう？あーそうだ。俺ちよつとこのあと抜けるわ。」

「抜ける？抜けるって？どっか行くってこと？」

「あー、いや、電話一本するだけだよ。」

「電話？」

「うん。さっきマツキーから電話あつてさ、折り返しこつちからかけ直すことになってて。」

「電話なら中ですればいいじゃん？」

「玄関のすぐ外でかけるからそんな心配すんなって！すぐ戻るから！」

「う…うん…。」

「じゃ、お湯頼むな。」

そう言つて紅茶と砂糖を用意してあとをお願いした。

「早く済まして戻ってね。」

「はいはい。あつ！そうだ。」

「何？」

「薬の事なんだけど…。」

「分かってる。言わないって！」

「あー、うん。そうだね、お願い。じゃなくて、お父さんには話した？」

「あー…、お父さんね…。私は話してないけど、たぶんお母さんが話しちゃったんじゃないかな…。」

「そっか…。」

下を向いて申し訳なさそうにしてたので“大丈夫”の意味を込めて頭を軽く撫でてあげた。

「すぐ戻る。」

三崎と麻衣がどんな話をするかは気になるが、マッキーからの用件も気になっていた。そんな俺は玄関を出る前から携帯電話を操作し、マッキーへと発信したのである。

「随分取り込んでみたいだな？」

「えっ？つて出るの早くない？ワンコールしてないじゃん？」

「あー、ちよつとメールしてて、入力してたら受話しちゃったみたい。」

「成る程ね。つて、それより第一声が嫌味ってどうなの？」

「ハハハーツ、まあ、そんなことより三崎知らねえ？」

「えっ？」

「いや、朝から三崎のお母さんから電話あって、あいつ家出したらしいんだよね。」

「あー三崎ね…、」

一瞬、ホントの事を言おうか迷ったが、

「ウチにいる。」

「やっぱり。」

「やっぱり？」

「だってあいつバイトしてないだろ？」

「あー、うん。」

「所持金は月の小遣い程度だろ？」

「そうなんだ…、それじゃ、ずっとマンガ喫茶ってわけにもいかな  
いってことか…。」

「だろうな。それに女に変わったのを理解してやれる友達だって少  
ないだろうし。」

「そうだよね…。」

「でな、お母さんが『連絡ついたら家に帰ってくるように伝えて』  
って頼まれたんだけど、由宇から言って貰える？」

「えっ？あつ、そう。へー、分かった。言っとく。」

お父さんは話し合う態勢になったのだろうか？それとただ単に  
子供が心配なだけ？

「それと、話変わるんだけど、」

「うん。」

「先生から“女から男に変わりたい子を探して欲しい。”ってメー  
ルがきてさ。」

「えっ？今なんて？」

「だから…」

そう言ってメールの内容をもう一度言ってもらった。

「それってまさか…？」

「あー、うん。花音と同じ時に映像資料取りたいらしい。」

「……。」

先生もそうだがマッキーもどうかしてる…。どうも研究熱心というか、実験感覚というか…。でも仕方ないのか…？

「由宇？」

「あー、うん…、聞こえてる。」

「そう。そんな子廻りにいないかな？」

「どうだろ…？表立って“私男になりたいんです！”って宣言してる子なんていないんじゃない？」

「そうだよな…。」

「それこそ花音が愛ちゃんに聞いてみたら？」

「知り合いでいるかな…？」

「いるんじゃない？」

「でもな…。」

「何？」

「あの業界って、噂広まるの早そうじゃない？いくら愛ちゃんが上手く言ってくれたとしてもさ…」

「うん…、確かに…」

「だから由宇もさ、廻りでそれっぽそうな見つけてくれないかな？」

「それっぽいつて…、まあ…、気にかけてみるけど…」

「頼んだ。そんじゃ、また連絡する。」

そう言って電話を切られた。

それにしても、そんな事頼まれても見当つかない。短大の時、女の子が多いこともあって『あの子達レズってるらしいよ』なんて噂が耳に入ってきたこともあったが、他人の俺に真相なんて全く分からない。まさか『君達レズなの？』なんて冗談でも聞けないし。

仲のいい女同士か…。そう思うと、ふと家の中の麻衣が気になった。さつき貴美ちゃん部屋の部屋で俺に対して言葉がきつかったのは、俺にヤキモチ妬いてたとか…。それは無いか…。恋の相談も受けてたくらいだから…。

とそう思いつつ、その事が頭を離れないのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5619e/>

---

氷室研究所

2010年10月8日21時25分発行